
原作破壊命令

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作破壊命令

【コード】

N0286L

【作者名】

深海

【あらすじ】

突然死んでしまったお気楽主人公。神様たちが引き起こした歪みを直すために、『ゼロの使い魔』をブレイクせよ！

初投稿です。原作ブレイク、超ご都合主義、多重クロス、亀以下の歩み成分を含みます。これらの成分にアレルギー反応をお持ちの方はご注意ください。

プロローグ／世界修正計画発動。原作を破壊せよ！（前書き）

はじめまして。深海です。

この度は拙作を開いてくださり、まことにありがとうございます。
初投稿で御見苦しい点もあるでしょうが、読んでいただけると幸いです。

プロローグ／世界修正計画発動。原作を破壊せよ！

光の中、とでも表現すればよいのだろうか。

前後左右、上下でさえも白で埋め尽くされており、視界の全てに自分の影さえない。

光があるくせに、影のない世界。あまりにも変だ。

ここは一体どこなんだ？

「私の領域だよ。人間」

独白の問いかけに答えるものがあつた。見回してみても姿はなく、声も妙にエコーが掛かっている。

そういえば俺の声もなんだか妙な感じだ。喋ってるのか考えてるのか区別がつかない。

「私は魂の管理者。命の流れを司るもの。故に、その乱れを修正するもの」

神様のな何かか？俺はなぜここに？

「そうだな、人間の概念きみたちで言うなら、死神の一種にあたるだろう。さて、君がここにいる理由だが、実はしばらく前から命の流れに歪みが生じてしまっている。その影響で本来流れの中にいるはずの君の魂が零れ落ち、私のところにたどり着いた」

随分と回りくどい言い方をする自称・死神。声には威厳を感じるんだが、語調がなんかフランクだ。

「つまり、誰かが運命げんさくを捻じ曲げて世界を無理矢理増やしてしまっ

た影響で、君は死亡し、世界から消滅した。今の君は肉体がないから、思考を向けることで意思疎通しているのだよ」

おお、それは分かりやすい。……っておい！

「調査の結果、創造神級の存在が魂の位置を強引に変更してしまっていることが分かった。本来この歪みの修正は私の職務なのだが、私より上位の存在が起こした干渉には手出しできない。歪みの二次的、二次的影響に対しても対応が取れない。つまり……」

神様、人の話聞いてくれませんか？嫌な予感しかしないのですが。

「通常の方法では君の魂を流れへ戻せません。加えて、このまま歪みが加速すると君のように世界から零れ落ちる魂が増加し、最終的にはこの『神の世界』を含めたあらゆる世界が崩壊してしまう」

世界の危機とか教えるなよ。嫌な予感が膨れ上がるだろ！？

「そこで、記念すべき脱落者第一号である君に、ぜひ協力してもらいたい」

記念とか脱落者とか言うな！ただの事故だろが！

「言葉のあやだから、気にしないでくれ。具体的には、世界を一つ歪めてほしい」

歪める？直すんじゃない？

「さっきも言ったが、今生じている歪みに私が手を出すことは出来ない。故に、別箇の世界の流れを改変することで全体的な歪みを軽

減するのだ」

辻褃合わせしたいことは分かった。それで、その為の力や知識はどうなるんだ？後、俺が歪めるまでの間はどうか？

「うむ。魂を収める肉体を得る為に、君には再度誕生してもらうことになる。歪みについては、君が生まれた時点で流れが大きく変化するから、当分は君のような被害者が出ることはないはずだ。転生後についてだが、能力や精神が肉体の許容量を超えてしまうと危険ゆえ、肉体が自我に目覚めてから記憶や知識、能力を与えよう。なに、君の感覚からすれば三歳児になるだけの様なものだ」

そうかい。で、転生後の指標は？

「より正確を期し、君という存在を介して私が修正を施す為に、出来るだけ大きな影響力を確保してもらいたい。形は問わない」

OK。能力については？

「肉体能力については、人間の枠を超えた力と寿命。特殊能力の方は君の知識や嗜好を吟味して、扱いやすそうなものを用意しよう。使い方も知識と一緒に授けるから、待っていてくれ。君には一瞬だがね。……そろそろ出発して貰えるか」

分かった。いずれまた会おう。

「うむ。行ってくれ。次に君と接触するのは君が死んだときだ」

- - - - -

洪水のような膨大な質量に押し流されるような感覚の中、俺は愕然とした。

行き先と任期を聞き忘れた！？

プロローグ／世界修正計画発動。原作を破壊せよ！（後書き）

というわけで、原作破壊命令が下された主人公です。どうぞ！

「名前がないぞ！」

挨拶をしろ、挨拶を。

名前がないのは当たり前だ。お前は死んで、生まれ変わるんだぞ？
今は名もなき魂だろうが。

「言われてみれば、その通りだな」

そんな理由で、主人公の名前が明かされるのは次回です。

「それはともかく、今回情景描写が殆どなかったのは何でだよ」

肉体すらない光の空間でどんな行動が出来るのか、思いつかなかつた。読者の皆様が文面から感情をくみ上げていただけることを期待して」

「死ねこの無能！」

ぎゃあっ！

「こんなダ作者ですが、ご意見、ご感想お待ちしております！それではまた次回！」

第一話／調査と考察（前書き）

ようやく形になった第一話です。では、どうぞ。

第一話 / 調査と考察

俺の名前はサンガ・ド・シエール。六歳。ド・シエール男爵家の三男だ。

父はオグロン。母はエレニア。ミドルネームは忘れた。

二人の兄と一人の姉がいる。我が家の未来は安泰だな。馬鹿な国が滅びなければ。トリスティーン

ド・シエール男爵領はトリスティーン王国とクルデンホルフ大公国の国境付近にあり、多くの山野を有している。正直に言うと山しかない。経済は主にその山々で採れる鉱物や動植物の取引で成り立っており、領民は皆腕っ節が強く豪快だ。

さて、少なからず知識のある人はとくに気付いているだろうけど、ここは『ゼロの使い魔』の舞台、ハルケギニアだ。中世ヨーロッパに似た文化を持ち、魔法使いが自らを貴族と称して平民を虐げる世界だ。少なくとも俺の目には虐げているようにしか見えん。嘆かわしいことだ。ド・シエール家もご多分に漏れず、領民を見下す傾向にある。

この間両親がラ・ヴァリエールの三女が社交界に出てきたと言ってたから、原作より7、8年前なのだろう。

俺自身について、詳しく述べておこう。

二歳半で前世の魂情報と神様知識を手に入れた俺だが、乳幼児が政治介入などできるはずがない。メイジに『無礼討ち』される領民や蔓延する病気を見ても何も出来ない歯痒い日々を送っている。

この三年半、俺は食いしばった歯から血が出るほどの思いで領地の現状の調査と、自分の能力把握に力を傾けていた。

そうして分かったこの体の能力を、今一度確認しよう。

ハルケギニアの特徴である魔法。地水火風の四大元素に、伝説こと虚無を足した五つの系統がある。原作によれば、現在始祖と呼ばれているブリミル率いるマジ族の遺伝的な能力だそうだ。詳しいことは分からないが、杖振ってイメージ一つで物理法則を軽く無視できる、テキストでチートな技法だ。能力の格付けとして、一度に掛け合わせて行使できる属性の数（重複可）でドット・ライン・トライアングル・スクウェアと言う名前に分けられている。頂点の数がかけ合わせられる数だというわけだ。

俺は五歳の誕生日に杖との契約を行い、魔法に触れた。その結果分かったことは、以下の通りだ。

1. コモン・マジックでトライアングルスペルと同等の現象が起こせるほど精神力の運用効率が良い。原因は学術的観点に基づくイメージの精密さにあると思われる。

2. 四属性全てを問題なく運用できる。エクスプロージョン ツンデレ大爆発でお馴染み虚無の魔法は使えないようだ。

3. 以上二つは周囲に内緒。土メイジということにして、他の系統は隠れて修行することにする。母上が土メイジだし、ゴーレムかつこいいから。……火メイジである父上が拗ねていたが、気にしない。

こんなところだ。天才児だ、なんて担がれたりしたら王家や宗教国家に目を付けられてしまうからな。それに、俺にはもう一つ、ハルケギニアにはない特殊な能力を保有している。

それが神様謹製『機兵の系譜』だ。はつきり言おう。魔法以上のチートスキルである。概要は以下の通り。

1・『機動戦士ガンダム』シリーズに登場する機動兵器、主にMS モビルスーツへと変身させる事が出来る。18メートルの巨体は2メートル程度にサイズダウンしている。見つかるのが怖いのでサイコガンダムとかの巨大兵器は試してない。

2・MSの装甲は、ハルケギニア製の武器や魔法、特に錬金はオクタゴンでも通用しない(らしい。検証不可だが、神様が記憶に刻んだ取扱説明書にはそう書いてあった)。この時点ではほぼ無敵戦士である。怖いのはガンダールヴ並みに近代兵器を操る輩と、質量攻撃に特化したメイジくらいのものだ。

3・携行兵装に限り、変身しなくても召喚できる。サイズは自分の体にあわせて小さくなる。ただし、この場合俺自身の身体能力は強化されない為、砲身が長かったり極端に重かったりするバランスの悪い兵装だと保持できず、結果的に使用できない。

この弱点は体を鍛えれば解決できるだろう。それでもG P - 02の サイサリス シールドは壁運用に限定すべきだな。アレは重すぎる。

4・MSに変身した場合、本来は別のMSに搭載されているはずの特殊なシステムを変身中のMSに適用できる。

5・ただし、俺はオールドタイプである。

6・この能力の使用者は俺だが、効力の対象は俺に限らない。

正直ここが宇宙世紀なら5番はかなりキツイ縛りなのだが、4番で代用も出来るし、ハルケギニアではたいしたハンデにはなるまい。せいぜいビットMSが使えないくらいだが、これは弱点にならない。

なぜなら6番の特性によって、『ゴーレムをMSに変身させる』というトンデモナイ運用法が存在するからだ。つまり、数体のゴーレ

ムをザクか何かにして、S-ガンダムから自立制御AI『ALICE』を引つ張つてくるとか、最初から無人兵器であるビルゴあたりに変身させればビットMSモドキの出来上がりなのだ。ゴーレムを維持する分の精神力は食うが、戦力は数倍になるというまさにチート。一度だけ試したが、最狂の対人兵器ことバグにも変身させられる。真つ先に俺に襲い掛かってきたから二度と使わないけどな！

まあ、どれほど力を持っていても、幼児に出来ることなどたかが知れているのだがね。

例えば、闇にまぎれて盗賊退治とか、人目を忍んで盗賊退治とか、国境越えて盗賊退治とか。どこかのドラ跨また魔法使いも言つてたじゃないか。『悪人人権ありません』って。ましてやここはハルケギニア。人権なんて概念どこにもないんだからな。

俺の隠し財産はここ三年で三百万エキューを超えてる。チート万歳！

……それでも領民が救えないのは悔しすぎるぞ、畜生。

俺は今、自室の窓から町並みを見下ろしている。覚醒してからの日課だ。魔法の修練代わりに巡回させているゴーレムを通じて警備したり掃除したり町の外で畑耕したりと、暇そうに見えて内実忙しいのだ。衛生面や安全面の根本的な対策をとりたくても年齢と立場が邪魔をして出来ないの、ゴーレムの訓練にかこつけて少しずつ対症療法を施そうというわけだ。精神力が削られていく緩やかな脱力感が微妙な疲れをもたらすが、これも修行だ。

「サンガ様。奥様がいらつしやいました」

「母上が？……よし、通せ」

背後にある扉がノックされたのは、畑仕事を終えたゴーレムを土に

還した時だった。貴族は使用人の前で来客を迎えに出てはいけないので、俺はその場からドアに向き直って返事をする。傲慢さに慣れなくて一瞬腰を浮かせてしまった俺は何も悪くないはずだ。

使用人にドアを開けさせて室内に入る人物。先ず目を引くのは俺にも遣伝されている鮮やかな赤毛と白い肌だ。橙基調のドレスに身を包み、表情は柔和と評するに相応しい。現世の俺の母、エレニア・ド・シエルだ。見た目どおり物腰も柔らかく、深窓の令嬢を体現するような人なのだが、この間父上の浮気が発覚した日に発していた黒いオーラは、めちゃくちゃ怖かった。

ちなみにド・シエルでは基本的に乳母を雇わない。四歳の誕生日から世話役がつくが、それまでは出産した本人が（ある程度のサポートの元）育児することになっているらしく、つまり俺はこの母から養分を得て育ってきたわけだ。自覚があるというのは恥ずかしい事だな。

「母上が足を運ばれるとは珍しい。一体何事ですか？」

「……そう、ね」

正直な感想が9割の応答をすると、母上は目を背けて言いよどむ。嫌な予感がするぜ。

「……支度なさい。ラ・ヴァリエール公爵家へ参ります」

「なぜですかの大公爵様と当家の繋がりなど、何もありませんか。確かに、交易のお得意さまではありますが……」

まったく理解できない事態が発生したらしい。公爵様ともなれば思いつきだけで他人を振り回すような真似は、早々しないと思うのだが。母上は理由を知っているようだが、よっぽど話したくないのか、早くなさいと釘を刺して退席してしまわれた。

「……人身御供じゃありませんように」

俺に出来るのは、祈ることだけのようだ。早く一人前にならなけりや、な。

第一話／調査と考察（後書き）

改めてご紹介しましょう、今回ひどいチートを公表しました、サンガ君です！

「設定したのお前だから！」

だから挨拶しろっての。ガンダム変身の能力もちは既出なので、オリジナリティを出そうとしたらこうなってしまったのだよ。

「行き過ぎてる気がしてならない」

チートなんてな行き過ぎて何ぼよ。力があっても改変はまだ出来ないけどな。三男だし。

「せめて嫡男なら、どんだけガキでも何とかかなりそうなんだが。っていうか何でこんな面倒な設定なんだ」

そんなホイホイブレイクしたら原作の設定を流用しづらいし、ロリア勢の登場は少しでも遅らせたいわけよ。

「まあ、連中は面倒だしな」

そんな訳でサンガ君は人身御供に。がんばれよ。

「やっぱりそうなるのか!？」

うん。

「ナンテコッタ」

それではまた次回！ご意見、ご感想。誤字脱字文法違いのご指摘など、お待ちしております！

「……ところで、俺の名前なんだが」

ああ、モンキーダンスは関係ないから、気にしなくて良いぞ。

「やっぱり死ねえっ！」

どわっ！マゼラ・トップ砲で殴るな！痛い！痛い！

第二話ノ婿入り命令と王座決定戦？（前書き）

だいが長くなってしまいました。そのくせストーリーは大して進んでいません。

第二話 / 婿入り命令と王座決定戦？

第一印象は、でかい、だった。王城にも匹敵するような大きさと華美さを持ち合わせたラ・ヴァリエールの屋敷のことだ。ちなみに第二印象は派手、次に無駄である。

俺は卸したての服に着替えさせられ、理由も知らされないまま馬車で二日掛かる此処ラ・ヴァリエール公爵家に連行されていた。道中何度か理由を尋ねたのだが、両親から聞き出せたのは、実は我が家がラ・ヴァリエールの門閥貴族である、ということだけだった。

この状況下でそれだけというのは、何も教えないのとどれほど違うんだ父上よ？

「良く参った、オグロン」

「ご健勝のようで何よりでございます、閣下」

「うむ」

無駄に長い確認やら手続きやらの後に接見の間に通され、父上が髭を蓄えたおっさんに深々と頭を下げている。この人がラ・ヴァリエール公爵か。堂々とした物言いは、まさに王族といった感じがする。尤も、その隣で母上と話しているご婦人のほうがずっと強い威圧感を発しているのだが。流石はハルケギニア公式チート・烈風カリン、伊達じゃないぜ。

「どうかよろしく、お願いいたします」

「悪いようにはしません。それで、この子が例の？」

「ええ。三男のサンガと申します。ご挨拶なさい」

母上が促し、聞きつけた公爵の注意が此方を向くのを待って頭を下げる。

「お初にお目にかかります。サンガ・グレイ・ド・シエールと申します。この度は公爵ご夫妻の御眼に掛かったこと、光栄至極にございます」

「随分と出来た息子だな、オグロン。これならば先方にも暖かく迎えられるよう」

「それゆえに、心配なのですが」

そんなやり取りをしてまた父上が頭を下げる。とりあえず俺も真似ておいた。後ろを見やると、母上が複雑そうな顔をしてカーリー又夫人に慰めの言葉を貰っている。

薄々感じてはいたけど、これはもう決まりだな。うん、人身御供決定。あきらめましょう。でも誰のところへだ？公爵の口ぶりからすると、公爵がどこかと仲介してるみたいなんだが。公爵ほどの人が仲介するとなれば、トリステイン貴族にとっては絶対命令にも等しい。彼ほどの人物がそれを分からずただ仲介を買って出るとは思えないし……まあ、人身御供の本義から言っても、摩かねば危険なほどの大物か、ド・シエールが負い目を感じている者が、だよな？トリステイン貴族の大半が該当しそうな候補が一つあるんだけど、まさか、ねえ？

そのまさかだとは思わなかったよ。

俺がようやく事の次第を知るのはその日の夕方になってしまった。とある国の姫君が俺を傍に置きたいとダダをこねたのが始まりで、それを親馬鹿が財力と権力に物を言わせて父上やその周囲を黙らせ、とうとう公爵まで動かしてしまったそう。

やっぱり何事も金だな。マナーパワーの前には、魔法なんて何の役

にも立たないぜ。

俺も隠し資産増やしておこうかな。まだ幾つか盗賊の被害報告あったはずだし。

話を戻そう。その『とある国』の名はクルデンホルフ。先代のトリステイン王によって大公領を下賜されて始まった新興国家。つまりトリステインの属国にあたるわけだが、元からなのか為政手腕がよかったのか兎に角財力に優れ、仮にも一国の王たる発言力は並の貴族の及ぶところではない。上級官僚でさえ彼らの融資を受けている為、なかなか逆らえないのが実情のようだ。

どっちかというトリステインのほうが属国っぽくないか？

俺の前世記憶によれば彼の姫君の名はベアトリスとかいうはずだ。ティファニアが迫害を乗り越え、周囲に打ち解けだすという演出の為だけに使われた名前があるだけのモブキャラ以下。いかにもテキトーそうな名前の取り巻きもいたな。まあ、どうでもいいけど。しかし、なぜそのベアトリスが俺を名指したんだ？俺が顔合わせしたのはたったの二回。しかも他所の家が主催のパーティーで一言二言、当たり障りのない挨拶を交わしただけの仲だ。どうしたって婚約を申し出られるほどのことはないぞ。ダンスだって踊ってないんだからな。

まあ、分からないことを何時までも考えるのは性に合わないので、この思案は棄却します。

さて、所変わってここはラ・ヴァリエール家所有の練兵場。

俺は杖を持ってカリーヌ夫人と対峙している。一般的なトリステイ

ン貴族の子息とは一味も二味も違つのを見抜かれたのか、烈風カリ
ンに手合わせを望まれてしまったのだ。両親も公爵もかなり拳動不
審に陥っていた。

観覧席には俺の両親、ラ・ヴァリエール公爵、公爵家の武官たち、
そして三人の公女の一番下、原作の主人公がこちらを見ている。誰
も彼も困惑と不安で満ちているな。ちなみに長女は文官たちとクル
デンホルフへの祝いの品の準備で忙しく、次女は言うに及ばず病床
である。

機兵の系譜を使えば余裕で勝利できようが、こんな衆目の面前で使
うのは避けたい。

この模擬線で示す俺の実力も今回の人身御供に、というか俺が去つ
た後のトリスティンに何らかの影響を与えるはずだ。公爵は緘口令
を敷くだろうが。

なんにしても俺にとって今のトリスティンは『興味を持つ価値のな
いゴミ』でしかない。あんまり躍起になって邪魔をされても面倒ご
とが増えるだけなので、噂はせいぜい天才メイジ止まりが良い。

「始めましょう、奥方」

「名乗らないのですか？」

「あなたと対峙して、お遊戯で済ませる気はありませんので」

宣言して構える。俺の手にあるものは標準的な30 سانتほどの木
の棒。

夫人は俺の宣言に少し驚いたようで、杖にかけられた手と目つきが
明らかに変化している。

当然だろう。これは貴族の決闘という名のお遊びではない。模擬と
はいえ戦いなのだと、俺は宣言したのだから。

審判はいない。この事実はカリーヌ夫人が負ける事態を誰も考えて

いないということだろう。実際、俺も転生者としての予備知識があつて尚必勝とはいえない。

長く感じる静寂。まったく動く様子のないところを見ると、夫人は俺の出方を見る気だろう。

だから俺は、躊躇しない。第一手から不意をつく。

「『エア・ハンマー』」
「ッ!？」

突如発生した空気の塊が夫人に叩きつけられる。かなり怯んだようだが、ぎりぎりのところで回避された。そううまくはいかないな。ちなみに、土煙に隠れるような真似はさせないぜ。

偏在は一番最後に使ってくれなくては。

さあ踊れ、烈風カリン。人の話をきちんと聞かずに主導権を渡したこと、必ず後悔させてやる。

Side オグロン

場を驚きが包んでいる。私は火、妻エレニアは土のメイジだ。三男サンガは魔法の才に溢れ、四つの系統を全て扱えるとはいえ、一番高くて土のラインメイジのはずだった。公爵夫妻にもそう話した。だが、今のエア・ハンマーはなんだ？規模、密度、精度、どれをとつてもトライアングル以上、もしかしたらスクウェアクラスのもの。さらに、私たちが自分の系統と強さを話したことを見越したうえでその虚をつくという戦術眼。
あれは本当に六歳児か？

驚いている間にも事態は進む。エア・ハンマーの余波で生まれた土煙を縫うように接近したサンガがブレイドで公爵夫人に斬りかかっていた。決して鏢競り合いせず、弾いては斬りかかる、切りかかっては夫人のブレイドを弾くを既に何度か繰り返し、隙を見て放たれた夫人の蹴り足を蹴るといふ荒業で距離をとる。まさか、誘ったのか？

「『エア・カッター』」

公爵夫人が放つ巨大な不可視の刃に、サンガは笑う。悪戯でも思いついたかのように。

「『アースハンド』。『錬金』。『エア・ハンマー』」

サンガは杖を一振り、土の手を生み出して壁にした。そして一撃を防ぎきった壁を錬金と魔法で砂利の飛礫に変化させる。面を制圧する攻撃をフライで回避した夫人に、サンガが追いつくように距離を詰めていた。さらに、ブレイドで斬りかかる。今度は両手、両足全てに魔法の刃を発生させていた。

一体私はどれほど息子を見誤っていたのだろう。熟練の傭兵のような高速詠唱、的確で迅速な間合いと体術、フライと他の魔法の多重行使。そしてそれらを支える体力、精神力。

古い貴族の間ではトリスティン最強と名高い公爵夫人でさえ、最初に見られた余裕はなく、険しい表情で防戦しているのではないか。

視線を少し横へ振れば、この戦いを見る誰もが息を呑んでいた。サンガの戦い方は明らかに貴族の戦い方ではない。誇りはない。名譽はない。ただ己の全てを賭した勝利と生への渴望だけがある。それは紛れもなく戦士の戦い方である。幾多の戦場を常に最前線で

駆け抜ける古強者が身に着ける戦い方だ。己の命の為に戦い、己の宝の為に傷つき、己の愛のために生還する。個人の究極、英雄と謳われる生き様。

決して、貴族の子息が目指すものでは、ましてや六歳児が辿り着いて見せるようなものではない。

だというのに、サンガはそれを体現するかのようには戦い続けている。

息子よ。お前は一体、何者なのだ。

クルデンホルフの姫君がサンガを求めた理由は明かされていないが、もしこの伏せられた真実を知っていた上での話であったなら、サンガは私たちを、祖国トリステインを裏切ったことに――

いや、止そう。最早事態は止められず、たとえ何であろうとサンガは私たちの子供なのだ。この先不気味で愛しい息子がこのハルケギニアに何をもたらすのか、私は親として静かに見守ればよいのだ。

私は不安げな顔をした妻の肩をそっと抱き寄せ、再び息子へ目を向けた。

「ぐっ！……デル・ウィン……」

「『ファイアーボール』」

「がっ！？」

とうとうサンガが競り勝ち、公爵夫人を叩き落した。墜落の衝撃を緩和するべく風魔法を使おうとする夫人に火魔法で追い討ち、魔法の炸裂で生まれた煙の中に突撃して行った。

「何ッ！？」

「ああっ！」

「お母様！」

煙が晴れたとき、観覧席の沈黙が破られた。

その場に公爵夫人は二人いた。一人は倒れ伏してサンガにブレイドを突きつけられ、一人はそのサンガへ杖を突きつけている。

しかしその杖はサンガの背後に現れた鋼鉄のゴーレムにさえぎられ、そのゴーレムの手が夫人の喉を掴み、さらに夫人の背後からはもう一体のゴーレムが背中を中心へ槍を突きつけていた。

三人目の公爵夫人は見当たらない。

「私の負けです、サンガ・ド・シエール」

宣言と共に倒れ付したままの公爵夫人が崩れるように消える。サンガはさらに夫人が杖を下げるのを確認してからブレイドとゴーレムを解除し、数歩の距離をとって向き直り、礼をする。

「ありがとうございました」

そしてフライの魔法を使い、どこかへ飛んでいってしまった。

同行させた使用人たちに搜索させたところ、当家の馬車の中で眠っている姿が確認されたそうだ。

S i d e o u t

第二話 / 婿入り命令と王座決定戦？（後書き）

さて、ラ・ヴアリエール名物VS烈風カリニンイベントです。

「勝っちまったじゃねえか！」

チートだし、相手が力量差を誤認して油断しまくってたからだぜ。

「まあ、そうだろうな。ところで、なにやら俺が歴戦の勇者みたいな表現されてるんだが」

盗賊退治してるうちにある程度の実力は備わっていくだろ。それに、貴族としての戦いに慣れてる人からすればその違いはより大きく見えてくるもんなのさ。

「隣の芝は青い、ってか？」

ちょっと用法が違う気がするが、まあそんなところだ。さて今回はトリスティンを出て婚約者とお目見え。数年後、政治介入を開始します。

「ストーリー進めないとな。ところで、今後どういう風に続いているのか考えてるのか？」

いや、かなり行き当たりばったりだ。今回だって尺取用に書き足した模擬戦イベントがシナリオの本文の倍以上あるという、初期の構成からすればデタラメなバランスになってしまったからな。

「そんなんで本当にやってけるのか？」

未来のことはさっぱり分からん！明日挫折するかも知れんし、澱みなく書ききれんかも知れん。

「このトンチキ！これでも喰らえ！」

ヒートロッドやめあががががががが！！

「それではまた次回！作者がやる気を出したらお会いしましょう！……言ってて情けないぜ俺は」

ご意見、ご感想、誤字脱字文法ミスのご指摘等々、お待ちしております！
ます！

第三話 / 異界流大改革と俺の婚姻（前書き）

書いていて気付いた。5000字ってあっという間だ。

第三話 / 異界流大改革と俺の婚姻

ラ・ヴァリエール公爵の城（もう城でいいや）から我が家まで馬車で三日と半日。そこで一晩小さな宴を開いて、翌朝から馬車でさらに丸一日。そこにクルデンホルフ大公の城がある。

これはうちが貧乏貴族で荷物が少なく、また俺個人の『世話されすぎたくない』感情からこの程度で済むのだと、あえて言っておこう。俺一人と使用人二人でここまで来ている。荷物が片付いたら使用人はド・シエールに返す予定だ。

そんな俺の前には今、四人の人間が立っている。

「遠路大儀であった。貴殿の荷物は今部屋に送っておるゆえ、安らかにすると良い」

「ありがとうございます、大公殿下」

「いや、よいのだ」

今回の騒動の爆薬ことジジ馬鹿のクルデンホルフ大公が労いの言葉をくれる。ファアのついた赤いガウンを着て宝石をあしらった杖を持つ、白髭蓄えた爺さん。実に分かりやすく『王様』してる人だ。柔和な態度の影に若干の憂いが見える気がする。謁見の間なのに上座から降りてきてくれたりするあたり、かなり無茶苦茶したと自覚があるんだろうな。これが演技でなければ、いい人なんだろう。

そして、大公のローブの影から見える金髪。背丈は俺の胸くらい。親の趣味であろう無駄に眩しいドレスを着て、大きな碧の眼が不安そうなお目遣いで此方を伺っている。

なんというか、捨てられた子犬みたいな可愛さがあるな。でも襲わないよ？俺もまだ『男』に帰ってきてないし。

「はじめまして、ベアトリス。僕はサンガ・グレイ。これからよろしく」

「あ、あの、その……はい」

頬を染めて挨拶に応じる幼女の横で苦い顔をしているのは着火剤にあたる彼女の父、リカード・クロイツ。その更に隣に夫人、ソニア・ミニス。全員がフォン・クルデンホルフなので省略させていただいた。そういえば婚約者の両親って、なんて呼べばいいんだ？分らないから名前で呼んで、モノローグ独白は義父、義母で良いや。どうせモノローグ独白だし、この婚約が撤回されることになるなら出番はもうないし。

……なんか要らん電波を受信したような気がする。

まあとにかく今は大公殿下の好印象を得なければ。

そのための切り出しに一番役に立ちそうなのは……やっぱりこれだろう。

「大公殿下。此度の婚姻を裏切らぬ我が誠意の証に、ぜひ進言したきことがございます」

「……許す。申せ」

おお、一瞬で好々爺が国家元首になったぞ。流石は独立期を知る人だ、驕らない威厳を感じる。

これなら俺もこの人を信じていいだろう。受け取ってくれ。六千年かけても発展しなかったハルケギニアの文明が、もう六千年かけてもたどり着かないであろう叡智の一欠片を。

「黒死病と天然痘の予防についてです」

「何、それはまことか!？」

「馬鹿な!あの悪魔を退ける方法だと!？」

「ま、待ちなさいサンガ。誰か!誰かクローンフトをここへ!」

「大公殿下!どうかロマリアの方の耳からは遠ざけていただけませう様!」

おお、義父も釣れた。まあ、為政者としては当然の反応か。たとえ水の秘薬で治すことが出来ようと、感染者全員にポーションを配るわけにはいかない。最も救われるべき貧しい平民たちは、感染したが最期死んでゆくしかないのだ。ペストのワクチンのことまでは知らない我が身が恨めしいが、感染予防さえ徹底すれば僅かなポーションでも貧民層にも回せるようになるはずだ。

しかし悪魔ね。確かにそう考えるのが自然か。だが、肥大化したブリミル教の耳に入るのは御免だ。絶対に異端指定してくるぞ。

「ふむ。理由を聞かせてもらおうかの?」

「今からお伝えする私の知識はハルケギニアに二つとなき物と自負しております。もしそれが教皇庁の耳に入った場合、私が異端指定を受ける恐れがあります故に」

「なんと、異端指定とな?」

「先ほどリカード様がおっしゃったように、二つの強大な病魔を退ける手段はブリミル教の教えにあります。彼らにない手段でそのようなことを成せば、彼らは必ずや私を悪魔の手先と呼ぶでしょう。なんとすれば、彼らの権威を崩すことになるのですから。始祖の遺志を曲解し、権力に溺れ、蹂躪に酔ったロマリアに出来ることは、始祖の教えから僅かでも離れたものを殲滅することのみ。新教徒への弾圧も同じことなのです」

「……殿下。私にも思うところがございます。この者の主張、無碍にするのは如何なものかと」

立場上ロマリアと直接付き合うことが多いのだろう、義父がフオロ
ーをくれた事もあって、大公は同意を示す。義母とベアトリスにも
口止めをして、俺の話聞いてくれることになった。
細かい手段の説明は、ちよつと割愛させてもらう。あちこちで語ら
れていることと同じだし。あえて牛痘に感染させるといふ種痘には
抵抗を示されたが、『これが異端と呼ばれる所以の大きな一つなの
です』という不思議そうにも納得してくれた。こういう面では利
用しやすいな、ブリミル教。

俺の話を全面的に信じると決めた大公に、俺は具体策を示す。その
場には羊皮紙と筆を持ったクロンフトさんが同席した。大公の信用
厚い内務大臣にあたる人だそう。彼曰く公国には内心ロマリアが
嫌いな人はかなり多いらしいから、好都合だな。

防疫と美化の実行部隊を速やかに組織し、衛生管理や福利厚生を始
めること。

同時進行（ただし前述優先）でこの環境管理と戸籍や地方の実情を
調査、管理する専門機関を設立すること。

これらの一環として、医療を国家事業として予算を組み貴族も平民
も分け隔てなく治療すること、大衆浴場を普及させること。（個
人的に風呂に入りたいという想いが一番なのは内緒だ）

貴族の裁判権を否定して裁判所を設立し、争いは全て国家の管轄と
すること。

無断での決着、虐待や横暴を厳しく罰すること。国を腐らす重罪と
して横領と贈収賄は死刑に処すこと。（金で転ぶ奴は戦乱の政治に
関与させるべきじゃないと思う）

ブリミル教への寄付を国庫の負担にならない程度まで減らし、神官の特権を剥奪すること。神よりも民を重視し、ロマリアなど気にかげず、新教徒も保護すること。（人心攻撃以外に打つ手がない以上、信仰を弾圧せずに人心を掌握すれば意に介すべきものではない）

強力な空中装甲騎士団に頼り過ぎない陸軍の増強とそれぞれの連携を強化すること。（公国には海がないので海軍はない）

制空能力は現状でも高いので、降下戦術と地上戦に力を入れると効果が高いこと。空戦能力の強化には、前線拠点・空母という運用思想で更に効率的な運用を実現できるということ。

訓練は実戦を想定した厳しいものにする事。

人員は身分や家柄ではなく、実務に応じた能力を有しているものを優遇すること。もちろん貴族か平民か等は魔法が必須でない限り判断基準から除外すること。

発生する利益や平民の生活程度にあわせて、税率を下方修正すること。

一年に最低でも二回、決算と全体会議を行うこと。

身分無視の話はメイジ全般やブリミル教に喧嘩を売りがねない言葉だが、ゲルマニアを引き合いに出して国力の強化には必須であると強弁することで大公を頷かせることが出来た。本当はエルフとの交流パイプも確保したいのだが、流石に早すぎると断念する。接触しても大丈夫なエルフ個人に出会えるまで、大公たちを動かすべきではないだろう。

「なるほど……」

「サンガ様は色々なことをご存知なのね」

類染めたままのベアトリスが上目遣いで腕に絡んでくる。四歳児の癖に何だその色気は。襲わないったら襲わないぞ！ああ襲うもんかい！

……駄目だ、平常心で行かねば。

「いえ、残念ながら今知る事はこれが全て。大公殿下のお役に立てれば、幸いかと」

「役に立つどころではない。これはとんでもないことだぞ、リカード、クロンフト！ワシらの成すべきことがこれほどまでに多いとは！ああこうしては居れぬ、すぐに官僚たちを集め今の事を会議に掛ける！ソニアとベアトリスは我が孫を部屋に案内してやりなさい。

さあ急げクロンフト！

「ははっ！御意のままに！」

「はい、おじいさま！」

こうして俺の第一回ハルケギニア改変計画は実に順調に開始されたのだ。

クルデンホルフの実質的な国力がトリステインを凌駕するには、二年と掛からなかった。

国家規模こそ遠く及ばないものの、怪我や病気で動けなくなる者の割合は極端に減って臣民の士気が向上し、下げた税率を十分に埋めるほど商業が活発になったために経済力や軍事力が飛躍的に向上したのだ。

対するトリステインは宮中政争にかまけて赤字決算を繰り返し、いまや負い目の塊。

ロマリアのものと思しき妨害工作もあったが、平民から登用した外

交官や諜報員たちの活躍で秘密裏に処分することに成功している。今頃異端指定せんとトリスティンとガミガミやってる頃だろうか。トリスティンが認めるとは思えないけど、もし認めたら……：全力で殲滅だな。『機兵の系譜』最大出力で実寸のMS部隊……：そうだな、十二機のリックドムで蹂躪してやる。縁起悪い構成だけど、ガンダム居ないし。万一負けたら使い捨てケンプファー大隊で焼き払ってくれる。

もつと強いのがあるだろ、って？うっさいな、ジオンが好きなんだよ。悪いか！

大公が俺を『孫』と呼んだのが決定打となつて、ベアトリスの婚約者、をすつ飛ばして婿として正式に認められてしまい、来訪一週間後には簡易ながら結婚式まで挙げてしまった。お披露目はベアトリスの13歳の誕生日にするそつだ。非公式ながら名前がサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフになった。嫌じゃないけど、それなんて光源氏？いや肉体年齢は近いけど、中身はもう三十路に入っちゃまうし。

念のために言っておくが、まだ食^たべてないぞ。というか、食えない俺の体が。

ベアトリスの性格は原作にあつたような身分制度や権力関係に溺れ驕った思想にならないように注意して育てた。他人を尊重し、敬い、しかし大切な部分は譲らない。モデルは『NOといえる日本人』だ。信仰への弾圧を避ける為、ブリミル教の信者であることは別に止めなかったが、ロマリアから遠ざけたこともあつて原作の登場シーンにあつたような異端審問は絶対にしないだろう。おかげでハルケギニアの普遍的な貴族とは一線を画す存在になつてしまったが、転生者である俺の妻だからそのくらいで丁度いい。口先だけの世辞を見

抜けるだけの自己批判も身につけたことだろう。早熟すぎて子供に溶け込みにくいようだが、その分俺への依存になっているのは、役得と違って良いだろうか。

俺たちが婚姻を結んだほぼ直後から、俺は大公から一部の領地を預かって実験区画として運営している。

農業。まず困い込みを行って耕作地を俺の一括管理とし、三圃式と穀草式の概念を組み合わせて休耕地を作ることなく複数の作物を生産できるようにした。世界の違いは育てる植物に現れるが、これが俺流ハルケギニア式農業革命・テストプラン。より地力の回復に適切な牧草は何か、とか地力回復の為に必要な牧草地の期間はどれほどか、とか牧草地と牧畜の割合はどれくらいが適切か、といった実験・調査結果を半期毎にまとめて提出させている。魔法のサポートがあるから思ったよりも失敗がなくて助かった。

冶金技術の向上。鑄造が一般的であるハルケギニアで、鍛造を奨励する。手間は掛かるが、上質で頑丈な資材は多少高価であっても引く手数多だ。ゲルマニアから技術者を招致する準備も進んでいる。

そしてどっかの狂皇が聖戦の口実にする『地下の巨大風石』というヴァイットーリオエネルギー資源の探査と転用手段の開発。採掘に適した場所は当たりがいたので、計画はフネの機構を応用したエネルギー採取プラントの設計と、既存のフネ用に採掘する作業に移っている。

これとは別に、裏でコソコソやってることもある。

それは風石をまったく使わないフネの建造。原作ではフネにレシプロ機を混ぜたような『オストラント号』がコッパゲによって建造されたが、あれは出力や精度の都合もあって『風石の消費を抑える』

程度に留まっている。俺も場違いな工芸品として壊れた車が手に入ったが、そのフネは完全に別のアプローチで設計してある。同じプロペラ機構とフネの融合ではあるがな。

「旦那様……お忙しいのですね」

「ああ。もう二日は掛かるだろうな」

隣に製図台を置いた執務机で書類を整理していると、ベアトリスがやってきて服の袖をつまんだ。

おのれ、日を追うごとに色気付きおつてからに。ええい、涙目でこつちを見るな！それでも一国の姫か！……いや、姫だからこつちなのか？

そんな葛藤は勿論顔に出したりせず、寂しそうな碧眼の姫君を抱き寄せて頭と頬を順番になでてやる。そうすると実に幸せそうに微笑むのだ。可愛くて仕方がない。ちなみに頭は原作のツインテールからポニーテールに改変している。理由？俺の好みだ。

……どうも妹とか娘とかに感じてしまい、なかなか妻として見てやれないのがここ最近の悩みといえれば悩みだ。

早く『男』になりたくい！ 転生人間！！ ってか？

この調子で時が流れれば15の誕生日もすぐに迎えてしまうだろう。その先に待つのは大公の意向で決定したトリスティン魔法学院への留学。そこは原作のメイン舞台だ。

為すべき事は大体決まっている。

俺が『男』に返り咲くのとどちらが早いかな？

第三話 / 異界流大改革と俺の婚姻（後書き）

さて、大改革があっさり成功してしまうわけだが。

「いきなり国家元首を抱き込んでしまっし」

まあ、国の規模が小さい分進めやすかったと解釈してほしい。さて次回はいよいよ原作の舞台、魔法学院へ留学です。

「ご都合主義だよな。原作への介入はどうする予定なんだ？」

基本的な流れは変えません。ルイズ&シエスタフラグは全面サイトへ。キュルケは天才発明家へ。タバサとテファを拾います。出来たら。

「また最後に変な言葉がついたぞ。大丈夫かなこの作者」

どうだろう。まあGW中にもう一本。……上がるといいな、主人公！

「そこで振るのかよ！」

ではまた次回。ご意見、ご感想、誤字脱字に文法指摘、展開中の疑問など、色々お待ちしております！

「無視すんな！来い！アツザムリーダー！！」

おせー！！！！！！！！！！

5 / 3 追記

サカイ様にご指摘をいただき、敬称の誤りを修正しました。ありがとうございます。

ご意見、ご感想は作者のやる気を加速させます。甘口、辛口どろんどろんお寄せください。具体的な指摘であればあるほど文才を育てる可能性があります。

閑話／お姫様の心、少女の心（前書き）

ちよつと時間は戻ってベアトリスのお話。割り込み投稿なので本編や前話後書きとの差異があります。

また、作者は男なので女性視点の描写は極端にヘンテコです。ご了承ください。

閑話／お姫様の心、少女の心

それは、ラ・ヴァリエール公爵の誕生日パーティーの席でのことだった。

お爺様をお願いして連れて来てもらった事を、わたしは後悔していた。

「殿下の美しさは大輪の花にも」

「夜空の星を並べても殿下の美しさには」

何か面白い事があるかと思っていたのに、待っていたのは聞きなれた文句を並べて同じような笑顔を見せる貴族の子息たちだけ。それでも賞賛されるのは悪い気分じゃないけれど……あら？

少し不思議な動きをする一人が目についた。子息たちの輪に入らず、パーティーに参加するでもなく、父親と思しき男性の後を付いて回る、鮮やかに赤い髪の少年。赤い髪はゲルマニアの『とある家』が有名だけれど、彼の肌はその家の人たちと違って透き通るように白い。服を脱いだらきつと蠟燭みたいに……何を考えてるの？

「殿下、何を……ああ、アイツですか。殿下のお気にかけるような奴ではありませんよ」

「何かご存知なの？ エイカー様」

わたしの視線を読み取った婚約者のエイカー様が鼻を鳴らす。……お爺様やお父様の為に我慢しているけれど、わたしはこの人のこういう仕草、ちよっと嫌いです。

「ええ。ド・シエル男爵家の三男。名前までは知りませんが、ど

このパーティーにも連れてこられて、誰と喋るでもなく親について回るだけの変わり者です。親が一通り挨拶を済ませて世間話に入ると壁の華になって……ああ、ほら。丁度あんな感じに」

確かに父親らしき男性の足が止まるとその赤毛の少年は確かに壁に寄りかかって、どこかのテーブルから取っていたのだろうカナツペを口に入れていた。全部一口で食べているので、どんどん減ってしまふ。

何人がトリスティンの貴族令嬢が言い寄ったみたいだけど、彼は首を横に振って別の壁に移動してしまふ。その途中でカナツペを補充。それを何度か繰り返していた。

「見たでしょう。レイイへのマナーも心得てない。あんな奴を気にかけるなんて、品位が落ちてしまいますよ」

そうやってエイカー様はわたしの肩を抱こうとする。わたしはあなたの態度もおかしいと思います！お爺様やお父様の為に言わないけれど！

結局その日、エイカー様が邪魔でその人に話しかける事は出来なかった……あら？婚約者を邪魔だなんて思ってしまうなんて。なんだか調子が狂っちゃいます。

次にその人を見かけたのはラグドリアン湖で行われた太后様の園遊会。次から次の行事、行事、行事。その間ずっとお世辞やおべっか

に塗れたわたしは疲れてしまい、湖畔を一人で散歩させてもらっていた。

そんなときに彼を見つけた。水辺の草に隠れて会場からは見つからない場所に、彼は座っていた。ただ、その表情は随分と不機嫌そうで、おもむろに石を投げて……投げた石が湖面で跳ねた？2回、3回、4、5、6……最後は湖面をすべるようにしてから、沈みました。彼はちよつと機嫌を直したみたい。

「今の石、どうして跳ねてきましたの？」

「そりゃ、そうなるように投げたから……つと？」

反射的に答えてしまった彼が此方を向いて驚いたように一歩下がる。次にわたしの後ろを伺って、誰も居ないのを確かめると一息ついて足元からもう一つ石を拾った。そして、ほんの少し微笑む。ちよつと、かつこいいです。大体エイカー様の300倍くらい……あら？

そして、湖面に向かって一歩踏み出し、後ろに引き絞った右手を上半身ごと大きく回して石を投げる。石は低い軌道で湖面に向かい、先ほどと同じように何度も跳ねて、沈んでいく。

「早く帰りたいか？」

「え？」

「そんな顔してる」

「ええ？」

思わず顔を触ってしまい、意地悪そうな笑顔を見て騙された事に気付く。いたずら成功、といわんばかりの笑顔に混乱しかけていると、わたしの来た道を通って別の人が来た。もう、いいところでしたのに……あら？

「殿下、どちらへ行かれたのかと……貴様は！」

「エイカー様？」

「……弁明は無駄っぱいな」

来たのはわたしの護衛ではなく、エイカー様だった。彼を見るなり杖を引き抜き、わたしを背後にかばう。彼はちよつと肩をすくめただけで、また足元の石を湖に投げ込んでいた。

「貴様、何のつもりだ！此方の方はクルデンホルフの公女、ベアトリス殿下だぞ！それをこんなところへ連れ込んで、不埒な真似に及ぼうとしたのではないだろうな！」

「ないない」

彼がはつきりと此方を向く。表情は困ってる風。わたしは自分で来たのに、誘拐みたいに言われたらそれは困りますね。

「僕の婚約者をこんな手段で掠め取ろう等……決闘だ！今この場で成敗してくれる！」

「つと？危ないな、足元土なんだから安易に投げるなよ、汚れちまう」

手袋を脱いで投げつけるエイカー様。彼はその手袋が足元に落ちる前に掴んでエイカー様に突き返す。

あの、エイカー様？すごく対照的で格好悪いですよ？

「つ、杖を抜け！抜けよ！」

「こんなところで騒げば立場が。つても聞く気はないか。なら魔法を使うのはお互い一度だけとしよう。お互いが打ち合って決着が付かなければ引き分け。降参させたほうの勝ち。いいか？行くぞ？」

「貴様！つうわ！？」

エイカー様が杖を振るより早く、彼が懐に踏み込む。エイカー様の襟と杖を持った腕を掴んで力強く引つ張り、足元を崩し……エイカー様の体が大きく弧を描く。

「ぎゅっ！」

「ブレイド」

地面に叩きつけられたエイカー様。彼は剣の魔法を唱えてエイカー様の首筋に刃を当てた。エイカー様の杖はさっきの衝撃で手を離れてしまっていて、抵抗は出来そうにない。

「降参する？首刎ねないと駄目か？」

「ぼ、僕の父はリツシユ」

「スパツ！」

「ひえっ！降参、降参だ！」

……エイカー様、すごくかつこ悪いです。彼は魔法を解いてエイカー様を助け起こし、わたしたちを置いて立ち去ろうとする。

「では、これにて」

「っ、く」

「また、お会いできます？」

「殿下!?!」

「『ベアトリス』になら、いつでも」

……ちよつと照れくさそうな微笑。この人は、もしかして『わたしを見てくれる』人、なの？ずっと探していた、一人の女の子を見てくれる人？

その後、わたしが彼と会う機会はなかったけれど、彼が心から消えてくれなくなっていた。それどころか、日増しに彼のイメージが強くなっていく。

そして、数カ月後。お爺様をお願いしてエイカー様との婚約を破棄、彼をわたしたちのお城に呼んだ。ちよつと恥ずかしくなってお爺様の後ろに隠れていたわたしに、彼の手が差し出されます。

「『はじめまして、ベアトリス』。僕はサンガ・グレイ。これからよろしく」

やっぱりそうだ。この人は、『公女』じゃなくて『わたし』を見ている。ううん、『公女』と『ベアトリス』両方を見てくれる、素敵な人。

よろしくお願ひします、わたしの旦那様……

閑話／お姫様の心、少女の心（後書き）

……というわけで、ベアトリスは主人公に一目ぼれしたのです、
まる。

第四話ノ初めての手下と魔法学院（前書き）

戦闘描写がうまく運べません。一方的に蹂躪してるせいだと思うのですが……

第四話 / 初めての手下と魔法学院

領地経営は順調に進み、それを反映させてゆく公国は更なる発展を遂げ、俺の個人資産は数千万エキューになった。それどこの国家予算？

俺は『男』になり、15の誕生日を迎え、ついに魔法学院へ向かう日が来た。入学式の二日前だ。

挨拶と見送りの為にと大公、義父母が城の中庭に集まってくれた。ベアトリスは義母の後ろで泣いている。

「サンガよ。窮屈であろうが、うまく立ち回るのだぞ」

「お前の行動は全て私たちが支援するからな。トリステイン貴族など蹴散らしてやれ」

「二人はこういつてますが、何かあればすぐに相談するのですよ？」

「お任せください。我らクルデンホルフが威光、存分に見せ付けると致しましょう」

義母は柔らかに。大公と義父、そして俺は不敵に笑みを交わす。しかし大公の視線が俺の手元に移ると、それらに少し不安めいた影が差す。

「本当にそれだけでよいのか？ワシが入学した頃は馬車に三台も四台も持ち込んだものだが」

「移動の時間を短縮して必要な物資を減らしているのですから、これで十分です。それにもっと必要になったらその時に此方へ戻ればよいだけの話なのですから」

「言われてみればその通りじゃのお。こちらも何かあれば鷹を寄越す。気をつけてな」

俺は手に持った荷物を掲げて笑う。それは黒いトランク一つ。銀河鉄道の美女が使ったのと同じような奴だ。実は自作のマジックアイテムで、見かけよりもずっと容量がある。大公家には一人一つ配っており、開放には勿論持ち主か俺の魔法が必要。セキュリティは大切だ。

俺の言に苦笑いする大公たちへ背を向けると、前には大公家が飼っている風竜が一体。こいつに魔法学院まで送ってもらうのだ。

さて行こう、と言うときに突然腕が重くなり、バランスを崩す。原因は言うまでもなく金髪ポニーのお姫様だ。今日は実際に涙を流し、絶対に放さないと言わんばかりに俺の左腕を抱きかかえている。

「旦那様、行かないでください」

「我侭は止せ、ベアトリス。虚無の曜日には戻る」

宥めながら腕を開放させ、小柄な少女を抱きしめる。そして耳元でこっそりつぶやくのだ。

「帰ってきたら昨晚と同じようにしてやる」

「ッー!!」

触れ合う頬から伝わる体温の上昇でどんな顔をしているのか想像がつく。オーバーヒートを起こして固着したベアトリスを引き剥がし、風竜に飛び乗った。自力で飛んでもいいんだけどね。

「行って参ります!」

最後の挨拶を投げかけ、風竜に合図を送って離陸させる。いざ、トリストインの空へ!

ベアトリスはこっちが見えなくなるまで手を振っていた。もう少し堪能してもよかったか?

魔法学院へは空路でおよそ4時間の旅だ。長く聞こえるかもしれないが、風竜といえども前世の航空機の五分の一以下のスピードしか出ないので、距離的には大したことがない。それでも単騎で丸一日、普通の貴族が馬車を使って移動するなら、三日くらい掛かるらしい。そんな無駄な時間を使うのは御免だ。本気出して『機兵の系譜』でドダイでも作れば30分位で着くんじやないかな？目立ちすぎるからやらないけど。

「……レッセ。針路変更だ。あの馬車に寄せてくれ。感づかれない程度にな」

トリステイン領に入って一時間くらいたった頃だったか。

風竜に指示を出し、森の中に行く不審な馬車に向かう。御者が一人、商人らしき男が一人、傭兵が四人。普遍的に盗賊が出るハルケギニアでは珍しくない構成だが、馬車が傭兵の数にそぐわないほど大きいのだ。

その馬車は大人が悠々と立ち入れるほどの骨組みを張った上から分厚い幌を被せている。中身を見せたくないという意味が良く分かるというものだ。

商人にとって商品は自分の命と同等に守り抜くべきもの。だから過剰に物々しくなる事はあっても、中途半端に武装するような事はまず無い。資本金が少ない行商人であればそんな事もあるが、それならば誰一人雇わない一人旅か、雇ったとしても御者は雇わない。自分で手綱を取るからだ。

つまり、あの馬車を所有する商人にとって、馬車の中身の価値は『多少惜しいがいつでも切り捨てられる』程度であり、なおかつ、大きな馬車で運ばねばならないものであるという事になる。

大きな馬車を使わなければならない理由は、いくつか考えられる。まず、荷物の体積が大きくなってしまふ場合。つまり物理的に積荷の量が多いからそれが乗せられる馬車でなくてはということだが、そんなに仕入れる余裕があるなら傭兵を多く雇って積荷を減らし、確実に運んだほうが合理的だ。

次に、大きな馬車しか持っていない、という事があるが、そんな奴はまず商人ではない。もしそうならば自分の商いに見合った大きさに買い換えるからだ。大きな馬車で他の町に行った帰りであっても、中にはその町で買い付けた品物や、売上金があるはず。やはり中途半端な護衛はつけない。

第三に、荷物の特性上余白が必要である場合。あの馬車が幌を箱型に固定している以上、この線が最有力だ。俺の経験も、これでまず間違いないといっている。

これはつまり、中身が奴隷だという事だ。それも、ごく少人数の売れ残りだろう。裏で結構な量を潰しているつもりだったが、まだ現れるのか。

「……そういえば、一人手下が欲しかったんだ」

誰へとも無く呟いていた。風竜レッセが何？とばかりに鳴く。その首を二度叩いて、指示を伝える。

「いいか、レッセ。あれの上空5マイルを突っ切ってくれ。降りて三分経ったら迎えだ」

そう言って俺は風竜を滑らせ、馬車のそばで飛ぶ。久しぶりに暴れよう。

「我は紐解く『機兵の系譜』！^{グフカスタム} 剣持つ青の单眼鬼・改！」

Side ????

大きな石に乗り上げたのか、馬車が大きく跳ねた。

最後の町を出てから三日が経っている。その間僕に与えられた食料は冷えて硬くなったパンが一切れ。

半月前、この馬車には十二人がいたけど、今は僕一人。次の町でも売れなかったら……

不安と恐怖がこみ上げてくる。頭は痛み、目は霞み、喉がしみる。

「死にたく、無いよ……かみさま……」

手かせを付けられた僕にできる事は、嘆く事と祈る事だけ。この日が早く終わるように、誰かが僕を買ってくれるように。

いつもは何も起きないのに、外で大きな音がした。

「……かみさま？」

Side out

「なっ、なんだコイツ!？」

飛び降りた直後に傭兵に気付かれた。が、お構い無しに俺はそいつへ左腕を向ける。シールドガトリングの砲口を。

ギューイン・バババババババババババ……

多量の弾丸が傭兵の体を吹き飛ばす。どこが最初に吹き飛んだかは分からなかったが、その射線上に人形は残らない。赤い何かが残るだけだ。

「な、なんだ!？」

「どうした!ツヒ!？」

馬車の陰から現れる傭兵の一人に急接近。右手でヒート剣を起動させて胸を絶つ。もう一人にはシールドガトリング。照準が甘かったらしいく、右半身が残ってしまった。ガトリングの弾が切れる。

「と、盗賊か!」

「鬼だ!一つ目の鬼が!逃げろお!」

「何を言つて!!くそ、『エアカッター』!」

傭兵の一人がメイジだったようだが、俺の能力の前には敵ではない。パージしたシールドを投げつけるとそれは風の刃をもともせず突き進みメイジの頭を叩き潰す。俺は右手から伸びたワイヤーを樹木の枝に絡ませて一気に跳んだ。

「怯えろ、竦め、死んでゆけッ!」

「ぎゃっ」

「ひ、ひいつ!？」

御者の背中にヒート剣を突き立て、商人には今使ったワイヤーをまきつける。デブを前に喋るのは苦痛だが、どうせすぐに済む。

「奴隷商だな。馬車の中は?」

「ガキが一人だ!放してくれ!助けてくれえっ!!!」

「……嫌だね」

醜い顔を更に醜くして泣き喚く商人の顔が引き攣る。俺は勢い良くワイヤーを引く。ギシユ、と軋む様な音がして商人の体は十二の肉塊に分割された。

「周囲2リーグに指定以上の生体反応なし、と。『そして系譜の扉が閉まる』」

キーワードを唱えて変身を解除し、幌の中へ。中にいたのは、薄汚れた少年だった。

服とは名ばかりのボロ布を着て、曇った眼をこちらに向けていた。

「家に帰りたいか？」

少年に歩み寄りながら此方から尋ねる。少年は首を横に振った。俺の手は少年の首をつかみ、持ち上げる。

「ぎゅっ」

「なら、俺と来い。『アクアトーンード』！」

「わぶっ!?!」

召喚された大質量の水が渦を巻いて幌を破壊し、少年だけを巻き込んで空へ上る。しかしそれは一瞬の事で、打ち上げられた少年はすぐに俺のところへ振ってきた。レビテーションを使って軟着陸させてやる。これは俺が独自に考えた『猫も洗える大規模洗濯魔法』だ。少年の背丈は120センチくらい。俺は173センチだから並ぶとかなり小さい。燻したようにくすんだ金髪は癖が強いのか濡れてなおあちこちに跳ねており、気の弱そうな顔立ちが混乱した風に此方を見つめていた。

錬金で服を作って着せてやり、指示どおりに迎えに降りてきた風竜に乗せる。

「俺はサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ」

「え、つと？」

「お前は今から俺の付き人、バーナードだ。分かったか、バーニイ？」

「は、はい！」

「いい返事だ。さあ、遅れを取り戻すぞ、レッセ！」

レッセが力強く鳴き、空へ飛び立つ。顔というか雰囲気か似ていたので名付けたバーナードが、眼下に広がる森に感嘆している。

しかしトリステイン貴族の中に入れるには不安要素が多いな。子供らしい純粹さは容易く人を刺激してしまう。

「バーニイ。これから行くところで、誰に何を言われたか、毎日俺に全て報告しろ。貴族にいちやもん付けられたら、俺の名を出せ」

「え？」

「わかったな？」

「わ、わかりました」

トリステインの空がクルデンホルフの空より濁って見えたのは、気のせいではないのだろう。

魔法学院に到着したのはそれから二時間と掛からなかった。うん、^{レッセ}風竜の本気ナメてた。

あまりにも少ない荷物に衛兵が驚いていたが、それ以外は特に何も言われず、寮の一室へ案内された。貴族のボンボンが住むだけあつ

て完全個室だ。軽く荷物を整理したら、学院長室へ行く。

学院長室には白髪の妖怪爺、オールド・オスマンが一人でいた。秘書席もあるが随分と使われていないようだ。ひどいセクハラ爺だという噂だから、秘書が勤まる人など居ないのだろう。フーケだって秘宝を盗むという目的があったからこそ耐えられたに違いない。

「サンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフです。三年間お世話になります」

「いえ、クルデンホルフの王族にお目にかかり、光栄の至り。何かお望みがあればいつでも仰ってください」

「そうですか。では早速一つお願いを。私が連れてきた付き人を、学院の小間使いとして雇って欲しいのです」

バーナードを横に並ばせ、イイ笑顔でオールド・オスマンを見る。爺は一瞬拍子抜けしたような表情をしたが、すぐに我に返って快諾した。まずは厨房の皿洗いしてくれるそう。よし、マルトー親父の取っ掛かりゲット！

学院長室を出てその足で厨房へバーナードを連れて行く。

「誰か居るかな？」

「これはこれは貴族様、本日はどのような御用で？」

「明日から入学するものだが、料理長に目通り願いたい」

「は、はい、すぐに」

受け答えをしたコックが慌てて奥に引っ込み、入れ替わりに頑丈そうな肉体をしたおっさんがやってくる。

「あっしがこの厨房を預かるマルトーでさ。貴族様はどんな御用で

？」

「俺はサンガ・フォン・クルデンホルフだ。今日から世話になるから、その挨拶にな」

「へ？クルデンホルフ？」

マルトー親父を始め、厨房に居た全てのコックとメイドが目丸くする。貴族に理不尽な横暴という等式が実感として染み付いている彼らには、わざわざ自分たちのところに挨拶に来る貴族が、ましてや王族が居るなどとは思いのよらなかったのだ。

「もう一つ。こっちに就職させてもらった付き人の事を頼みにも来た」

「「「はあ？」「」」

今度の疑問符は合唱になった。一般的な貴族にとって付き人というのは自分の為だけに働くものである。大多数、ましてや平民の職場で働かせるなどという発想は、まだ聞いた事がなかったようだ。

「学院長の許可は貰ってある。ほら挨拶しろ、バーニイ」

「ば、バーナードです！よろしくお願ひします！」

「あ、おう、任せてくださいませ、貴族様」

バーナードの頭をなで、マルトー親父に引き渡す。親父はまだ混乱しているようだが、請け負った以上しっかりとやるというプロの気迫が全身から滲み出ていた。

「皿洗いや掃除からみっちり鍛えてやってくれ。職人を育てるつもりで、手を抜かずに頼む……これはその授業料だと思ってくれ」

「こ、こんなに？ たしかに、仰せつかりやした。必ず一流の使用人にしてやりませあ」

「金は学院付きの皆で分けてくれ。ではしっかりな、バーニィ」

「はい、サンガ様！」

「よし。ではまた後でな」

主人公への仕込みはこれで充分だ。バーナードが厨房に溶け込めばシエスタやマルトー親父を通じてサイトとの接触は図りやすくなる。それまでにオルレ안의姫を味方につけて、虚無の一角である森の妖精を手中に収めておきたい。かなり好意的な形で。

物語が動くまであと一年。猶予は充分。やってやるぜ！

第四話 / 初めての手下と魔法学院（後書き）

初登場、オリジナル脇役です！

「名前が……」

絶対に原作みたいな死なせ方はしません。そういう期待はしないでください。

「好きなのか」

ああ。大好きだ。潜在的とはいえ、実力あるしな。

「そうだな。こんな大金星挙げた奴、他に居ない」

今回は魔法学院入学式から一年の終わりまでを書く予定です。

「圧縮してんなあ」

この時期として原作で描かれたのはせいぜいキュルケとタバサの友情イベント。これに巻き込まれます。そしてウエストウッドへ出張！

「原作キャラと本格的な邂逅か」

うむ。次回からは人をメインに据えて、無双な内政干渉は少なくなるだろうと思われます。トリステインを改革する気は欠片もないので、ご了承ください。

「ではまた次回！ご意見、ご感想、誤字脱字文法考察ミス等々のご

指摘、お待ちしております！！」

セリフ盗られたッ！？

追記

野良猫様のご指摘を受けて誤植を修正いたしました。この作品の誤植等は皆様のご指摘に気付き次第修正されます。

第五話 / 氷雪人形と森の妖精（前書き）

GWに入って沢山のご感想をいただいた為か、作者のやる気が一時的に増強されております。

第五話 / 氷雪人形と森の妖精

居眠りしていた意識が覚醒したとき、入学式の会場、アルヴィーズの食堂はオールド・オスマンの無様な口上に対する哀れみの拍手に包まれていた。

その後も退屈な説明と口上が続くので、また眠気が襲う。と、もやの掛かりそうな視界に一冊の本が飛び出した。場所は前方、女子の列。それを掲げているのは褐色の肌と赤い髪を持つ背の高い人物の手で、別人のものであるう、小さな白い手がその本を追うように泳いでいる。小さな手の人物は人ごみに隠れて確認できないが、既にかなり怪しいレベルまで消えかけている俺の前世知識がうっすらと蘇り、それが誰かを思い出した。

「……そうか、タバサとキュルケの関係は入学式からだつたな」

欠伸を噛み締めがてら、誰にも聞こえないように呟く。本は何度かふらふらと彼女らの頭上を泳ぎ、やがて大きな笑い声が響いた。

「なにそれ！ トリステインでは随分へんな名前をつけるのね！」

誰の声かなんて考える必要も、暇もない。間を置かずピンクブロードの少女が勢い良く立ち上がったからだ。

「そのあなた！ 今、先生方が大事なお話をされているのよ！ お黙りなさい！」

注意するのは結構だが、自分の大声も司会進行を妨げていると自覚してるのかね？ ラ・ヴァリエールの三女さんよ。

その後も名乗りあいと家名に過剰反応した公爵令嬢が大騒ぎしてからようやく教師が静止した。遅すぎだよ、ったく。

俺の一年は、ソーンというクラスで過ごす事が決まった。微熱、雪風と同じクラスだ。ところで、大した実力もないのに本来称号である二つ名を自分から名乗るってのはどうなのかね？

キュルケのモテぶり、妬かれぶりといったらもう一種の演劇か何かと思うほどだった。入学初日から3股してフォーロー無しで四人目を作るとか、俺ならどれだけ魅力があってもやらないぞ。

俺も何度か色仕掛けされたが、引っかけたりはしない。そういう女だってわかっているし、俺自身女日照りって訳じゃないし、そもそも安い女に興味はない。

タバサはタバサで口を閉ざしたつきり本名さえ明かさなないから、陰口の対象になる。どこぞの私生児だ、とか。無駄な騒ぎを避ける為に（勿論学院長の許可のもと）家名を隠している俺は、そんなタバサにあえて接近する事にした。素性の分からない変人同士、周りがちよっと騒ぐくらいだろう。

「ミス・タバサ。隣いいかい？」

「……………」

場所はアルヴィーズの食堂だ。大食いのタバサに接近するには食事時がよかるうと判断。俺の皿にもタバサの皿同様に莫大な量のハシバミ草が盛られていた。頼んだときのマルトー親父の顔と、持って行った皿を見た時のタバサの真ん丸に開いた目は、ちよっと面白か

った。

ちなみにバーナードはティータイム用にカナッペを作っていた。かなり筋が良いらしい。閑話休題。

苦い苦い言われてるけどうまいんだよ、ハシバミ草。食いだしたら止められないね。

「読書といい、そのハシバミ草といい、すごい量だね。君も好きなのかい？」

「ええ……あなたも」

「どちらもとても良いものなのに。どうしてこつも不評なのかね？」

「……知らない」

会話らしい会話はそれきり。後は黙々と食べて、最後に一言。

「また隣座らせてくれないか？」

「……席が空いてたら」

この最初と最後を数週間繰り返す。授業でも隣の席で教師に睨まれない程度に本を読んで過ごす。時折学院から居なくなる事もあったが、北花壇騎士の仕事だと知っている俺は特に気にせず一人で過ごしていた。

タバサが名前を尋ねてきたのは接触を始めて一月経った頃。この名前とは勿論、家名を含めた本名の事だ。

「皆に内緒にしてくれるか、姫様」

「貴方は……！」

一瞬で表情が険しくなる。声も彼女にしては大きい。駄目だよ、衆目があるんだから。

「お互い、人に言えない事情がある。今宵、月が最も高く昇る頃、ヴェストリの広場、東の隅で」

「……わかった」

そして俺たちは二つの月明かりの下、秘めた会合を行う。俺もタバサも制服のまま。タバサはトレードマークといってもいい身長より大きな杖を油断なく構えている。

「まずは最初の質問に答える。俺の正式な名前はサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ」

「クルデンホルフ？」

「第二の質問の答え。これでも国土の一部を預かる地位に居てね。だからちよつと変わった情報も流れてくるんだ。取り潰しにあった王弟家の姫君が闇から闇への騎士として活躍している噂とか、エルフの魔法薬の話とかな」

「それは本当？」

魔法薬の話でタバサの警戒が興味に逆転した。杖を下ろし、まっすぐ此方を見つめている。真剣で純粋な眼差しが眩しい。やめてくれ、俺は前世知識でいんちきしてる汚い奴なんだー！……冗談だよ。別に反省も後悔もしてないさ。

俺は杖を振り、魔獣型の鋼鉄ゴーレムを30体ほど作り出す。真偽は杖で確かめようか？と挑発めいた事も言ってみたが、それだけで納得したタバサが否定したので俺もゴーレムを消す。

「中身はともかく、聞いたという事実は本当だよ、母を奪われた人形七号さん。……実はサンプルが手に入って、治療薬の開発計画もある。まだ分析の段階だけどね」

「治療、薬？」

「俺の趣味は識る事と創る事だ。これも先住魔法と四系統魔法と精

霊の関連を調査する一環でね。個人でやってるから完成がいつになるか分からない。それに」

言葉を区切ってタバサを引き寄せる。ちよつと顔が赤いが、気にしただら負けだ。

ちなみに魔法薬のサンプルはガリアの地下市場で手に入れた。先住魔法は四系統魔法とだいぶ勝手が違うので解析は困難を極め、俺の興味と意地を刺激している。人間には先住魔法が使えないとされてるけど、どうも調べる限り似たような事は出来るような気がする。一般のメイジとは精霊という存在の捉え方が違うからか？

「こうやって患者を手元に呼び寄せないと、服用させても意味がないだろう？……シャルロット・エレーヌ・オルレアン。俺はお前を助けたい。そのために必要なものは後一つ。お前が助けを乞う言葉だ」

俺は本人から直接求められない限り人助けはしない。それが俺の信条の一つだ。バーナードを拾ったのは俺が手下を手に入れるために俺の我侭で行動したのだから、人助けではない。

タバサは俺の目を見つめ、ぐずぐすと、やがて大声で泣き出してしまった。その後の俺に出来たのはガリア王家だけに許された青い髪をなでてやる事と、泣き声の中に混ざる「助けて」をしつかりと聞いてやる事だけだった。

このような経緯を経てタバサの『雪』を溶かし、一緒に行動する事が多くなったわけだが、魔法学院での日常は無駄と退屈で溢れかえっている。これしかないといってもいい。

教師たちは自らの系統こそ最強と謳うばかりで生徒へ眼もくれずに

系統自慢に明け暮れ、生徒も生徒でそんな教師たちの話のうちから都合のいいものだけ抜き出して覚えていく。

これで『次代を担う優秀なメイジの育成機関』とかほざいてるんだから笑わせる。『傾国の馬鹿を量産する謀反組織』に言い直すべきじゃないのか？

さて、そんな無能な教師の筆頭であるギトーという教師の授業が、というか授業中の個人的で浅慮な暴言が発端となり、タバサがある男子生徒に試合と称した決闘モドキを挑まれていた。

俺からすると決闘というのは相手の命を奪ってでも主張を貫く為の誇りと信念をかけた個人戦を指すのだが、どうも学院のボンボンたちはどうでもいいことでもホイホイと決闘モドキしているようだ。杖を落としたら終わりとか、戦士の誇りをなんだと思ってるんだかね。

俺もタバサもその男子生徒……ヴィリエ・ド・ロレーヌというのだが、その愚か者のセリフなんて半分どころかパーセントも聞かなくて読書に勤しんでいた。ちなみに本の題材は俺が「複数属性系統の融合と反発に関する考察」タバサは「風の力が気象に及ぼす影響とその結果」である。入学式に彼女が読んでいたのと同じ本だが、どうやら奥の深い事が書いてあるらしくまだ全てを読み解くには時間が掛かりそうだと言っていた。

「ふん！君たちが私生児だというのはどうやら本当の事らしいな。どうせ母の顔さえ知らない卑しい生まれなんだろう。そんな家柄のものに嫉妬したら僕の家名に傷がつくか！」

なんか好き放題言ってるな。タバサの噂、俺にもうつってたんだ。知らなかった。……ド・ロレーヌへの貸付金は確か、3万エキューくらいだったっけか？今のセリフ実家に教えてやるのかな。

生家の両親に大した思い入れがない俺には正直どうでもいい中傷だ

つたが、母のために血塗られた道を行くタバサには耐え切れなかったのだろ。ヴィリエが立ち去ろうとする前に杖を持って立ち上がった。お願い、といって俺に本を預からせる。まあ、無理もないよな。

「やつとやる気になったか。君のような庶子に名乗るいわれはないが、これも作法だ。ヴィリエ・ド・ロレーヌ、謹んでお相手仕る」

勿論、タバサが名乗る事はない。名乗る名もないか、とヴィリエが蔑みの言葉を重ねて『ウインド・ブレイク』を唱えた。タバサへ迫る空気の塊は、しかし直前でタバサの呪文による干渉を受け、詠唱者のほうへ襲い掛かる。タバサのような抵抗が出来ずに直撃を受けて壁に叩きつけられたヴィリエに送られるのは無数の小さな氷刃。身動きが取れないように壁に縫い付けられ、一際大きなものがその馬鹿へ飛んで行く。

「死ぬ、助けて！」

「……どうしようもない馬鹿がいる」

絶叫に反応して呟いたのは俺だ。それでもタバサは寸止めし、ヴィリエは氷が解けたものではない生暖かい液体に沈みながら逃げ出す。俺は馬鹿が放り出した杖を拾ったタバサを制してその杖と二冊の本を交換してもらい、逃げる馬鹿の進路をふさいだ。

「なっ!?!」

「やあミスタ。先ほど僕の生まれがどうか言っていたけど、あれは僕に喧嘩を売ったと捉えていいんだよね？まあ僕自身のこととはそっ気にならないんだけど、大切な友人を貶してくれた事について、ちょっとお礼をさせてくれないかい？ああ、そんなに遠慮しないで、ぜひ受け取ってくれよ。ほら、落し物をちゃんと拾って」

「あ、あ、あわわわわ」

杖を受け取って逃げ出すヴィリエを、『アースハンド』で捕まえて真上に投げる。そして俺の足元にもカタパルト用に『アースハンド』を作り出して俺を投げさせた。

「ぎゃあああ！ね、レビ、レビ……！！！」

「まあそう騒がずに落ち着きなよミスタ。魔法は次でお願いします」「え、え？」

結構な速度で飛んでいるが風魔法を使って言葉を届ける。その間にも眼を白黒させるヴィリエと俺の距離は縮まって

「ほら、吹っ飛べえツ！！」

「がつふ！」

エテ・ハンマー
風魔法を乗せて威力を増したパンチを贈る。かなりのスピードで飛んでいったが、魔法もあるし死にはしないだろうよ。いやあ、ちょっといいストレスの捌け口だぜ。
殴った反動で若干後退気味に落ちていくが、すぐにレビテーションで調整してタバサの傍に降りる。

「あー、すつきりした」

「サンガ。その……さっきの」

こっちに眼を合わせずに何か言いよどむタバサ。俺は続きをじっと待つ。

「私の事、大切な友人って、本当？」

「当然だろう？これほど時間を共有しておいて違うといたら何言

われるか。俺はあのゲルマニア人ほど奔放には出来ないんでね」

何を今更、という口調にちょっと皮肉を混ぜて返すと、タバサがそっと微笑んだ気がした。もう一度見ようとしたらいつもの無表情だったけどな。

ヴィリエが帰ってきたのは四日後の事。俺を見るなりガタガタ震えて逃げ出すので、変な噂が増えてしまった。……ほつとしても凸凹コンビにボコられるからほつといてやるか。

まあ、この後反キュルケ女子同盟主体、おまけヴィリエによる復讐計画が実行されたが、これは原作に沿ってことが進み、ヴィリエ達はやっぱりタバサとキュルケにボコられたらしい。

どうしてそこには関与しなかったんだ、つて？

俺はその頃、アルビオンのウェストウッドに居たからさ。偏在と自律駆動ゴーレムを組み合わせたダミー人形に授業を受けさせておいて、もう四日も滞在している。

時間がゆっくり流れている気がして、子供らと遊んだり薪割ったり昼寝してみたりとものすごくのんびり過ごす事が出来た。一生ここで静かに暮らしたい、と思わないでもない。

今回の最終目的は虚無の一角、脅威の胸囲を有する森の妖精を懐かせておくことである。のだが、このハーフェルフはちょっと不安になるほどのお人好し。丸一日森林生活を共にしたらあっさり懐いてくれた。やっぱり耳が尖っていることは誰よりも彼女自身にとって大変な事なんだろう。

予定より早かったが、もう一人味方が増えた。緑のロングヘアをそのまま下ろしている美女、土くれのフーケことマチルダ・オブ・サウスゴータである。最初は俺を王家の手先かと警戒していたが、4
マイル級の煉瓦ドックエのあいっゴーレムを50体くらい並べたら「そんなに強い

にあたしらを騙す理由もないか」と納得してくれた。子供の一人にちよつと催眠術も使つて見せたのもかなり利いた様だ。催眠の中心？寝つきをとつても良くしてやったただけだぞ。布団をかぶつて3カウントくらいにな。

今後のごたごたを回避するならティファニアをウエストウッドから連れ出すのが一番だが、それだとアルビオン撤退後にサイトが死んでしまう。マジックアイテム、主にガーゴイルを流用して村の秘匿性と防衛力を高めるに留めておく事にする。テファも忘却魔法を使うだろうけど、忘れるつてのは思い出せるつてことだからな。ちよつと念を入れておく必要があるだろう。

「じゃあ、俺は戻るよ。またな、坊主ども」

「おう、兄ちゃんも気をつけてな！」

「また来てね!？」

子供たちに懐かれたのが一番うれしかったのは秘密だ。

「またお会いできますか？」

「始祖と精霊の導きがあれば、かな？」

「よく言うよ、始祖なんて信じてないくせに」

「居た事だけは信じてるさ……じゃあ二人とも、元気でな」

テファには冗談で返して笑いあう。マチルダとは皮肉の言いあいだ。この隔離された村で過ごした一週間は、学院で十年暮らすより得るものが多いだろう。

俺は森を出て浮遊大陸の端まで行き、ドダイを作つて空を飛ぶ。竜もこない高度を取れば気づかれる事はないことに思い至つたのはここへ来る直前の事だった。

さあ、これで物語のキーパーソンは押さえた。後は時を待てばいい。彼らの物語がもうすぐ始まる。俺の野望も本格始動するだろう。

いかん、明日は虚無の曜日じゃないか。クルデンホルフペアトリスのこに帰らなければ！

第五話 / 氷雪人形と森の妖精（後書き）

フラグ回収のお話でした。

「相変わらず強引な」

そう言うなよ。どうだった？タバサとテファの感触は。

「そりゃもう柔らかくて暖かくて、って何言わせんだよ！」

冗談だ。今回の話の2/3、タバサ絡みの部分は原作の展開を流用しています。一応タイムスリップで言えば『史実』にあたる部分です。主人公が直接関わっていない部分はほぼ丸ごと、『何も変わらなかった』として使わせていただきました。タバサと接触編の冒頭用にどうしても必要だったので。

「今後は同じ事する気はないんだな？」

うん。以後は原作で起こった事を耳に挟む形がメインだ。原作主人公たちと同じ立ち位置で事件に関わるというスタンスは取らないようにする。

「……文才大丈夫か？」

正直自信ない。でも直接関与して話の大まかな流れまで新しく作るのもつと大変だと思う。

「へたれめ。テファのくだりも随分省略したよな」

テファの登場はアルビオン撤退戦後、サイトが保護されるあたりからになる。今回は顔なじみになりました、って補足程度、あくまで布石の話だからな。

「言い訳はかつこ悪いぞ」

うっさい。さて次回はいよいよ『春の使い魔召喚の儀式』！原作主人公が本格的に登場！そしてオリジナル使い魔の姿とは！……オリ主はルイズに干渉しませんが、サイトは助けます。

「大丈夫なのか、そのスタンス……作者の暴走にご期待ください」

ご意見、ご感想、誤字脱字文法考察ミスのご指摘などなど頂けますと、作者が文章力を向上させます。多分きつと。そのほかにも今後の展開のご希望などお寄せいただきましたら、考査と抽選の結果組み込んで行こうと思います。

「抽選はないだろ……ではまた次回！」

閑話／甘えられる人。わたしの勇者（前書き）

タバサ編です。相変わらずおかしな流れですが、ご容赦ください。

閑話／甘えられる人。わたしの勇者

「ミス・タバサ。隣いいかい？」

そんな風に声をかけてきたのは、赤い髪と白い肌の男子生徒。席は開いているから、断る理由は無い。どうぞ、と一声かけると彼は隣に座り、持っていた取り皿を席に置く。わたしは驚いた。その皿には、貴族にも平民にもとても苦いと評判のハシバミ草がたくさん盛り付けられていたから。彼は、わたしの表情を見てか小さく笑って、本の事も絡めて答えの無い問いかけを一つした。わたしが聞き流すと彼はそれきり何も言わずに食事を済ませる。

「また隣座らせてくれないか？」

「……席が開いてたら」

彼が微笑んで去っていく。……どうして？わたしは彼に何もしていないのに。

「隣、いいかい？」

「……どうぞ」

その後も彼はわたしの隣の席を取り続けた。元々名前を隠しているからか、他の生徒達はあまりわたしに近寄らないのに。彼も隣に座ったきり、特に話しかけてくるようなことはない。だけど、その存在感がわたしの心に何だか暖かなものを齎し始めている事が、なんとなく解った。

「また、隣座らせてくれる？」

「うん……待ってる」

だから、彼に隣に居て欲しいと、最近はよく思う。彼はストーブの炎のような、千年を経た大木のような、大森林の中の陽だまりのよ
うな人と、わたしは思った。

よく考えてしまうから、彼が隣に居ないときには少しさびしい。つ
い、あの蝋燭のような姿を探してしまう。そう、『任務』の間
でも。

『任務』で何日か学院を留守にしても、彼は何も言わなかった。そ
れまでと同じように、わたしの隣に座るだけ。そのうち、彼がよく
アルヴィーズの食堂に併設されている厨房に顔を出している事が解
った。彼はその中の一人、くすんだ金髪の小さな男の子にいつも何
かを言い聞かせていた。

彼の名を呼びながら駆け寄るメイドたちの表情と、それをあしらう
彼の少し困ったような笑みが、わたしの中になんだかよく解らない
感情を植えつけているような気がする。

だから、彼の名前を聞いた。

彼はあのクルデンホルフ大公国の公子で、わたしの事も知っている
と言う。そして何よりも、お母様を狂わせたあの薬の正体を知って
いる、と……！

「それは、本当？」

彼はスクウェアメイジでも簡単には作れない鋼鉄のゴーレムを何十
体も並べて策略の無意味さをわたしに教え、その上で語った。治療

薬を作っている、と。

「だが、患者を手元に引き寄せなくては意味が無い。そうだろ？」

この人なら、お母様を助けてくれる。成したとしても先の無い復讐から、わたしを助けてくれる。きっと、この人がわたしのイーヴァルデイ……

だから、抱きしめられてこんなに胸が高鳴るに違いない。だから、忘れたはずの悲しさでこんなに苦しいに違いない。わたしは、この人に、助けて欲しい……！！

~~~~~

一度だけ、彼をイーヴァルデイと呼んだことがある。

「俺は彼ほど立派じゃない。手下を作り、竜を欺き、お姫様と財宝だけ掻つ攫つて独り占めする盗賊さ」

彼は悪戯を企む子供のように楽しそうな笑顔を浮かべて、そう答えた。その笑顔がとても無邪気で、でも何かを含んでいるようで、不思議だった。

……いつの間にか、彼がわたしの隣にいたのではなく、わたしが彼のそばについて回るようになった。彼はすぐそれに気付いたけれど、何も言わなかった。

それまでは読書をしていてわからなかったけれど、彼はいつも虚無の曜日に故郷に帰っているらしい。週末になると風竜がやってきて、



彼がそれに乗って去っていくのをいつも見送っていた。故郷には、お姫様が待っているみたいだった。

彼のお姫様がわたしならいいのに。  
わたしは彼のお姫様になりたいのに。

なればいいじゃない、とわたしの心で誰かがささやく。  
虚無の曜日のお姫様になれないなら、他の日のお姫様になればいい。  
大丈夫。この学院の中ならば、誰にも邪魔されない。わたしだけの勇者様なんだから。

わたしは帰ってきた彼の腕を抱く。とつても恥ずかしい。彼がどうした？と頭を撫でてくれるのが気持ちいい。でも、彼はわたしをどう思っているんだろう……？

それからしばらくして、彼が厨房で作らせた不思議な食べ物を分けてくれるようになった頃、わたしと彼に妙な噂が立っていることに気が付いた。といつても、彼ら……何も知らないトリスティンの貴族達は聞こえるように陰口を言うのが得意なようで、きっと彼も気が付いていることだろうと思う。

家名も名乗らないなんて、どこの私生児だろう。きつと大金を積んで紛れ込んだ、卑しい生まれに違いない。

……なぜ、予想が外れたときのことを考えないのだろう。彼の家に負い目が無いトリスティン貴族の数なんて、片手どころか指一本で足りてしまう。この陰口を彼が本気で処断しようと思えば、誰も彼も打ち首に出来るほどの権力を彼は持っているのに。

でも彼は何も言わなかった。わたしも、外国の事だし口は出さなかつたけど、ほんの少し、悔しかった。

だから、ミスタ・ギトーの授業が終わったあと、何だかよく解らなけれど決闘を申し込まれたときの相手の言葉が、わたしには我慢できなかった。

お母様は、卑しくなんか無い。この人は、わたしの勇者は決して卑しい人じゃない！

決闘だ、なんていうけれど、相手とわたしの力量差は歴然としていた。当然の事だけれど。だからすぐに相手は降参した。だけど、その後。彼はわたしから相手の杖を受け取ってそれを手渡した。

「大切な友人を貶してくれた事について、ちよっとお礼をさせてくれないかい？」

そう言つて彼は戦意を喪失している相手の生徒を空高くから地平の果てへと殴り飛ばし、わたしのそばに降りてきて、あの悪戯めいた笑顔を見せた。

わたしは彼の、大切な友人。だから、駄目。この思いは

何を言ってるの？彼は、わたしを大切にしてくれている。だか

らもう少し、わたしが近寄れば、きっと大切な女性と呼んでくれるに違いない

この思いは、今は大切に心に秘めておく。いつか、本当に彼のお姫様になる機会を掴むまで。

閑話／甘えられる人。わたしの勇者（後書き）

いかがでしたでしょうか。タバサは『時間と衝撃で静かになつていく』といったタイプで表現してみました。

主人公は性格と能力特性のせいで、自分に対する評価は結構卑屈なんですね。まあ、身一つで竜殺しを成し遂げるイーヴァルディが相手では、卑屈になるのも無理はないかな？

第六話／俺の使い魔とあいつの使い魔（前書き）

GW執筆ラッシュ？

## 第六話 / 俺の使い魔とあいつの使い魔

バーナードと訓練して、タバサと読書して、テファと昼寝して、ベアトリスを抱く。そんな代わり映えのない日々が続く……男女比1：3。ギーシユもびっくりだろう。

俺たちも二年生になり、名のある原作キャラたちとクラスメイトになった。といっても、別に交流を持つわけではないのだが。ルイズの爆発魔法を一発目から防御したら、注目を集めてしまった。タバサ？ 勿論庇ったさ。

ロングビルと名を変えて学院にやってきたマチルダにも会った。まだ盗賊家業を続けているらしい。ウエストウッドのテファや子供たちのためにも、一度ミスったら助ける代わりに足を洗うようにと約束した。勝ちが分かっている賭博は楽しいな！

そしてあの日がやってくる。春の使い魔召喚の儀式だ。学院を出て草原に行き、そこで順番に使い魔を召喚してゆく。ふくろう、カエル、猫、蛇、カラス。一部にスキュアやバグベアーといった幻獣。ヴェルタンデ 巨大モグラや火蜥蜴、フレイルム 風韻竜もちゃんと出てきた。

「そしてとうとう俺の番、か」

「大丈夫。がんばって」

杖を抱えて進み出る俺に、タバサから励ましの言葉が掛かった。ありがたいね。

魔法陣の中に進み、杖を振り上げ、詠唱する。

「回り巡る運命さだめの中で、結ぶ縁えにしは、ただ硬く。願ねがいよ響け、あの空

へ」

殆ど思いつきだが、サモン・サーヴァントはそこが大切らしいので気にしない。もっと個性的な召喚する奴も居るし、鏡も問題なくできたし。

「おおっ!?!」

「なにあれ!?!」

周囲がどよめく中。

「何てこった……」

青白い鏡を抜けて出て来た大きな狐に、思わずため息を漏らすのだった。顔面の毛が白く、房状の尾が九本もある金色の狐。そう、白面金毛九尾に。

「ここで最強の妖怪か……力ある獣よ、我らの契りに否やはあるか?」

九尾は一声鳴くだけ。逃げる様子もない。隷属の確定は契約締結後のはずだから、同意と捉えていいのかな?

しかし、運命は俺のチート化を止める気はないようだ。ため息を一つ、改造したコントラクト・サーヴァントを唱える。勿論小声、早口で周りに名前を聞かれないように、だ。特にマリコル又は読唇術を持っていたはずなので背中を向けて。

「我が名はサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ。我と汝が持ち寄る意思において、ここに祝福と契約を」

鼻先にキスをすると九尾の額にルーンが刻まれ、俺の中にコイツの情報が送られてくる。

2063歳、雌。人語堪能。変身可能。妖術各種、大得意。ルーンの効能は知能強化と秘密念話能力。

……さすが最強の妖獣と謳われるだけある。半端ないぜ。幻獣種と張り合っても勝てるだろ……あとは名前だな。

「そつだな。……レミイ、で良いか」

『よろしく願います主様』

前世で名高い漢字の名前を使ってやるわけにはいかないの、新しく命名する事にした。

レミイをつれてタバサの傍に戻る。シルフィード共々注目的になつてしまつたが、ただの嫉妬にわざわざ神経を尖らせることもない。

「変わった生物」

「お互い様だ」

若干強い目で睨むタバサに、それ韻竜だと含ませて返事をする。

幼生とはいえただの風竜とは格が違うんだよ。

タバサもあまり深く語る気はないのでそれつきりだ。俺は体を横たえたレミイに寄りかかるように座り、タバサもシルフィードを空へやって隣に座り、読書を始めている。あれ、飛んでいかないのか？

横目で伺うのは一番最後、既に30回以上爆発を起こしているピンクブロンドだ。

周囲の生徒たちは失敗続きでも一向に諦める気配がないルイズにいらだち、野次を入れ始めている。空は快晴、雨が降るわけでもないんだから、のんびり待ってりゃいいのに。



「気になる?」

「うまくいくまで何回爆発するかってのにはね。お、今ので56回目だな」

「悪趣味」

「何を言う。俺だってそろそろ眩暈がする回数だぞ」

言われたタバサが目を丸くする。俺はニヤリと笑って本に目を落とし、以後も爆発音を数え続けた。

ルイズの前に召喚の鏡が開くまでの爆発回数は、なんと88回。精神力の多さが伺える脅威の数字なのに、どうも周りの生徒はおろかコッパゲ、じゃないコルベル先生でさえそこに思い当たる様子はない。やっぱり馬鹿なんだな、こいつらは。

「すごい数」

「コモンの速さであの規模の爆発ってのも、充分過ぎるほど怖い…  
…出てきたか」

「……人間?」

「だな。黒い髪とは珍しい」

原作どおり、鏡の向こうから出て来たのはパーカーとジーンズを着てノートPCを携えた黒髪の少年。

ルイズ共々ぎゃあぎゃあと騒ぐが、無視されてキスされてた。こうしてみると災難だよな。

そしてコルベル先生が解散の指示を出す。今日は召喚した使い魔との親睦を深めるという名目で、この後授業がない。レミィを飛ばすほど上級なメイジではないと振舞う俺は、レミィが走る速度にあわせて低空飛行して帰った。

ルイズとサイトは普通に歩いてたな。だいぶ気まずそうではあったが。

Outside

サイトの視線の先には、お情けとばかりに小さな肉の入ったスープと、固そうなパンがふた切れ。

「あのね？本当は使い魔は外なの。あんたは私の特別な計らいで、床」

虐待としか思えない待遇だが、一応、一応主人で保護者で生殺与奪が握られている以上、あまり文句は言えない。テーブルの上の豪華過ぎる食事をもう一度見やり「嬉しくて泣けるぜ」と呟いてその『餌』を口に運ぶ。味のないスープを飲んでいたとき、違和感を感じた。スープ皿の絵柄が、さっき見たときと違うような気がするのだ。急いでそのスープを飲み干すサイト。ちよつとむせた。

「げほっ、げほ！……なんだよ、これ」

そこにははつきりと日本語で『狐を探せ』と書かれていた。そしてサイトがそれを手にとってまじまじと見ていると、やがて字は消え、最初に見たのと同じ絵柄になってしまった。

「どうなってんだ……？」

食事を終えた二人がアルヴィーズの食堂から教室に向かう道中、サイトは意を決してルイズに尋ねた。

「なあルイズ、俺がメシ食ってるとき、スープの皿に細工しなかつ

たか？」

「はあ？何で私がそんなことするのよ」

「あ、いや、ごめん。じゃあさ、この学院に狐っているか？」

「狐？知らないわよ。ひよっとしたら誰かが使い魔にしてるかもしれないけどね。でもどうしてそんな事聞くの？」

いぶかしむように、しかしサイトを見ないで答えるルイズ。実はカリーヌとサンガの決闘を見ていたルイズが思い出して騒ぎ出さないように、サンガによって認識障害と記憶操作の魔法をかけられていたのだ。そのためルイズの記憶にはサンガの事がものすごく残りづらくなっているのである。

「あ、いや、なんでもない。気にしないでくれご主人様」

「そう。じゃあさっさと教室に行くわよ」

その後サイトは教室の窓から中庭に集う使い魔たちを見たが、青いドラゴンの影に金色のふわふわした何かを見つける事しか出来なかったので、きつとあれがそうなんだとあたりをつけることしか出来なかった。

そしてシュヴルーズの授業が始まり、大爆発。大破した教室の修繕をする羽目になり、その苛立ちが転じてルイズをからかったがために殴られ、食事も抜かれてしまった。

そしてシエスタに出会い、賄いを分けてもらうために厨房へ。

「ちょっと待っててくださいね……バーニー！バーニーったら！」

サイトを厨房の隅に座らせてシエスタが厨房にたつ小さなコックに話しかける。そして何事か言い含めると、そのコックは厨房の奥か

らあるものを持ってきて、その中から丸くて白いものを渡す。

「こんにちは、サイトさん。僕はバーナードです」

「ああ、どうも……って何で肉まん!？」

「ご存知なんですか？」

そう。木と竹で編まれた円筒形の蒸籠からバーナードが取り出したのは、肉まんだった。割ってみると、蒸されてモチモチとした生地の中に見慣れた具が入っている。

シエスタが不思議そうにサイトを見た。が、それよりもサイトのほうがずっと不思議そうに肉まんを見ている。

「どうしてご存知なんですか？これは『あの方』が最近作り出して、まだ厨房の使用人とミス・タバサくらいしかご存じない筈なんですけれど」

「いや、俺の故郷じゃこれのない町なんてなかったよ？他にもピザまんとかあんまんとかカレーまんとか……」

「あんまとカレーまんは知りませんが、ピザまんならありますよ？ほら」

バーナードが別の肉まんを割って見せる。中から現れたチーズが糸を引いた。

サイトは「なんでだよ」と頭を抱えたが、とりあえず受け取って食べはじめると、その味と懐かしさにとらわれて二個、三個と食べてしまった。

「ふう、ご馳走様。ありがとう二人とも。そういえばさっき言っていた『あの方』ってのは誰の事だ？」

この質問を受けた二人の顔が、少し曇る。先に口を開いたのはシエ

スタだった。

「ごめんなさい、サイトさん。『あの方』のお名前は出してはいけない事になっているんです」

「僕の主人にあたる人なんだけれど、立場の都合から名前を伏せているんです。今の肉まんも黒髪の人が来たら分け与えるように命令されてたんです」

「そう、なのか。すごい奴が居るんだな。じゃあもう一つ、学院の中で狐を見た事ってないかな」

「狐ですか？……ちよつと変わったのでしたら、教室傍の広場か『あの方』のそばに居る筈ですよ。使い魔ですから」

「わかった。ありがとう……そうだ、お礼に何か手伝わせてくれな  
いか？」

変わったの？という疑問はさておき、サイトは提言する。ルイズの下着を洗うのは嫌だが、助けてくれた二人に恩返しをするのに否やはない。

「そうですか。でしたらもうすぐティータイムですので……シエスタさん」

「そうですね。ケーキを運んでくれますか？」

そして食堂でデザートを配り、更に庭側のテラスへ配りに行ったサイトは、ファンタジー世界で寝そべる九尾の狐に仰天するのだった。

Side out

俺はレミイを連れてタバサを紅茶を楽しみながらサイトの様子を見ていた。最初にレミイを視認したときのサイトの顔は一見の価値あ

りだな。無理もないが。あの後もサイトは俺気にしてますと言わんばかりにちよくちよく視線を向けていた。

そしてギーシュのポケットから香水が落ち、それをサイトが拾って返し、誤魔化そうとしたギーシュはケティという後輩にビンタされ、モンモランシーにはワインをぶっ掛けられた。

違う、誤解だ！とギーシュが主張しているが、そんなもの信じる奴はこの魔法学院中探したって居やしない。そのうちギーシュがサイトに責任転嫁して逆に笑いものになり、決闘を申し込んで立ち去るのにその時間は掛からなかった。

残されたサイトはルイズやシエスタに謝るよう言われているが。

「少年、こつちにケーキ！」

俺が彼の仕事にかこつけて呼び寄せてしまう。シエスタを介せずに直接ケーキを渡すサイトが、小声で話しかけてきた。

「あのメッセージと肉まんを寄越した『あの方』ってのはあんだだな？」

「正解だ。詳しくは話せないが、俺は日本を知っているし、お前の味方もする。ラ・ヴァリエールには秘密でな。何か用や質問があれば、食事の時間にもこいつに接触しろ。喋れるから心配は要らん」

「……やっぱり妖怪なのか？」

「多分な。伝承の九尾そのものだろう」

ケーキをタバサに渡して席を立つ。後ろでルイズが騒いでいるが、無視だ無視。

「ところでヴェストリの広場だったな？案内しよう」

そして決闘とは呼べないお遊びが始まり、サイトがボコボコにされていく。ルイズが不器用ながらも泣きを入れ、それを拒むサイトの前にギーシユが剣を作る。粗悪な青銅の剣だったからこそり鋼鉄製の芯を入れてやった。ガンダールヴなら問題なく扱いきると思うんだが、重心も狂ってたから念のためにな。

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯が不味くたっていい。下着だって、洗ってやるよ。でもな。下げたくない頭は、下げられねえ」

いいねえ、揺るがぬ信念つてのは。ハルケギニアに生まれて16年。これほどの信念を見たのはうちの大公じいさまがロマリアの使者を突っぱねたとき以来だ。いや、お世話になりました。

サイトのルーンが輝いてワルキューレ7体を叩き切り、震えるギーシユが敗北宣言をするのに掛かった時間は15秒を切っていたはずだ。

その後サイトは倒れて眠り込んでしまった。難儀な体だよな、あのガンダールヴつてのも。

隣に居るタバサに、熟練の戦士としてお話を伺います。

「今の剣、どう思う?」

「単純、素人。あなたのほうがいい」

えーっと、タバサさん?最後の一言はどういう意味ですか?どうして服の袖をつまんで顔赤くしてるんですか?上目遣いやめて!?

ルイズに担がれて退場するサイトを横目で見ながら、俺は静かに冷や汗をかいていた。

ああ、覚悟しよう。ベアトリスに怒られる。この間もアルビオン土産がないとか怒られたけど、これが知れたらそんなの比じゃないくらい怒られる。ある意味幸せの証明だが、俺はそういう性癖ではない。マゾはマリコルヌだけで充分だ。

『土くれのフーケ』によって巻き起こった秘宝盗難事件はその次の虚無の曜日になってきた。俺はクルデンホルフでベアトリスとデートしていたので詳しい事はまったく耳に入らなかったが、翌日『機兵の系譜』のゴーレム加工でプチモビを作って学院長室を盗撮。そうして得た情報を元にマチルダが城の衛兵に引き渡されるまで幽閉されている部屋に忍び込んだ。

「見事にとつつかまったね、マチルダ」

「サンガ!? どうやってここに」

「しっ! 声大きい」

部屋の壁に沿ってサイレントの幕を張っているので外に聞かれる心配はないと思うが、こういうのは気分なのでマチルダの口をふさぐ。

「で、どうする? 約束どおり盗賊をやめてウエストウッド共々俺の援助を受けるって約束するんなら、ここから逃がしてやるよ」

「に、逃げるなんて、そんな事が出来るわけがないだろ」

「入れたんだ。出れない訳ないだろ? ほれ」

俺は杖を一振り。ダミー人形マチルダを作り上げる。

「スキルニルの人形、じゃないね」

「ゴーレムを基にしたダミー人形の魔法さ。解除しない限り十日は



このまま。簡単な受け答えも出来る。身代わりには充分だろ」

「とんでもない魔法だね。あんた、本当に何者なのさ」

「少なくとも今はただの道楽貴族だ。魔法は八角形オクタゴンまで使えるけどね」

「オクタ……!？」

「ほら、とつとと逃げるぞ。それともテファを泣かせる気か？」

「っ、分かったよ」

錬金で床に穴を開け、マチルダをつれて逃げ出す。勿論気付かれるようなへまをする俺たちじゃない。その道中で俺の魔法についてちよつと講釈した。

王族が複数名で使うヘキサゴンが一番上だというが、そもそも同じ系統を複数足せるのに複合の最大数が系統の数に限るなんておかしい、と。

ちなみに創り出したオクタゴンスペルは唯一つ。

土と火の二乗で大きな油の炎を、風と水の二乗で強大な嵐をそれぞれ作り、この二つを体の正面で打ち合わせることで発生する巨大な水蒸気爆発を、風の二乗で作った強固な空気の壁で方向付ける、という魔法。

つまり、極大殲滅呪文でお馴染みメドロアだ。

「勿論これは全力で放つときのレシピで、手加減するならラインの炎とラインの吹雪で完成させられるぞ。まあそれでもスクウェアスperlだし、1リーグ四方は確実に焦土と化す威力があるはずだけだな」

「それで手加減って。じゃあ本気でやったらどうなっちゃうんだい？」

「アルビオン大陸くらいなら跡形もなく消し飛ばせるんじゃないか」

な？危なすぎて実験まではしてないからあくまでも机上の理論値だけだ」

ちなみにオクタゴンが使えるという実証は、水蒸気爆発を起こさないで同時にそれぞれの魔法を構築する事で行いました。だから何も壊してないよ？

「……… 今後はあなたの言う事全部聞くよ」

そう言ったマチルダの顔は、真っ青だった。

マチルダをウエストウッドに隠して戻ってくると、フリッグの舞踏会が佳境に入っていた。

俺が見つけるより早く俺を見つけたタバサが、駆け寄ってくる。黒いパーティードレスは静かなタバサのイメージにシックな女らしさを付与していて、その。なんだ。

「良く似合ってるよ、ミス・タバサ」

「……… 私と踊ってくださいますか？」

「この身でよければ、喜んで」

真っ赤になったタバサの誘い。俺は快諾してホールへ躍り出て行った。……… ベアトリスが怖いなあ。

## 第六話／俺の使い魔とあいつの使い魔（後書き）

さて、とうとう魔法の実力が具体的に明かされた、チート鬼畜野郎です。どうぞ！

「酷い言われようだなオイ！お前が書いたんだろうが！」

他に言いようもないし？今回は使い魔召喚と接触の話。タバサのフラグが勝手に育ってました。

「勝手にって、オイ。何でそうなるんだよ」

良く分からない。頭の中で思い浮かんだ文章を打ちまくって、それを元に話の形を整えるという手法をとっているから、かなり突飛な展開が多いようだ。

「そうだな。その辺の補足はリクエスト次第で番外として形作ろう。というか、必ずそうしろ。読者置いてけぼり過ぎるぞ」

はい、ごめんなさい。感想ページにベアトリスの馴れ初めを期待されているので、これは書きます、夏まで、いや秋までには！

「そういう言い方って、普通は期間を縮めないか？」

なにぶん非才の身故に。使い魔は九尾の狐。チートだねえ。

「前回で触れた先住魔法云々は妖術で代用できそうだな。という事は、俺は対エルフ戦術のカードも手に入れたということか？」

そうなるな。妖術と先住魔法を同一と据えるか別箇にするかはまた少し考えながら執筆するよ。

「相変わらずテキトーな奴。あらすじのお気楽って俺じゃなくてお前なんじゃ？」

はっはっは。ナンノコトヤラ。さて今回は、アルビオン編が始まります。ロリコン子爵に触れる事はないので、この長編も二。三話くらいで締める予定です。久しぶりにベアトリスの出番が発生。

「流しやがった。トリステイン放り出してクルデンホルフに帰るのか？」

権限の活きている王族としては当然の義務だな。アンリエッタの手紙イベントは省略して、一気に開戦へ。オリ主は母国に帰り、何を始めるのか。ガリア戦線や聖戦まで国家転覆を保留するのか、それとも否か！

「ガリア戦線って言うとおのPSS3ソフ」

シヤラップ！それ以上言うてはいけない。タイガーの代わりにエーデルワイズが出て来かねないからな！

「そんな理由で簡単にクロスすんのか、この作品は！？」

あー、ではこの辺で。作者は皆様からのご意見、ご感想、誤字脱字や文法考察のミスご指摘、今後の展開のリクエスト等をお待ちしております。

「皆様のご意見は作者を成長させる可能性があります」

……特定保健用食品みたいなフレーズだな。

「気にしたら負けだ。ではまた次回！」

## 第七話／何でもない日と迫る戦い（前書き）

GWラッシュ終了。今後の更新ペースは週一、早くても二くらいに落ち込みます。

## 第七話 / 何でもない日と迫る戦い

魔法学院秘宝盗難事件から、しばらく経った。

この間の虚無の曜日にくルデンホルフに帰ったら大公と義父が喧嘩していた。大公の座を引き継ぐとか引き継がせないとか。大公になつて孫を迎えたいと義父が言い、大公であるうちに曾孫が見たいと当代が言う。……どっちにしても当分先のはずなんだが。ベアトリスマだ14だよ？手、出してるけどさ。

まあそれはともかく。

「違うう！何度言わせりゃ分かるんだ、このアホサイト！攻撃を全部叩き落すんじゃないで、どうしても避けられない攻撃だけ弾くんだよ！ルーンのおかげでスピードはあるんだから無駄な動きで体力消耗してどうする！」

「わ、分かったよ。よし、もう一度だ！」

「ド阿呆！何でもかんでもぶっ飛ばせばいいつてもんじゃない！お前一人で竜の群れに突っ込んだってスタミナ切れで殺されんのがオチだろうが！誰にでも勝つんじゃないで、誰からでも何時まででも生き残るのが大事なんだよ！護るって事の意味ちゃんと分かってんのか！？」

「わ、わりい。……つつうかあんた、俺より年下じゃなかったのか？」

「何を今更。人生経験なら量も密度も倍以上あるわ。だから黙って従え！返事は！」

「サー！イエッサー！」

あれから俺は授業の殆どをダミー人形に任せ、レミイを従えてサイトに盗賊退治で培った傭兵流の剣術・戦術・戦闘理念と対魔法騎士戦法を少し教え、トリスティン、否さハルケギニアの貴族たちがいかに命を軽視しているかを嫌と言うほど教え込んでいた。惚れた女を護りたければぶん殴って気絶させてでも連れ帰れ。あいつらはそういう類の救いようがない馬鹿だから、と。サイトもフーケのゴレムの時に実感していたらしく、反論してこなかった。デルフの鞘も改造してやった。サイトの体格じゃでかすぎて背負うしかないからな。

ちなみに彼の主人であるピンクブロンドの少女は真面目に授業を受けている。『使い魔を授業に同席させなければならぬ』という校則はないので、睨まれながらも文句は言ってきたくないそうだ。

とりあえずワルドに負けた後の自失期間を短縮出来るモノの考え方と、野盗くらいならルーン無しでも撃退できる程度の剣術は覚えてもらう。対軍人でも通用するような本格的な戦い方はアニスに任せるにしても、アルビオン撤退戦における殿の役割は確実に果たしてほしいからな。

勿論テファの様子を見に行ったり虚無の曜日到大公家に帰る事も忘れてはいない。約束を違えないのが浮気を許してもらう為の大事な一手なのだ。別にテファやタバサに手を出したわけじゃないが、女性がもつ『浮気』の判定ラインは男には決して理解できないものだからな。

どっかのご主人様もそんな感じらしく、わけわかんねえとサイトがぼやいてた。

そうして訓練を続けていると、ダミー人形が拾った音声転送され、何の前触れもなくトリスティン王女アンリエッタの行幸が知らされた。……分かつちやいたけど、もっと早く報せようとは思わないの



か。

しかも、あの無能姫と鳥の骨枢機卿は俺たちの婚姻発表に出席していたはずだから、顔を見られると不味いかもしれん。隠れてよう。

「サイト。異常事態発生だ。今日の訓練はここまで。毎朝の素振り  
とシャドウは忘れるなよ」

「い、異常事態？」

「ああ。トリステインの王女が来る。今からな」

「なにいつ！？ここ王立の施設なんだろう？そういつのってもう少しあるんじゃないのか、ほら、前もって連絡とかさ？」

「俺もそう思うんだが……流石はトリステインとしか言いようがないな」

サイト共々、ため息をつく。顔を上げるとそういえば、といった表情でサイトがこつちを見ていた。

「あんたトリステイン人じゃないのか？」

「ん？まあな。そんな事よりさっさとルイズのところへ行け。準備があるはずだ」

「お、おう！」

大慌てで走り去るサイトの背を見送り、俺は寮の自室に戻る。先日スパイアイテムとして非常に優秀だと実証されたプチモビをルイズの部屋の入り口に貼り付けておく事は忘れない。

『つまり覗きですね？』

「その通りなんだが、どうも伝わり方がおかしく聞こえるな」

『またまた。本当は映像を使ってあんなことやこんなこと』

「その辺で黙れ耳年魔」

『みつ、未経験みたいに言わないでください！』

「そつちか！」

レミイと少し漫才をして自室で待機。日が落ちきった頃、ルイズの部屋に王女が来てディティクトマジックを行使した。

『どこに耳が、目が光っているかわかりませんからね』

そう言つてローブを取るアンリエッタ。

甘い。甘すぎますよお姫様。今まさに貴女の後ろ頭が見えています。映像も音声もとってもクリアですよ。

『主様。新開発の探知妨害機能は大したものです。流石はミノフスキー粒子とでも申しましようか』

「どこで覚えた、その単語」

『主様の知識からです』

……レミイの性格がネタ化してきてる気がする。

それはさておき、アンリエッタがルイズとの再開を懐かしみながら国民の幻想をぶち壊す御転婆振りを暴露し、サイトはルイズに恋人じゃないといわれて凹み、ルイズは三文芝居でアルビオン王子ウエールズ・テューダーへ贈られた手紙の回収を依頼された。

頼むほうも困ったもんだが、あっさり受けるほうもアレだよな。サイト。ご愁傷様。

その後サイトもアンリエッタに煽てられ、『手を許され』て『唇へキス』した。いやもう、その後のギーシュとのコント共々爆笑モノだった。部屋の壁にサイレントかけてなかったら寮塔中から苦情が来そうなほど笑えた。

……はて？そういえばギーシュの奴どうやってこの時間に女子寮に忍び込んだんだ？まあ、アイツの事だから考えるだけ無駄か。

ま、ともかく。アンリエッタはルイズへ密書ラブレターと水のルビーを渡し、

部屋を去っていった。

仮にも始祖の遺産を売れとか言うなよ。それこそ祈祷書と並んで一番大事な国宝だろうが。

翌朝。朝靄も晴れないうちに走り去る一体のグリフォンと二頭の馬が走り去るのを見ながら、ハルケギニアでも一桁しか生産されていない機械式懐中時計を眺めてカウントダウンを始める。

「5 / 4 / 3 / 2 / 1、タイム・アップ！」

ダミーマチルダに転送供給されていた魔力が途絶えるのが分かる。どこかで変態・白仮面が腰を抜かしているような気がした。想像したら笑えてきたぜ。

きゅい、と鳴き声が聞こえたのもう一度窓の外を見る。一体の風竜が人間を二人乗せてさっきの集団を追いかけていくところだった。しっかり助けてやれよ、お二方。

さて、俺はこのアンリエッタのラヴレター騒動に関与する気は欠片もない。一応、始祖のオルゴールを回収する工作だけはした。ダミー人形の応用と小型化で連続駆動時間を長くした1 / 144スケールのザクとドダイを2セット、兎肉三羽分で買収したシルフィードに張り付けるといふ形で。うまくいってもいなくても、計画に大きな差はない。

その日からの授業は、ルイズ、ギーシュ、キュルケにタバサの四人とそれぞれの使い魔が居ない状態で行われた。これまでに交流を持ったのはタバサだけなので、俺は一人、教室の隅でおとなしくしていたのだが。

「ね、ねえ、ミスタ。少しお茶でも飲みませんか？」  
「……ん？」

二日目のこと。黄金のドリル……じゃない、金髪縦ロールの気が強そうな女子に話しかけられた。こんな面倒そうな髪型してるのは教室中、いや学年中見ても一人しか居ない。

「確か『香水』のモンモランシー・ド・モンモランシ。だったよな」  
「覚えていてくださったのは光栄ですけど、先に答えてくれませんか？」

「あ、ああ。俺でよければ、喜んで同席させていただきますよ」

うわあ、面倒そう。ギーシュめ、良くこんなのと付き合えるな。あのお調子者のナルシストにはちょうどいいのか？

モンモランシーに連行された先はアルヴィーズの食堂に併設されているテラスだ。ギーシュとサイトの決闘騒ぎが始まった場所でもある。どうやら話がある、という社交辞令だけでなく本当にお茶を飲むつもりらしい。

「ミス・モンモランシ。わざわざ交流のない俺を呼び出して、どんなご用件かな」

「……貴族にとって交流の幅を広げるのは一種の義務みたいなものでしょう？」

「否定はしないが、交際相手が居るのに別の男と二人でティー、というのはあまり良くないのでは？」

「交際相手って、あの浮気モノの事？ いいのよ、あんなやつ」

ギーシュを引き合いに出したら随分と素が出たようだが、そのセリフは耳が痛い。ついでに言えば自分の発言も全部自分にハネ返る言

葉だ。俺の場合は交際相手じゃなくて配偶者だが。

「そうか。そのギーシュのことが聞きたくて俺に声をかけたんだと、そう思ったんだが、どうやら違ったようだな。申し訳ない。改めて用件を聞かせてくれないか」

「なッ………！」

顔を真っ赤にしてフリーズするモンモランシー。凶星を刺された上に墓穴を掘って退路を塞がれてしまった。この上で尚心配なギーシュの事を聞きだすためには、恥をしのんで前言を撤回しなければならぬ。

一度口に出した言葉を取り下げるのは貴族の恥だ。でも、ひよつとしたらあのお調子者が何かとんでもない事に首を突っ込んでいるかもしれない。

そんな葛藤が表情に表れている。ティーカップの中にうつる自分の顔とにらめっこして大体三分。いい事を思いついたと勢いよく顔を上げた。

「ねえミスタ。どうして私が貴女にギーシュのことを聞くと思ったのかしら？」

「簡単な事だ。ラ・ヴァリエールとその使い魔まで一遍に消えてる上に、ギーシュとラ・ヴァリエールの二人には外出許可まで出てる。さらに、やはり今日になって突然消えたツエルプストーがラ・ヴァリエールの使い魔にコナをかけようとタバサの風竜を使って追いかけたらうことは簡単に連想できる。となれば、まずはギーシュの取り巻きに聞き込み、それで分からなければタバサと仲が良い俺のところに来る。違うか？」

「うー」

モンモランシーが胸に手を当ててよるめく。結構でかい……じゃない、大きな奴だ。うん。いちいち芝居がかつてるんだよこの貴族たちは。

「さて、ではそろそろ本題を聞かせてくれないか？」

「い、意地が悪いのね」

「何のことか……いや、冗談だ。ギーシュたちなら、一週間もあれば戻ってくるさ。多分、無傷でな」

そういうとモンモランシーは胸に当てていた手をなでおろす。

原作によればラ・ロシエールとか言う港町まで馬を何度も取り替えて丸一日、翌日の晩にアルピオンへ出航、王党派の最後の晩餐が開かれ、翌朝にはワルドの裏切りがある。そこからシルフィードでまっすぐ戻ってくれば一日。ヴェルダンデや馬のことを考えて陸路で戻ってくるなら二日かかる。彼らがどう判断するのだが、どちらにしても全行程で三日か四日、加えてトリスタニア滞在時間だ。

マチルダが居なくなった事でも少し時間が掛かるかもしれないが、彼女の役目は傭兵を雇って一行を分裂させる事。誰にでもできる。それほど大きな差は出ないはずだ。

シエスタがこっそり置いていったスコーンを口に入れ、頬杖をついて空を見る。

「どこ行ってんのかしら、あの馬鹿」

「なあに、この空の下なのは間違いないさ。心は広く、安らかにな」  
「余裕なのね、あなた」

それっきり会話がなくなる。陽気に包まれて静かな、少し重い午後を過ごした俺たちは、それじゃあ、の一言で別れた。別に何があっ

たわけでもなく、いつも一緒に居る相手が居なくなつた者同士、傍に人影がほしかったただけだろうと、そう思う。

去つたモンモランシーが見えなくなつて、もう一度空を見上げる。

レコン・キスタが宣戦布告をしてくるまで、そう長くはないだろう。もうすぐだ。彼らが戻り、アンリエッタの輿入れが始まれば、俺はクルデンホルフに戻つて軍を率いなければならない。『機兵の系譜』は温存、『メドローアもどき』は全面封印だが、隠していた権力と魔法力を開放する必要があるだろう。それはガリア、ロマリアはもとよりゲルマニアとトリステインも含めたハルケギニア全域からの警戒を買うのと同義だ。下手すればサハラの中も手出しをしてくるかもしれない。聖地に興味を示さなければ、大したことはないと思うが。

開戦すればクルデンホルフの名は隠せない。つまり、ただのサンガ・グレイとしての日々はもうすぐ終わる。

『主様……泣いておられるのですか？』

「見てもいないで適当な事を。寂しくなるのは事実だが、わかつていた事だ」

『……私は主様と共にありますから』

二千年を生きた狐に慰められる自分に苦笑しながら、レミイの柔らかな毛並みを撫でる俺だった。

## 第七話／何でもない日と迫る戦い（後書き）

今回はスキマな話。主役のいなくなった魔法学院で黄昏る主人公です。サイトの能力を僅かに底上げし、静かな午後から来るべき動乱へ思いを馳せました。

「なぜモンモン？」

学院内での原作キャラとの絡みが少ない、つてご指摘をいただいたんだ。でもこの時点でギーシュやキュルケに執着していそうなのが居そうになかったのよ。男子生徒面々は水精霊衛士隊結成するまではちょっとつるむだけ、みたいな感じだし女子もわざわざ聞き込みかけるほどの彼女は彼女しか居ないと思って。

「言い訳が長い」

次回、原作主役が帰ってきます。進むトリステイン・ゲルマニア同盟。主人公はクルデンホルフへ帰ります。メインヒロインの癖に出やすく長期休暇していたベアトリスが再登場！そしてオリキャラ量産の予感！

「大丈夫か……？ご意見、ご感想、誤字脱字文法考察矛盾のご指摘等、お待ちしております！」

ちなみにこの作品におけるプチモビの立ち位置は、某蛇の人が東欧で遭遇した黒くて丸いアイツと同じような感じですよ。なぜか付いたミノフスキー粒子散布機能でステルス調査だ！



「……またチートな」

**第八話 / 蘇る翼と歪む動乱（前書き）**

予定を変更してゼロ戦編をお送りします。

## 第八話 / 蘇る翼と歪む動乱

サイトたちが帰ってきた。土産話を聞く限りでは、ワールドに負けた後も凹まずにルイズの傍に居たらしい。おかげで裏切りには即座に対処できたようだ。それでもウエルズは死んでしまったが。

シルフィードはきちんと仕事する奴だった。礼を言いに行ったら「また何かあったらいうのね！ついでに寄ってあげるのね！お肉くれたら！」と言っていた。胃袋で動く個人は基本的に信用できると思うんだ。

それから数日後の夜。レミイが念話で助けを求めてきたので行ってみたところ、ヴェストリの広場にオンボロのテントが張られていた。そうか、サイトが使い魔クビになる話があったな。原作ではヴェルダンデとフレイルだったが、お前も巻き込まれたか、レミイ。道中でキュルケに会った。サイトを宝探しに誘うのだろう。

「あのテント、何かしら？随分騒がしいけれど」

「さあね。少なくとも俺の使い魔はあの中に居るらしい。君のサラマNDERもかな？」

「確かに、フレイルの声ね」

酔っ払いの声に混ざってきゅるきゅるとセルモーターみたいな鳴き声が聞こえていた。

キュルケがつかつかとテントまで進み、その入り口である垂れ布を一気にめくり上げる。俺にとっては予想通りだが、惨状が広がっていた。ワイン片手にフレイルを抱いてクダをまくサイトと、モグラに押し掛かるようにして泣くギーシュ。散々絡まれたのだろう、レミイ自慢の毛並みは所々ワイン色にシミが出来ていた。

「ジエントルメン、客だぜ」

「キュルケ？」

「楽しそうね、私も混ぜてくれるかしら」

デルフの呼びかけがあつてようやくサイトが此方に、というかキュルケに気付き、キュルケが微笑む。サイトの表情が不遜な感じになり、ふらふらしながらも立ち上がり、キュルケを指差した。

「そのでっかいおっぱい、見せてくれたら、入れてやってもよい」

酔った勢いとはいえ、馬鹿な事を言うものだ。見せてくれるって時には怖気づいて何も出来ないヘタレのくせに。ギーシュはギーシュでトリスティン貴族の名にかけて同意、とか訳のわからない事を言つて拍手している。お前は祖国の貴族が軒並み変態であると声高に証言するつもりか。事実ではあるが。

呆れたキュルケが杖を振ろうとするのを止めて、俺が杖を持つ。レミイを焼かれてはかなわないからな。

「レミイ、ヴェルダンデは息を止める。フレイムはこっち、主人の後ろへ。『アクアトーン・レベル？』」

生き物に使うのはバーナードを洗ったとき以来だが、今回は酒の汚れなのでスクウェアの魔力を込めてみた。ダムでも決壊したのかと思わせるほどの水が地面の下からテントを吹き飛ばし、空中で乱回転して汚れを落としていく。一応魔法の効力で口や鼻から水が入っていく事はないのだが、パニックになつて自分から水を吸い込めばその限りではない。サイトとギーシュは溺れかけているが、馬鹿にはちょうどいい薬だ。

そのうち水は霧散し、錬金で強制的に乾燥され、地面に下ろされる。ちなみに水が噴出した穴は修復済みだ。酔っ払っていた人間二人は

かなりの水を吸い込んだようで、咽ながら地面に突っ伏していた。

「目は醒めたか、酔っ払いども」

「げふ、ごふ！あ、ああ、うっぷ」

「き、君？僕は、グラモン元、帥家の」

「酔っ払いに国も身分もねえよ。今度は焼いてやるつか？」

「失礼しました、うっ、げほ！」

「ったく」

話が進まないので錬金で肺と気管に入り込んだ水をへりウムに変えてやる。酸素中毒や爆弾変化は危ないからな。

「オオ、楽ニナツタ……ナンダコノ声ハ！？」

「な、なあにあなた、変な声！」

「へりうむ遊ビ、ツテ俺モカヨ！？オ伊さんが元ニ戻セ！」

「ダーリンまで！」

「咽るよりマシだが。たいした量じゃないからすぐ元に戻るよ」

急に高音になった自分の声に混乱するギーシュと大ウケのキュルケ、原因に思い当たって俺に掴みかかるサイトを宥めて、数十秒。二人はいつもの声に戻った。

その後、キュルケによって宝探しが提案され、サイトとギーシュはその話に乗る。

「あなたも行かない？」

「財宝に興味はないな」

「そう？残念。貴方ほどの実力者なら、ぜひお力を借して欲しかったのだけれど」

キュルケが俺の腕を抱きかかえる。柔らかな感触が伝わるが、これでも妻帯者であり、テファで慣らした俺の理性がその程度で吹き飛ばはぶが。加えてハルケギニアでも五指に入る資産家であるから、金に目がくらむ事もない、というよりは金銭感覚が無い。冷静に考えよう。アルビオンが宣戦布告するまでには、この宝探しが終わってゼロ戦が魔法学院に運ばれ、コツパゲによってガソリンが量産されるだけの猶予がある。参加してみるのも悪くないが、ただゼロ戦を見に行くだけのも……

「行こうぜ、サンガ！」

「お宝、ねえ」

「お願い、ミスタ。ギーシュじゃ心細くって」

「まあそこは良く分かるんだが」

「おい、きみ、そりゃないよ！」

ちよつとギーシュをいじめていると、後ろから誰かに抱きつかれた。鳩尾の前でしっかり手を合わされており、かなり小柄な人物が全力でしがみついているのが分かる。その人物の顔を見たらしい3人が目を丸くしていた。

「貴方が行かないなら、私も行かない」

「ちよ、ちよつとタバサ!？」

一番期待しているだろう戦力の脱退宣言に、キュルケの顔色が変わる。分け前を増やすからとかもう虚無の曜日の読書を邪魔しないからとか色々説得を試みているが、タバサは俺にしがみついたまま反応しない。

「ああもう、頑固なんだから!ねえミスタ、お願い!いくらダーリンが強くてモタバサ抜きじゃ怪物や猛獣との戦いに勝ち続けられる

と思えないの！」

かなり本音で必死に説得された。俺としてもタバサが戦線離脱したまま宝探しに出かけられてはたまらない。まず間違いなくサイトが鬼たちに潰されてしまうからな。仕方ない。ちよつと早いけど、本格的に原作破壊を始めようか。

「分かったよ。行こう」

「助かるわ！本当にありがとう。お礼は必ずするから！タバサもそれならいいわよね？じゃあ準備して出発よ！」

「私も行きます！皆さんのお世話します！」

「バーニイのほうに立つぞ？」

「そつ、そんなあ！連れて行ってください、サイトさん！」

「え、俺に振るの！？」

キュルケはタバサの説得に成功し、シエスタが乱入、更にバーナードを連れ出した俺たちは宝探しに出る。俺たちが参戦した事で一件の労力がかなり軽減されたのだが、ギーシュが文句を言い出したので『タルブの村に眠る竜の羽衣』を『26件目』として最後になった。勿論俺の小細工だ。ギャンブルに嵌める理屈でちよこちよこアタリを作り、疲れたとギーシュが喚くまで俺がこの地図を隠していたのである。

タルブの村近くの草原に建っている寺院に、俺たちは居た。寺院というが、俺とサイトから見ればこれは神社だ。第二次大戦中の日本人であるシエスタの曾祖父が竜の羽衣のために建てたというから、たぶん最初から神社なのだろう。鳥居、木の柱に漆喰の壁。そして注連縄。日本人が見れば誰であれこれは神社だというだろう。

その中に件の『竜の羽衣』つまりゼロ戦がある。魔法の力によって六十年以上の時を経て尚健在な姿を残す、日本が世界に誇った戦闘機。

ギーシュとキュルケが飛ぶわけないガラクタだとこき下ろし、タバサは工芸品としての興味であちこち見て回り、サイトは茫然自失。俺はガソリンと機関砲弾と機銃弾のサンプルを採取した。俺の解析魔法をもってすればサンプル一つでいくらかでも錬金可能だからな。ちなみに弾は曳光弾と通常弾、両方採取した。そうじゃないと後で困るからな。バーナードは俺の助手だ。

その後シエスタの曾祖父の墓へ行き、墓碑銘をサイトと読み上げる。

「海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル」って読めるのか、サンガ!

「ええっ!? どうしてお二人が読めるんですか!」

「読むだけならな。サイト、俺はジュゲムジュゲムなら最後まで言えるぞ?」

「あんた本当にこの世界の人間か?」

「生まれも育ちもハルケギニアだ」

現世は、な。再び神社に戻ってサイトがゼロ戦に触れ、ルーンを発動させる。その後シエスタが曾祖父の形見のゴーグルをサイトに渡し、ゼロ戦の所有権が譲渡できる事を告げた。俺は『動く状態でも動かせないから』という理由で辞退した。当たり前だ。飛行機の操縦訓練なんて受けてない。

翌日、そのゼロ戦を魔法学院に運ぼうという段階になって騒ぎが起きた。見ればラ・ロシエールの方角から巨大な船が接近し、トリステインの国旗を掲げた幾多のフネが落ちてゆくではないか。どうやら宝探しに熱中させすぎて開戦までに帰れなかったようだな。狙った通りに。



俺はアルビオン軍到達前に錬金を使って地下シエルターを築き、ギ―シュとキュルケを使って村の人をその中へ誘導させている。

「みなさん、こつちです！この中へ逃げてください！大丈夫！船が落ちてきたって壊れません！グラモン元帥家の名にかけて保証します！―！」

「ちよつと寒いですけど、我慢してくださいね！ほら坊や、こつちこつち！」

避難は順調だ。グラモンの家は軍部の名門なので勝手に名前を使わせ、さらにキュルケとあわせて『誘導中は必ず丁寧に、敬語を使え』と命じてある。ギ―シュだけ文句を言おうとしていたが『言い争いしてる間に死にたい？』と聞いたら黙ってしまった。もう少し考えようぜ？

「あなたたち、何してんのよ！」

「ルイズ！？どうしてここに！」

突然一際大きな声が響いた。が、勿論無視。

「サイト！奴らが来る！ゼロ戦で竜騎兵と戦艦押さえる！」

「押さえるツたつてガソリンが無けりや飛べねえぞ！」

「ちよつと待ちなさいよサイト！」

「お前がシエスタに告白されてるヒマに作って入れといた！バッテリー完全充電、弾薬も満タン、おまけにナパーム乗つけてあるからさつさで行け！シエスタを、ルイズを、皆を護るんだろつが！」

「お、応！―！」

「待ちなさいよこの犬ー！」

護る、と聞いて表情を変えたサイトをレビテーションでゼロ戦のコクピットに放り込み、風魔法のサポートで短距離離陸させる。ちなみにナパームは場違いな工芸品として手に入れたオイルライターの燃料を錬金でコピー・加工して作ったものである。錬金って本当に便利。前世知識と組み合わせるとチートすぎる。完全に無視されたルイズがぎゃーぎゃーうるさい。

「おー、飛んだ飛んだ」

「何考えてるのよあんた！サイトは私の使い魔よ！」

「どの口がそんな事を言う？強制終身契約の使い魔をクビとか、聞いたことが無い。おかげでサイトはツテもない世界で一文無しなのに衣食住の保障を奪われ、あるかどうかさえはっきりしない財宝を探しに行かなければならなくなった。そしたら運悪くアルビオンが攻めてきたから、自分の命と友達を護る為に戦っている。律儀な男だよな。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。教える。そう言うお前は一体何様だ？俺の目には、人を人と思わない化け物にしか見えんぞ」

「なっ、ななな、わわ私はラ・ヴァリエール公爵家の」

「三女だろ？知ってるよ。だからどうした」

「んなっ！？」

「『スリープクラウド』」

喚くルイズを一瞥もせず弾劾し、魔法で昏睡させる。一部始終終わるまで寝てる。空では丁度サイトがワルドを撃ち落としたところだった。

タバサ、バーナード、レミイの三名はサイトが撃墜した竜騎兵の拿捕に走っている。この3人を選んだのは、説明済みなので陸上部隊撃退用のMSゴーレム（ザクたくさん）を見せても問題ないからだ。なお、シルフィードは危ないので避難させてある。

大きな音を聞いて空を見れば、サイトがナパームを投下してレコン・キスタの軍艦を落としていた。俺はベルトに下げた小型の箱を手に取り、スイッチを入れる。

「あー、ですす。サイト。サイト。此方サンガ『なんだ？通信！？』いいからそのまま聞け。現在そのゼロ戦には俺特製のスペシャルな魔法装置が装備されている。その名も遠隔錬金中継端末だ。コイツは俺本体から半径100メートル以内であれば俺の傍にある物質から錬金したものを装置の傍で再構成できるといって実にグレイテストな機能を持つている。つまり何が言いたいのかというと、燃料や弾薬の補給ができるから適当なタイミングで俺の近くを飛べということだ。分かったら返事しろ」

『あんたの発想、絶対俺側だろう！？』

「わかったかー？左から火竜来てるぞー？」

『うあつと！？サンキュ、了解した！戦闘を続ける！』

「よし。こっちはタルブの人たちの避難が後10人くらいで完了する。戦艦の撃沈にはさっきのようにナパームを落とすか、機関砲弾で風石の貯蔵庫や魔法動力炉を狙え。飛行船舶の規格構造は左側のスイッチ一つでキャノピー内側に表示できる」

『これだな。よし、任せろ！』

「グッドラック！補給したら俺は援護射撃の準備に入る。なお、敵の接近に反応して警戒を発するゴーレムが居るから、デルフ共々参考にしてやってくれ」

『おお、忘れられてねえ！俺、忘れられてねえぞ！？』

少しすると指示通りサイトが俺の上を飛ぶので離陸したときと同じ状態まで補給してやる。一気に重くなったせいで一瞬バランスを崩したようだが、流石はガンダールヴ、すぐに持ち直したぜ。

サイトが問題なく戦闘を続行している事を確認したら、俺はタルブ

南の森へ。

「群れを離れた海鳥よ、異界の空で何思う……サイト、三秒後に急降下しろ。『錬金・対空砲』一斉射用意！発射！！」

「サイト、サイト、此方サンガ。敵の全滅を確認した。一度降りて来い」

『了解……サンガ！ありや何だ！？空が歪んでやがる！』

通信機の向こうでサイトが騒ぐ。見れば彼の言うとおり、雲を掻き分け、透明で巨大な何かがタルブの空へ出現していた。アレは……

「サイト、予定変更！アレは味方だ。東側に回りこんで、誘導にしたがって『着艦』してくれ！」

『着艦つて、あれフネなのか！？まさかステルス迷彩！？』

「科学じゃなくて魔法だけだな。俺のフネ、超巨大飛行船『ラタトスク』だ。今回敵に回した一番大きな船はアルビオン最大の『ロイヤル・ソヴリン』級というのだが、コイツは船舶部分だけでもその倍はあるぞ。空飛ぶQE二世号・もっと巨大な風船つきつてどこか』だからなんで知ってるんだよ』

ギーシュたちと捕虜、そして希望するタルブの住民を収容した『ラタトスク』艦内、大ホール。武装した部下に取り囲まれた捕虜が床に座らされ、その前方、一段高くなった場所に俺が立っている。バーナード以外の同行者＋ルイズは食堂へ案内して部下に劳わせているため、ここには居ない。

捕虜の中から、一人の男が足を摺って出てきた。

「私はトリステイン侵攻部隊旗艦『レキシントン』号艦長、ヘンリー・ポーウッドだ。貴公は一体何者か？」

「トリステイン魔法学院の生徒だ。このフネはクルデンホルフ大公国、ミーミル行政府所属、『ラタトスク』号。艦長はこの俺、名をサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ」

「く、クルデンホルフ？」

「たまたまタルブの村に出かけているときに諸君が攻撃を仕掛けてきたのでな。自衛の為、呼び出させていただいた。あと一日侵攻が遅ければこうはならなかっただろう」

本当は、戦力に出来る捕虜が欲しいから、であるが。もし本当に侵攻が遅れた場合は、原作同様にエクスプロージョンが使われることだったろう。

「さて、捕虜諸君。実は本艦もトリステイン領空へ不法に侵入している。故に、本艦がトリステイン領空に存在した証拠たる諸君を開放する意思はない」

捕虜たちに衝撃が走る。

「殿下。私の身柄と引き換えに、部下の待遇を保証していただけないだろうか」

「誤解があるな、ポーウッド艦長。語弊があつたなら訂正しよう。俺は最強と謳われたアルビオン空軍である諸君の経験、実績を高く買っている。俺に忠誠を誓うのであれば、誰であれクルデンホルフ国内で人並みの衣食住を保証する準備がある。望むなら、家族の亡命も支援しよう。ただし、裏切り、スパイ行為への報復は並大抵ではないと忠告しておく」

「考える時間をくれないか」

「駄目だ。今答えてもらう。誇りある死を選ぶ者に払う敬意は、持

ち合わせているつもりだ……返答や、いかに！」

二秒躊躇って、ボーウッドが臣下の礼をとった。それを皮切りに、捕虜たちが一斉に姿勢を正す。まあ、これも大体はわかっていた事だ。レコン・キスタの戦術に乗ったせいだ、自分たちは既に誇りなき卑怯者。そこへ生活保障するうえで家族を呼ぶことまで手伝うといわれたら、よほど馬鹿じゃない限りは靡くだろう。命を懸けてまで俺を疑う余裕があるとは思えないし、まして彼らは政治家でなく軍人だ。本来護るべき国を自ら滅ぼしてしまった今、彼らの現実は闇の中なのだから。

こうして原作から大きく離れたタルブの降下戦は終了した。

俺たちの戦果はアルビオン貴族派軍艦撃沈16隻、同じく竜騎兵撃墜24、歩兵、竜騎兵、戦艦乗組員ら捕虜合計146名。ワルドには逃げられた。あれが変態補正か。

当方損害、タルブ村の家2棟、畑50マイル四方。避難中に転んで擦り傷を負ったのが二名。タルブ領主アストン伯、借金手形的大幅減額と引き換えに沈黙。

……サイトが落とした戦艦の落下位置に何かいた気がすると言っていたが、全力で気にするなといっておいた。今、眼下に混乱しているトリステインの王軍が見えるが、知らないッたら知らないぜ。

手間無しで勝ちをくれてやったんだから、特殊部隊とか伝説の神風とか、せいぜいうまくいってしまわして誤魔化せよ、枢機卿。

使い魔召喚の儀式が行われた草原にサイトたちを下ろす。ゼロ戦も、トリステインのそれに偽装させた竜使いの部隊に運び出させた。こ

のまま魔法学院まで行ってもらう。失われていた始動用クランクも、錬金してサイトに渡しておいた。生憎純正品の形は分らないが、役目が果たせれば何でもいいだろ。

「改めて見ると本当にすごいな。完全に向こうが透けて見えるみたいだ」

「ええ、聞いたことも無い技術だわ。ところでミスタ。あなたはその後どうするの?」

「俺はバーニイを連れてこのまま母国<sup>く</sup>まで乗っていく。長期外出許可貰ってるしな」

「なんだって!?!ずるいじゃないか!僕たちはサボった事になってるんだぞ!?!」

「自業自得」

ギーシュとキュルケにブーイングを貰うが、知ったこっちゃ無い。それよりも、船から下りてくれないタバサが気になる。

「タバサ、なぜ降りない」

「私も行く。許可はある」

タバサの手にあるのは、オールド・オスマンのサインが入った外出許可証……マジですか。

そして巨大飛行船『ラトスク』号は久方ぶりに戻ってきた本来の長と一人の賓客を乗せて、クルデンホルフとへ飛び立った。

## 第八話／蘇る翼と歪む動乱（後書き）

主人公のチート錬金でゼロ戦その場で完全復活！

「あーあ、とうとうシナリオ曲げちまいやんの」

まあ、あんまり原作破壊して無いだろうって御意見が……

「ヘタレ。そんなに読者のご機嫌とりしたいのか」

違う。そうじゃない。作者は自分の文才がないことを認め、それを育てる為にご意見を募っている。しからは、ご意見を吟味し、取り入れる事でこの作品がより良くなるはずだと信じているだけだ。

「まだ言い訳臭いが、まあいいだろう。で、どうすんの」

うむ……どうしよう。とりあえず次回は舞台をクルデンホルフに移します。今度こそベアトリス再登場！うん、絶対登場。実は半分くらい執筆できてるので、週末には上がるはず。

「……お待たせして申し訳ありません読者様。今からこのポケを折檻するので許してください」

え？ちょっと、主人公？まで、その緑色の円筒しかないガトリングは作品が違う！

「ぐぐるぐるにやあああああ……！」

おせー……！！！！！！！！！！



「ふう。ほっとけば作者は復活します。ではまた次回。ご意見、ご感想、誤字や脱字、文法・考察のミスなど、お待ちしております。内容によってはまた予定が変更される恐れがありますが、少なくとも次回、ベアトリスの登場は確定です」

第九話／俺の領地と勝てない戦い（前書き）

今度こそ予定通りクルデンホルフ編です。

## 第九話 / 俺の領地と勝てない戦い

ミール独立行政区。俺が大公から預かった地域の総称だ。フギン・ムニンという二つの町とタルブと同等の村が三つ、そして中央に『ラトスク』が駐留するニーズヘッグの町。以上の六つの集落で構成されている。いや、『ラトスク』はそれ一隻で都市一つに匹敵する機能を持っているので、これも数えて七つと言っても良いだろう。

ちなみに土地面積は未開発地区や畑も含めてクルデンホルフ大公国の25%ほどである。

八年前に預かったときは村一つと森林しかなかったが、今じゃハルケギニア1進んでいる地域だと自負している。まあ、前世知識から使えそうなものを整備していただけだが。税率の低さやハルケギニアにとっては高度な衛生管理が噂を呼び、人口が予定をはるかに上回るスピードで増えてしまったのだ。

この頃は有能な官僚も職人も殆ど居なかったので俺が直々に町を建築整備する事になってしまい、三つの町の名前も俺がつけたものを大公に事後承諾してもらった形になっている。その時には「もとより白紙委任なのだからお主の土地と違って好きにするがよい。忙しければ報告も手紙で良いが、月に一度くらいは顔を出せ」と言ってくれた。ありがとう大公<sup>じいさま</sup>。出展は北欧神話だが、名前だけで特に関係はない。

地区全体を一つの都市に見立ててそれぞれの町を特化させ、相互の関税も撤廃してある。フギンは技術を、ムニンは商業を。ニーズヘッグの行政と『ラトスク』が地区全体を統率、管理するという、国家内国家と呼べるほど独立性の高い地区に育ってしまった。とは

いっても、この世界で言う『領地』はどこでもそんな感じなんだが。三つの農村はそれぞれの街の傍にあり、日々食糧事情の改善に努めている。

ブリミル教の聖職者は地区への立ち入りが禁じられており、教会の建造も許可されない。ブリミル教は現在のハルケギニアを覆い尽くすメイジ至上主義の元凶である上に内部は完全に腐敗しており、平民の人気などないのだ。ブリミルの救いを信じている平民なんて、千人に一人居れば奇跡と聞いていいだろう。ロマリアにでも行けば信じていると答えるものが大半だろうが、実情は腐った神官のおこぼれに与る乞食の群れみたいなものだからな。

この方針によってロマリア教皇庁にはかなり目を付けられているはずだが、この地域には剣も銃も魔法も通用しない『鋼の鬼神』『守護者』などと呼ばれる怪物がどこからともなく現れて諜報員や盗賊を殲滅するので、工作どころか詳しい情報の獲得さえ出来ない現状にある。

無論これらは『機兵の系譜』で作った領内警備用自律MS軍団の事だ。このミーミル独立行政区の自律MSは魔法一つのゴーレムではなく、ガーゴイルで作られている。作るのには手間がかかるが、魔力供給が常時ではなく補給式、量さえあれば誰のものでも扱えるので、継続的に扱いやすいのだ。

飛ぶものは竜さえ撃ち落とし、走るものはグリフォンでも切り裂き、地底に行くものは地面諸共抹殺するその徹底振りは裏社会でたいそう恐れられているらしい。

風竜に乗った若い神官がコントロールを奪いに来た事もあったが、コントロールどころか確定情報を何一つ得ぬままズタボロで逃げ帰っていった。シェフィールドと並んで最優先排除目標だったのに。しぶとい奴だ。

いいかげんゴーレム系魔法の使いすぎで精神力が不足するかもと思

つていたのだが、先日マジックアイテムを仕入れてレミイに計測させてみたところ、今の俺の精神力は昔からの魔力変換効率に加え、虚無とスクウェアの中間くらいの最大値と通常の三倍の回復力を兼ね備えているらしい。普段からゴーレム使いが荒い事が最大値を育てた大きな要因だろう。まあ人間大MSに使う素体ゴーレムはドットメイジでも複数生産できる（俺なら同じ精神力で30体は作れる）フルキユーレ級だし、この分なら実寸サイコ級の奴を百機単位で引き連れるか、メドロア・フルパワーを連発しようとしてもしなければ、精神力切れの心配はなさそうだ。回復力はレミイのアドリブだろう。おそらく。多分、きつと。

『ラタトスク』が碇を下ろす。その巨体を地面に下ろすと色々大変な事になるので、ニーズヘッグ上空およそ100メートルのところに停泊するのが常だ。船体の劣化？土八乗の固定化がかけてあるから心配無用！整備・点検用の高精度A1ガーゴイル部隊も居るし。人の乗降り、荷物の積み降ろし。これも『ラタトスク』に搭載されているガーゴイルリフト。フライが使えるメイジならセルフサービスタ。文句は言わせない。言うような奴は乗せない。

「艦長！ニーズヘッグ虚像発生装置との誤差修正・および全停泊工程完了！点検整備ガーゴイルを起動します！」

「確認した。投降した元アルビオン空軍の諸君を練兵場へ。終わったら通常任務に戻れ」

「アイ・サー」

『ラタトスク』副長アランが敬礼と共に報告し、俺も答礼と指示を出す。後はまかせつきり。

それで済むように教育しだしたのは俺だから、細かい事は気にしな

い。俺は前世の記憶という大まかなイメージを持っているだけ。そこから研究させて専門家を用意できたなら、後はそいつらに任せれば良い。そのほうが确实、安全、低コストだ。ちなみにさっきアランが言った虚像発生装置とは、こんなでかいフネが留守してるとステルス使ってもすぐばれる為、町の上空に『ラタトスク』のホログラムを発生させる装置の事だ。制空権を奪われない限り敵に間近で見られることは無い為、虚無のイリユージョンほどの精度は必要ない。適当な風魔法のマジックアイテムで充分だ。そして俺は窓から町を見下ろす青髪の少女に話しかける。

「ようこそ、クルデンホルフ大公国は、俺の世界ミームへ。俺の名において歓迎しよう」

「ありがとう。でもあれは？」

窓からタバサがあるものを指差す。それはこのハルケギニアには無いはずの、大地を走る黒い箱。

煙を吹いて汽笛を鳴らし、馬など遠く及ばぬ力で多くのものを運ぶもの。

そう、ミーム特別行政区の町々は鉄道によって結ばれていた。目を少し遠くへやれば、大公の居る都までまっすぐに伸びる線路も見える。まだ建造中だが、今月中には試運転できる予定だ。

ちなみに見かけこそレトロだが、機関車はオートメ化されていて無人走行する。排煙や石炭ガラなどの各種問題も風石を用いた魔法装置で解消してある。魔科学万歳。

「あれは自動車だ。水を沸かせて動力を生み、高速で移動する。後でフギンとムニンを案内するときに乗せてあげよう。さ、行くぞ。まずは執務室に行かないとな」

バーナードを担いでタバサの手をとり、ハッチから飛び。フライで

直接行政府の門へ向かうと、門番が俺を見つけて手を振っていた。

「お帰りなさいませ殿下あー!!」

「うん、今戻った!」

二人を連れてその門番の前に下りる。

「トリスティンで拾った使用人と、俺の友人だ。とりあえず執務室に居る」

「ハッ! 通達はお任せください! ……とうとう御側室ですか?」

「馬鹿言つてねえで仕事しろ!」

「失礼いたしましたあ!」

怒鳴られたつてのにニヤニヤして引つ込むんじゃねえよ。手え付けてないつての。

「……違うの?」

「はい?」

行政府の三階にある俺の執務室では緑の長髪を下ろしたパンツスーツの美女が待つていた。俺の秘書として雇ったマチルダ・オブ・サウスゴータである。

貴族令嬢として高い教育を受けていて、さらに事務の経験もあり、と非常に有能なので助かっている。美人さんだし。ベアトリスが居なけりや抱きしめてるくらい感謝している。

「ッ、フーケ!」

「人違いだよ。お帰り、殿下。はい書類」

「確かに受け取った」

一瞬で最大限警戒したタバサを軽く流して、マチルダが二色の書類箱を渡してくれる。これもココの特徴なのだが、俺のところまで回ってくる書類が他に比べて極端に少ない。俺が長期間留守にするのが前提になっており、事業の大幅な拡大・縮小や臨時の支出、予算の使用などの、余程の事が無ければ各部署の責任者と監査部長の名において許可される事になっているのだ。だが監査は非常に厳しく、さらに俺特製のガーゴイルが監査部を監査しているので、汚職は速やかに『排除』される。だが今のところ、それが実行された報告は聞かない。まあ大公国では金絡みの罪は非常に重く裁かれるし、不正しなけりやならないほど不自由させてるつもりは無いから、これが普通なハズのだけねど。

他所の話だが、何で高給取りがわざわざ汚職しなきゃならないんだらうな？ 賄賂の確保か？

「わたしはここで殿下の秘書を務めている、マチルダさ。初めまして」

「……タバサ」

「バーナードです……」

「マチルダ。二人を客間へ案内してあげてくれ。俺は書類を確認してから行く」

「分かった。ではお二人とも、此方へ」

マチルダの名乗りと挨拶にタバサはむすっと、バーナードは呆けたように名乗る。まあ、無理も無い。

二人が執務室から連れ去られるのを確認してから、俺は書類箱を開けた。さあ、お仕事の時間だ。

書類の整理が終わると同時にマチルダが執務室にやってきた。さ



つきの書類箱を受け取ると、それと引き換えるように一通の手紙を渡してくる。まだ切られていない封蝋に押されている紋章は、噛み合う二枚の歯車とトネリコの枝。ニーズヘッグから北東、フギンの町にある、魔科学研究所からだった。トリステインの王立研究所なんて目じゃない、俺の前世式モノの見方でハルケギニアの魔法を研究している専門施設だ。研究員は各地で異端として追われていた科学者や神学者。前世技術を俺と二十分語っただけでそれを再現してみせる、遠く未来に生きている連中である。

こういうのを迫害するから六千年も文明が進展しないんだろうな。おのれブリミル教。ありがたく利用させていただきます。

それはともかく。

手紙の内容は、半年前に俺から引き継がせた実験の結果が出た、とのことだった。

そう、オルレアン公夫人を侵した『先住の毒』の研究が、最終段階『治療薬の実地試験』に入ったと。被験者はガリアに数人居た患者をこっそり誘拐してある。どうやらジヨゼフはタバサたちに使う前に何度か実験をしていたらしい……

だがこれは、ちょっと、こまった、かな？執務机に頼杖をついてぼうつと前を見やると、マチルダが覗き込んできた。

「随分複雑そうな顔をしてるけど、それはいい知らせかい？悪い知らせかい？」

「どつちだろうな。いずれにしても、予定を大幅に繰り上げる事になったのは事実だ。レコン・キスタとの戦争にも、サイトの影に隠れていたとはいえ関わっちまったし」

正直に言って、先住魔法の薬が俺たちに出来るかは半々以下だと思っ  
ていた。

もし薬が完成しなければ、俺はタバサを見捨てない限り、ビダーシ  
ヤルが夫人を治すまでガリアに手出し出来ないハズだった。

だが薬は完成した。してしまった。俺自ら動いて夫人を奪取し、治  
療してしまう事が出来る。出来てしまう以上、そうしたいの言う  
までもない。問題はその時期と隠密性だ。心を壊している事でジ  
ョゼフの警戒はそれほど高くないかもしれないが、もし今の段階で誘  
拐が俺の仕業だと発覚して武力衝突となれば、クルデンホルフはハ  
ルケギニア中を敵に回す事になり俺は『機兵の系譜』を完全に解放  
して戦わなければならない。勝利は確実だが、それはサイトをこの  
手で殺す事になるだろう。何を今更と思うかもしれないが、赤の他  
人は殺せても友達には殺せない。そういうもんだ。

堂々巡りになりそんな思考の沼から何とか抜け出そうと視線を上げ  
ると、いつの間にか横に来て俺を見つめていたマチルダと目が合っ  
た。数秒後、俺の視界が塞がれ、顔が何か柔らかいものに押し付け  
られる。

「何悩んでるのか知らないけど、随分な顔じゃないか。わたしの力  
なら、いつでも貸すよ？」

「……土くれのフーケの力が借りたい、と言ってもか？」

「ああ、言ってみな。あんたの命令なら何だって従ってやるよ。あ  
んたはわたしらの恩人だしね」

若干息苦しい状態のまま、俺はマチルダに事情と齎してほしい結果  
を話す。オルレアン領に幽閉されている夫人とその使用人たちを誰  
にも知られないようにフギンの研究施設まで誘拐してきてほしい、  
と。

マチルダが俺の頭を抱きかかえる力を増し、頭が痛みを訴え出した。

「それでいいんだよ、殿下。あんたがいくら強くたって、できない事はあるんだ。だからわたしたちが助けてやる。あんたがその大きな力でわたしらを護ってくれる分くらいはね」

「……馬鹿だな、俺は。正面きつて戦う力しか持ってない事は、ずっと前から知ってたはずなのに」

「男は皆馬鹿なんだ。それを助けるのがわたしら女の「旦那様！」って、ああー！ー！」しご、っと！？」

説き伏せられて泣きたくなつたところへ、別の声が割って入った。驚いたマチルダが俺の頭を離れたため、その声の主の姿も見えた。飾りの少ない橙の簡素なドレスを着て、碧眼を吊り上げた、金髪ポニーテールの美少女。誰だかなんて言うまでも無いが、俺の妻、ベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフである。

そのベアトリスは猛ダツシユで執務室の扉から俺とマチルダの間に滑り込み、さつきまでマチルダがしていたように俺の頭を抱え込んだ。柔らかいんだが、痛い。強く抱えすぎだ。

「マチルダ！この人は、わたしの旦那様です！」

「わたしにとつちや恩人で上司だよ。その悩みの解決に力を貸すのも、わたしの仕事さ」

「貴女のような年増に何を相談するといふのです！」

「わたしはまだ23だよこの小娘っ！」

「充分行き遅れじゃないですか！」

「んなっ！？」

まーた始まった。マチルダに執務を助けてもらつてるときにベアトリスが来ると、いつもこうなる。いつか自分に跳ね返るんだから歳の事を引き合いに出して罵るのはやめるといつているのに。後でまたお仕置きせねば。……お仕置きが欲しくてわざとやってるんじゃないかな？

「大体貴女はいつもいつも勤務中に接近しすぎです！そんなに旦那様が欲しいんですか！」

「当たり前だ！こんないい男独り占めになんてさせないよ！テファにも一緒に迎えてもらおうって約束してるんだからね！！」

「なっ！だ、駄目です！駄目です駄目です駄目です！絶対に認めません！この人は『わたしの』旦那様です！！」

はて？話がおかしくなったな。そんな話は聞いてないぞマチルダ。

「認めるのはあんたじゃなくて殿下だよ！だから殿下がいいっていえばあんたは関係ないのさ！」

「そんな！駄目ですよね、わたし一人ですよ旦那さ、ま……？」

ベアトリスの声と共に二人の勢いもフェードアウトして、三つの視線が俺の膝に集合する。座ったまま頭を抱きかかえられていた俺の太腿には、今、カーペットに膝を突いてしなだれかかるように乗せられている青い髪の毛の頭があった。

この状況は……うん、あれだ。ピンチだね？しかも逃走不可。何でココで状況が悪化するのかなあ？

「誰です、そのちんちくりんは？」

「側室」

「ではなく、魔法学院の同級生」

「……違うの？」

「そうなんですか？」

膝の上の頭が回転してこれまた青い目が此方を向く。何の疑いも迷いもなく見上げてくる二つの目には『魅了』の魔法をかけられてや

しないかと思うほどだが、ベアトリスの手前うるたえる訳にはいかない！

「少なくとも側室ではないな」

「なら、恋人？」

「いや、違うと思うぞ？」

「……違うの？」

「そうなんですか」

純朴な目で見つめられたまま、同じ質問に戻る。いかん、無限ループに陥ってる。出口、出口はどこだ！ベアトリスの反応から疑問符が消えてた気もする！

「……一人増えるなら、三人増えても一緒だね？」

ちよーマチルダ！？この状況でそれを言うのか！

「旦那様！いつ、一週間はベッドから出しませんから、そのおつもりで！」

顔を真っ赤にして全力でしがみつくベアトリスの宣告を聞きながら、俺は遠くトリスティンの友人へ思いを馳せていた。

サイト、すまん。対アンリエッタのフォーローはしてやれそうに無い……と。

ああそうさ、現実逃避だよ！悪いか！……悪いよなあ。

第九話／俺の領地と勝てない戦い（後書き）

シゴロ。

「……返す言葉もねえよ。何でマチルダまでフラグ立ってんの？」

さあ？

「おい。お前が書いてるんだろっが」

そうなんだよなあ。だけど頭で考えるより先に指がキーを叩いてるんだよ。出来上がった文章見ると、どうしてこうなった？ってのが良くある。

「駄作者！」

充分承知の上じゃ！さて次回。どうしようかな。

「じらー！」

あ、すまん。今回は『クルデンホルフ』編をもう一話か『アルビオン本格参戦』編のどちらかにしようと思ってます。

「ご意見、ご感想、誤字脱字文法考察ミスなどなど、じゃんじゃんお寄せください！それではまた次回！」

第十話ノ二人の戦いと頼れる部下たち（前書き）

ちよつとアレな表現があります。ご注意ください。

## 第十話／二人の戦いと頼れる部下たち

Outside

サンガ・グレイが出かけたままの魔法学院で、サイトは悩んでいた。何につて、ピンクのご主人様の事である。戦時下の忙しい時に何を、と怒られるだろうが、思春期であり『それらしい娯楽』からも遠ざけられている彼にとっては重大事であった。

正直言ってしまうえば、ルイズのワガママには付き合ってもらえない。そりゃまあ黙つてれば、本当に黙っておとなしくしていれば！  
！誰よりも可愛いとサイトは思う。実際舞踏会とかだと結構声はかけられているようだ。

だけど、さんざつぱら気を持たせておいて誘つておいて引つかかりそうになると掌反したように鞭でぶつのだ。犬、犬と喚きながら。この間タルブでゼロ戦に乗ってから、犬率が高くなった気がする。その後は大体外で眠らされる。痛いのも寒いのも御免ごつむると思つていた。

そんなルイズはこの間女王様になった女王様に……ん？今、女王様の、前、姫様に、『虚無』だからもつと力になってくれって直属の女官に任じられていた。

本当に役に立つのか、サイトには分からない。

そうして悩んだとき、サイトはシエスタのことを考える。自分と同じく瞳と髪が黒くて平民で、むむ、胸の大きいメイドの少女。家事全般そつなくこなして面倒見もいい。何より、自分への好意がまっすぐで積極的だ。ちよつと行き過ぎる所もあるが。

「どつしよつ、か」



サイトは呟いて左手首をみる。四角い宝石が付いた皮ひもが、腕時計のように巻きつけられていた。

自称サイトの味方。サイトも友達だと思っている正体不明の貴族、サンガからの贈り物である。遠く離れていても会話できるトランシーバーのようなものだと思えといわれていた。……どうして地球にしかない物体の名前を知っているのだろうか。

使い方は簡単。宝石部分に自分の肌を当てて心の中で語りかければいい。

『サンガ……サンガ。此方サイト』

『サイト？何かあったのか』

携帯電話並みにすぐ返事が戻ってきたので、サイトは今日までの不満を胸に溜めて、ため息を一つついた。

『いや。姫様が女王様になって、ルイズがその直属女官になっちゃまって。もううるさいのなんのって』

『そりゃ災難だな。どう考えたって力不足ってもんだ。早いとこ見限って離れたらどうだ？というよりは、そもそもなぜクビ撤回に応じた？』

『使い魔のルーンがあるだろ。それに、俺が居なくなったらルイズが独りじゃないか』

『このお人よし。小心者。典型的日本人。惚れてるって素直に言えばなけりやメイドをとれ』

『るせえよ！ほつとけ！！』

その後も次々とルイズの愚痴を零すサイト。サンガはおとなしく聞いていた、というよりは半分惚気のようなもので聞き流していたのだが。

『……ところでサンガ。この道具って副作用あんの？』

『ん？今のところ発見されてないが。どうした？』

『いや、なんか。ムラムラするつつつか』

『性欲を持って余す、か？……まずったな』

『へ？』

『どうやら通信相手の強い精神状態が干渉するようだ。改良してお

く』

『通信相手のって……お前今何を』

気まずそうに言いよどむサンガに問いかけを重ねようとしたら「ヴ  
アスラ」という声が背後から聞こえた。瞬間、サイトの体に高圧電  
流が流れる。ルイズによって付けられた猛獣調教用の拘束具の効果  
だと、サイトはすぐに気付いた。

「うぎゃあっ！」

「いい加減返事しなさい、馬鹿犬！陛下がかどわかされたのよ！」

「な、なんだって!？」

『サンガ！女王様がさらわれた！』

『……サイト。生憎俺は家から動けない。アンリエッタ絡みとなれ  
ば、外国人である俺はなおさら関わるわけにはいかない。死なない  
程度にがんばって、駄目なら逃げる。ルイズの預かり物とデルフ、  
忘れないようにな』

『お、おう！……で、さっきの話だけど』

『行動が優先だろうが！通信終わり！』

ルイズがもう一度怒り出す前にサンガに怒鳴られ、サイトはデルフ  
を掴んで走り出した。

アンリエッタの誘拐だと？惚れ薬騒動からラグドリアン湖の素材取りはどうなったんだ？……タバサがここに居るから当初の目的だけで終わったのだろうか。だとすれば、アンドバリの指輪を回収し損ねたのは失敗だったかもしれない。次のチャンスは、シテイオブサウスゴータの毒水。シェフィールドから強奪する事になるな。

そう考えながら、俺は一週間振りに降りたベッドを振り返る。俺の私室の半分を占有する、前世で言えば六畳間くらいありそうな巨大なベッドの上には、五人の女が倒れ付していた。金髪の姫、青髪の少女、緑髪の女性、金髪のハーフェルフ。そして、黒髪の大和撫子。

「……勝った。俺は勝利した。ありがとう神様、今日はじめてお前がくれた力に感謝する」

カーペットの上に転がる香炉を拾い上げて、思わず独り言ちる。

あの大宣言の晩から、俺は本当にベッドの上に拘束されていた。といても縄や枷を用いたものではなく、ベアトリスが『体を張って』拘束した。タバサはその日から、マチルダは俺が所有する内でも最速のステルス船でテファと子供たちを迎えに行き、二人して翌日から。黒髪の女性は、一昨日から参戦していた。

この一週間は食事さえベッドの上。しかも恐ろしい事にトイレに行かせてもらえないので、体内の老廃物は錬金と水魔法を組み合わせる消費が無毒化しなければならなかった。ベアトリス他女性陣も、だ。シーツの汚れ？錬金で新品に作り変えてたよ。本当に便利な魔法だ。魔法単位での応用力が半端ない。

俺の魔法発動媒体が指輪で無ければ。水魔法で『男の夢の魔法』を創造して体調を整え続けなければ、この『楽園』で生き残れなかつたと断言できる。魔法は『相手の状態』を調整するのにも使用して

いるので、神の力で多重行使の負担が軽くなっていなければ、俺が枯れるか相手を孕ませてしまうかのどちらかになっていたのは確実であろう。妨害するような水魔法の使い手は居なかったなので、この手間がいらぬのは黒髪の女性だけだ。なぜなら……

「主様……？」

視線をベッドに戻すと、一人だけ目を覚ました黒髪の女性がこちらを見ていた。香炉を棚に戻し、ベッドに戻って腰掛ける。

「起きたか、レミィ。起きたならベッドから降りて変化を解け。一週間溜め込んだ仕事を再開する」

「未だ腰が砕けて動けません。二千年を生きてきましたが、あれほど激しく、長くしていただいたのは、その、初めてのことでしたので」

「……一応、褒め言葉として受け取っておこう」

そう、この『黒髪の女性』は俺の使い魔、九尾のレミィであるからだ。さんざつぱらやっていると現れて「これほどの雄の気を前にして黙っているというのですか！」と叫んで変化、この姿になつて俺に襲い掛かってきた、裏切り者だ。

「しかし、よろしかったのでしょうか」

「この数か？」

「いえ、立場も、です。正妻であるベアトリス様はともかく、ガリアの姫、アルビオンの姫とその臣下、そしてわたしは使い魔。それも妖あやかし狐です」

「いや、そこは大した問題じゃない。テファとマチルダは肩書きが活きてないからな。タバサ、いや、シャルロットも残党に嗅ぎ付けられない限りは何もない。それに、俺は敵と判断した相手に手心を

加えるほど、人間が出来ていない。俺の感覚には前世もハルケギニアも、実感なのだからな」

「では、それを別にしても一晩で新婚の男の妻が五人です。このペーすで増やされるかと思うと、雌としてはかなり不安なのですが」

「一つ言わせる。意図的に増やしたわけではない。特に五人目」

「あ、う。そんな、御無体な。あれほど『強い雄』の気配を浴びせられたら、雌の本能が疼いて疼いて耐え切れません」

「何が言いたいのかは、分らんでもないから、特に責める気はない。今後もお前は俺の使い魔。そうだな？」

「ッ！はい、主様！我が魂魄朽ち果てるまでお供いたします！」

レミイの宣誓に顔が火照ってしまいが、ふと気付いて寒気がした。こいつ、九尾の狐だぞ？

「俺、お前より長生きすんの？お前ほとんど不死だろ」

「おそらく。主様の持つ魂の強さから考えますと、主様の寿命は星の命ほどかと」

「なん……だと……？」

ちよつと待て神。いくら魂の流れの修正だからって、その長さはなんだ？原作とつくに終わっちゃうぞ。何をどうブレイクしろと？

まあ、時が来れば向こうから連絡、来る、かなあ。来るといいなあ。でもなんか不吉な事言ってたし。大丈夫か俺。

少し混乱した一瞬に唇を奪われたが、犯人レミイをゆっくり引き剥がしてベッドに倒す。

「……仕事する。くれぐれもベッドの上で変化を解くなよ？」

五人の妻をベッドに放置して一週間ぶりに執務室に戻った俺は、まずオールド・オスマン宛に手紙をしたためる。内容は、統治に時間を割くため、学院に戻らずに夏休みに入る、という事だ。シャルロット、じゃない、タバサも一緒に居る事も書く。あの爺の事だから要らん勘繰りをするだろうが、邪魔するようならぶちのめすだけだ。手紙に魔法をかけて紙飛行機にして、窓から飛ばす。風魔法で高速かつ正確に飛んでいくので、後は着くまで放っておけばいい。

次に、これまたミームルにしかない特殊設備『電信回線』を使う。執務机から白紙（ハルケギニアに普及する羊皮紙ではなく、植物性の紙）を取り出し、羽ペンとインクボトルを用意。

通信相手はこの行政府のNo. 2、フギンの技術庁と魔科学研究所、ムニンの商業庁のトップ。

通信内容は、久しぶりに長居するので顔を見て話したい。

以上の内容を記したら、角柱型のカプセルに入れて部屋を走るパイプに落とす。このパイプが行政府地下の交換台につながっており、そこからこのミームルの地下に網羅された通信網を伝って連絡されるのだ。

ごく少数だが『電話回線』もあり、俺の執務室と私室には緊急時用の直通回線の受話器がある。  
私用で使うわけにはいかないが。

最初にやってきたのは、短い金髪を綺麗に整えて片眼鏡をかけた、中年の男。俺が留守の行政府を預かる、ジエームスだ。アルビオンの弱小貴族の次男で、従順で忠実、それでいて的確な分析判断、都

合の悪い結果でもはつきり報告できる度量を持ち合わせた男だ。

「お久しぶりです殿下。お会いするのは半年振りですか？」

「そうだな。何か変わった事は？」

「前回からの一番大きな変化点でしたら、計画番号223、外殻鉄道網の整備が完了。同じく224、装甲列車の配備は現状六台。こんなところですか」

「思ったより早いな。装備は充分か？」

「もちろんです。テーオバルトがやってくれましたよ」

「おや、僕の名前を呼んだかい、ジェームス」

「失礼いたしやす、殿下」

「おやおや。こういうのを『噂をすれば影』と申しましたかな？殿下」

生来のものである褐色の肌。赤い髪は伸び放題暴れ放題。よれたシヤツに白衣を被せている20代後半くらいの男は、フギンの魔科学研究所長のテーオバルト。容姿から連想できるとおり、ゲルマニア貴族ツエルプスターの分家、その末席出身だ。もともと、実家には勘当されてロマリアには追いかけてと散々な目にあっていた奴だが。技術者としての発想力は前世にあっても一流といえるほどで、俺が何度か話した前世の兵器の話を参考に、似たような品を幾つか作り出した天才でもある。こいつが居なければ『ラタトスク』の完成があと四年は遠のいただろう。

そのテーオバルトの後ろに居るのはフギンの技術庁長官、ザガン。元はゲルマニアの大きな鍛冶場の親方だった。その地位に相応しい大きな体と大きな心を持ったオヤジだ。スカウトするのに一番苦労した人でもある。どんな素材を持っていても錬金絡みだと疑われたので、半ば拉致に近い事をしてうちの冶金場に連れて行ったのも

今じゃいい思い出だ。

「そんなところだ。久しぶりだな二人とも。今装甲車の話をしてたのさ」

「おお、僕ら二人の技術の結晶をか！いや、アレの話を聞いたときはびっくりしたものだ、実際運用させてみると君の言っていた有用さがよく分かるよ！」

「それで、今日はどんな御用ですか、うちの殿下は？」

「なに、久々に顔が見たくなっただけさ」

「そいつぁいい！がはははは！」

「おやおや、久しぶりに御呼ばれしてみたら『ユグドラシルの枝』が勢揃いじゃないか。折角殿下に抱いてもらえると思ったのにさ」

「既婚者がへんな冗談は寄せ、マリーナ」

赤茶けた長髪を首の後ろで束ねて、グラマラスな肢体をぴったりした服で押さえつけたようなセクシャルな女。元々綺麗な顔に控えめな化粧が上品さを加えており、町を歩けば百人が百人振り返るだろう。ムニンの商業庁長官、マリーナだ。元はクルデンホルフの小さな商會に雇われていた奴隷小間使い。驚異的な記憶力と計算能力を有しており、膨大な量の帳簿や書類を毎日山ほど処理している。プライベートでも頼れる女だ。ちょっと色気が強すぎるのが、欠点といえは欠点か。

俺とこいつらを合わせた五人には、ミーミル行政区の中核をなすという意味で『ユグドラシルの枝』という称号あだながついている。どこかの学のある臣民が言い出したらしい。決して自称ではない。

「つれない男だね、殿下は」

「魚じゃないしな。それにステイツキンは俺の飲み友達だ」

「……旦那を引き合いに出されちゃ、からかえないじゃないか」



「はっはっは。殿下のほうがりナより一枚上手ですな」

「まさしくまさしく。流石はわずか6歳で姫殿下を娶ったお方だ！」  
「がはははは！」

それからしばらく、仕事と世間話を織り交ぜながら久しぶりの部下との会話を楽しんだ俺であった。

四人がそれぞれの場所に戻っていったのは夕方になってしまったのだが、その後俺が私室に戻ってもまだベッドの上には五つの肉体が転がっていた。しかし、寝ている気配はない。

もう一晩、ですか？流石に俺も眠いですよ？……魔法で何とかするんですね、分かります。

## 第十話／二人の戦いと頼れる部下たち（後書き）

さて、クルデンホルフ編、第二話をお送りしました。

「どっちかという閑話のような感じで、本編の流れとミームル行政区のトップたちの紹介といった感じだな」

うむ。だから次回もクルデンホルフ編。支配下の町を視察、兼、観光案内に行きます。五人の女たちは戦うのか、協力するのか！？その次に魔法学院襲撃編の予定。

「珍しく具体的なんだな。期待してらっしゃる読者様も多いようだから、しっかり書けよ」

うむ。努力する。それではまた次回。ご意見ご感想、誤字脱字文法考察ミスご指摘、今後のリクエストなど、お待ちしております。

「魔法、本当に便利だよな。一週間と聞いたときには死ぬかと思っただぜ」

なにせ魔法だからな！

第11話／賑やかな休日と革変のとき（前書き）

難産でした。シナリオは殆ど進まないのに、なぜ……

5 / 15 AM 5 : 35 加筆修正しました。盛り塩様、吹風様、

ご意見ありがとうございました。

## 第11話 / 賑やかな休日と革変のとき

がたん、ごとん。がたん、ごとん。

前世の日本人であれば、これだけの擬音で俺がどんな場所に居るか当てられるだろう。そう、列車だ。ミームルにしかない前世知識と魔法の力の集大成、蒸気機関車に引つ張られる客車の中である。

馬車であれば一番早く、近くても半日はかかる町々の行き来を、この存在は僅か20分前後で運びきる。駅員・車掌は軍属で、諍いや不審者の排除など、駅構内や車内の秩序を保っている。身分差別はなく、公営で運賃は無料。ただし、貨車の利用は有料である。ペット他の客車乗り込みは不可。

そんな客車の一箇所、三人用のソファが向かい合うあたりに俺は居る。五人の女とバーナードが一緒だ。

向かいのソファでテファがベアトリス&マチルダにいじられている。主に胸の事と、昨夜の事で。

しかし胸バストレブオリューション困革命とはよく言ったものだ。二人に鷲掴みされた双丘は圧力と車両の揺れとで別箇の生き物であるかのようにうごめいている。近くを通る全ての人間が目を見開いているのも、隣でバーナードが顔を覆いながら覗き見しているのも無理ないことだ。俺の前でナシパに踏み切る根性のある奴は、流石に居なかった。車掌も目を丸くしていたが、俺を見て害無しと判断したらしい。

「この、この！この胸が！」

「や、やめて。みんな見てるう」

「あたしが連れてくるまでロクに口も利けなかつたくせに、夕べは随分積極的だったじゃないか！この胸が！」

「いやああん、む、胸は関係ない……」

「「なくない」」

おかしいな。最初は列車の振動がこれまで乗ったどんな馬車より小さいという話だったと思っただが。どうしてこうなった？……それこそあの胸囲のせいか。しかし、ベアトリスもマチルダも別段小さくはないはずなんだが、なぜあも八つ当たりするんだか。

「しかし……あまりにも不毛だ」

「でも、すごいです」

「大丈夫。希少価値ステータス」

彼女らの向かい側に座っている俺、バーナード、タバサがそれぞれにコメントする。タバサ、それちよつと違う。

後ろを向けば人化したシルフィードが同じく人化しているレミイになにやら抗議していたが、あっさり流されたらしく涙目でタバサの上に顔を出す。

「酷いのね。酷いのね。この雌狐ったらおいしいお肉があるって嘘ついて遠い東のお山にシルフィを行かせて自分はスゴい雄と交ヴィっ!?!」

良い音がした。瞬間的に顔を赤くしたタバサがトレードマークでもある大きな杖でシルフィードの頭を殴ったのだ。叩くではなく、殴る。舌を噛んだらしいシルフィードは額と口を押さえて座席の内側に落ちていった。

「あんたのせいよ、ほのめひふえ！」

「自業自得です。それと、わたしは正しく雌狐ですが、それがどうしました?」

「むぎ〜」

ほとんどコントだな。年齢でも騙しあいの経験でもはるかに上回るレミイに未だ幼生であるシルフィードが勝てるとは、最初から思っていないが。

「主様。何か失礼な事を考えていませんでしたか？」

「さて、どうだかな」

レミイが背もたれ越しに俺の頬に手を当ててきて、テファをいじめたマチルダも此方を睨んでいる。さすが女、年齢の話には鋭い。

アンリエッタの誘拐からこっち、サイトからの連絡はない。夏休みに入っているはずだから、内偵調査のためにトリスタリアに行き、金をルイズに奪われて魅惑の妖精亭でバイトしてる頃だろうか。後で確認してみよう。

『ご購入ありがとうございます。まもなくムニン。ムニンに到着いたします。落し物、お忘れ物なさいませんよう、ご注意ください』

ニーズヘッグからほぼ真西にあるムニンの町は、飛行船舶の港を備えた交易の町である。主だったところでは、各地から名品・珍品や植物の種などを輸入、ニーズヘッグを挿んで北東のフギンで生成される金属製品やマジックアイテムなどを輸出している。

町の形は前世の平安京あたりを連想して欲しい。北の中心に港、南の中心に駅があり、碁盤のように南北、東西に道が走っている。何度か増築が施されている為、正方形ではないが。ちなみにニーズヘッグは行政府中心の同心円、フギンは山を背負った扇形。三角州の

ような形をしている。

フギンの中央である駅と港を結ぶ大通りは道幅が20メートルある。大型の荷馬車も余裕を持ってすれ違えるように、だ。フネの駐留期間中はひっきりなしに商人の馬車が行き交うために大通りへの出店は控えられ東西それぞれ三本離れた幅5メートルほどの道で東西商店街となっている。どちらも扱うものは大差ないが、大通りでは交通事故防止のため横断を厳しく禁じてあり、どうしても渡らなければならぬ人のために、地下通路が細かく設けられている。他ではまず見られない構造に、見識のあるタバサやマチルダは驚いていた。が、商店街に入るとそんな事もすぐ消える。

通り全体を覆い尽くすアーケードは、光を調節して常に快適に居られるように設計されている。並ぶ商店にはハルケギニアの四大国（ロマリアを除外している。何もなければ）や東方、おおそハルケギニア全土の品物が揃っている。建物は全て同じ大きさ。大きな二階建てで、奥は倉庫、二階が商人たちの居住スペースになっているのだ。

「俺印、ムニンの東通り商店街だ。ハルケギニアに出回ってるものなら大体揃ってる。俺と生きてくれるというなら、せめてもの礼に何か奢らせてくれ」

宣言すると女性陣と、なぜか商店街の士気も上がった気がする。上顧客だからかな。

「バーニイ、お前もだ」

「いえ、僕はここよりもフギンのマジックアイテムと、剣が欲しいです。それに、荷物持ちが必要になるかもしれないし」

「そうか。なら、また次の機会にな」

……手下の鑑だな。マルトー親父の宣言は伊達ではなかったという事か。

女性陣は順番の相談をしているようだ。長引けばそれだけ遅くなるんだが……終わったか。ベアトリスがこっちに出てきて、俺の左腕を抱える。

「旦那様。順番が決まりました。タバサとシルフィ、レミイ、マチルダ、最後にティファニアです」

「ベアトリスは？」

「この間、旦那様のお隣に居る権利を頂きました」

きゅつと手に力を入れて頬染め目を逸らしてしなだれかかるベアトリス。確かに、虚無の曜日の半分はここでデートしてるから、欲しい物がないってのも分かるけどさ。

何でこう、可愛い仕草って奴を良く分かってるのかな。

タバサ主従は食べ物欲しがった。まだ日が高いので、幾つか手持ちで食べるものを購入して食べ歩きにする。ハルケギニアで手掴みといえばパンくらいしかないのだから珍しがっていたが、味はお気に召したようでひたすらもぐもぐやっている。時々幸せそうに微笑むので、これでよかったのだろうと思う。昼には大きな飲食店へ連れて行く。

レミイは服。今着ている服もマチルダから借りているものなので、と服飾店へ。好きに選ばせてみたところ、黒くて胸元が蝶の形に開いたドレスを選んできた。お前は娼婦かと言ったら、主様専用です、と怒られた。



マチルダはアクセサリが欲しいといったので、宝飾店で真珠のネックレスをプレゼントする。一生大事にする、と言われた。まあ、ハルケギニアでは阿古屋貝の養殖なんてしてなくて、それなりに高い買い物だったのでそうしてくれる事を祈るばかりだ。

そして最後、ティファニアの番になって問題が発生した。彼女が欲しかったものは、その場に居た七人全員に衝撃を与えて余りあるものだった。

「テファ。考え直さないか？」

「いえ、その。それが、欲しいんです。あなたから」

耳の先まで真っ赤になって恥ずかしそうにうつむいているテファ。正直、たまらない。だが、アレを買い与えるとなると、かなり躊躇う。

「テファがここまで積極的だとは、ね」

「ええ、とてもベッドに乗るのを一時間も躊躇っていたとは思えませんが、ちょっと錯倒的過ぎるのではないかと。いくらなんでもせんね」

「……」

マチルダ、ベアトリス、レミィと続いて、一拍。

「……首輪は、ねえ」

「隷属証明」

唱和されて、タバサの追い討ちも貰ったテファが俺の胸に顔をうずめていやいやをする。そう、テファが俺からのプレゼントに選んだのは、首輪だった。それも、洒落っ気で付けるチョーカーではなく、

飼犬などに付けるほうの、無骨な奴。流石にそんなそら……げふんげふん、けしからんものをあっさり与えるのはどうかと思うので、説得を試みているのだが、どれだけいじられようと、何度「他のにするか？」と聞かれようと首を縦に振らないのだ。何でかなあ。その後も30分ほど説得を試みたが拒否され、俺は仕方なく、本当に仕方なく幻獣用の革の首輪を買ってくることになった。渡したら次は付けてくれと頼まれた。ここで？ここで。を三回くらい繰り返して、ようやく俺はテファの首にそれをつけることになった。

「わたしは、ずっと、あなたのものです……」

恥ずかしそうに、幸せそうに微笑むテファ。かなり来るものがある……誰か分かるなら教えてくれ。どうしてこうなった。

『主様は人を愛しすぎるからです』

ありがとよレミィ。やり過ぎだって言いたいんだな。でも念話でもない地の文を読むな。

軽く絶望しながらも大人数のデートは続き、昼を済ませたらニーズヘッグへ戻る汽車の駅へ。

だが改札を通ろうとした時、駅員に止められた。殿下！と叫んで傍に駆け寄り、敬礼する。

俺に来る話はそれほど多くないのがほぼ全て重大事である為、ベアトリスとマチルダに緊張が走った。

「大公城より通信あり。『トリスティンより使者。至急参上されたし』以上！」

「ご苦労。了解の旨、返信せよ」

「了解！」

トリスティン、ね。何かなど考える必要はない。間違はなくアルビオン上陸戦への支援要請だろう。財物で来るか、軍事力で来るかは分からないが。

「聞いての通り、俺は大公のところへ行く。ベアトリス、レミイは俺と来い。マチルダは後の四人を行政府へ。念のため901の準備を進めておけ」

「確かに承ったよ殿下。この間の話も進めておく」

「頼む。テファ、タバサ。危険はないと思うが、マチルダの傍に居れば大概の事は大丈夫だから」

「は、はい」

「わかった」

「それほど間を置かずに戻らと思う。待っていてくれ」

町の東にある竜舎に行つて風竜を借り、急いで大公の城へ向かう。

2、30分の行程だ。

「クルデンホルフはトリスティンをかばうか……？」

誰にともなく呟く俺の腕の中で、ベアトリスが不安そうに俺の顔を見上げていた。

謁見の間で俺と大公、義父、久しぶりのクロンフトさんと、大公国軍部のトップ、ベイカー將軍が向き合う。ヒゲと眼帯が特徴的なガタイのいいおっさんだ。レミイは元の姿で俺の右側、ベアトリスは左側を押さえている。

「ミール代理為政官、召致に応じました」

「堅苦しい挨拶は抜きだ、サンガ。クロンフトよ」

「はい、殿下。……トリスティンはゲルマニアとの連合軍で、アルピオンへ侵攻することを決定。そして、属国としてこのクルデンホルフに参戦の要請を行いました。具体的には……」

クロンフトさんが説明する、トリスティンの要求に俺は目を丸くした。総額およそ4000万エキューの資金、物資支援、最低でも王族一人が指揮する大隊の参戦、慰安隊の用意などなど。負担を押し付けるかのような強引な要求が目白押しだった。さらには、今日中に使者が来て返答を聞くつもりらしい。

……トリスティンは強盗か？強盗だな？4000万もの額を一度に出したら、流石のクルデンホルフも傾くぞ？

どう考えてもトリスティンの救世主『鳥の骨』枢機卿がそのまま出すような要求ではない。誰だ、こんな馬鹿な事考えたのは。……取り巻き貴族たちか。

「……呆れて物も言えませんね。御使者の到着と、大公殿下のご意向は？」

「先刻城下にご到着されて、控えにお通ししている所です」

「わしは無論、この戦争には反対だ。だが、な」

「大公殿下。いくら始祖の血を引くなどと吹いたところで、長きに渡り王座を空位にしたトリスティンは既に瓦解寸前。だというのに自らの足元も固めずただ生まれ持った地位のみで前へ進もうとするかの女王に手を貸すなど、愚の骨頂といえましょう。取り巻いて甘い汁を吸おうとする貴族どもが八工のようにたかる隙を、わざわざ此方から作ってやる道理などありません」

まず間違いない、向こうの連中は俺たちが抵抗できないと思ってる。なめんなよ。

「むう。しかし」

「殿下。わたしは証明しました。メイジが完全に平民の上に立つものではないことを。王族とてその地位に相応しからざる者であれば、避難し、逆らうのも必定。ましてや、クルデンホルフは一独立国！他国の王からの要請に、常に全面的に傅かねばならぬ理由がいずにございます！……私はこの要求の全面拒否を提言します。御使者の対応次第では、トリステインはアルビオンの前に我らと戦端を開く事もありえましょう」

今度は大公城の四人が目を丸くする。宗主国に逆らうという選択肢がなかったかのような顔だ。いや、実際なかったのだらう。それほどこのハルケギニアの身分制度は徹底しているのだ。だから俺は言ってる。

「伝統や歴史、身分で人が斬れるなら杖も軍も要りません。先も言ったとおり、トリステインなどという弱小国の何を恐れることはありませんよ。あの程度、私一人でも殲滅は可能ですよ？」

俺はチートで一人軍隊だからな。

さて、無事大公殿下から交渉を委任され、トリステインからの使者を名乗るブロンドで気が強そーーーな女と気の弱そーな中年の男が謁見の間に通された。

女は男を控えさせ、名乗りを上げる。俺はパーティーの類には滅多

に出席しないので直接会った事はなかったが、あのラ・ヴァリエールの長女であるらしい。なるほど、ルイズのツンを煮詰めて大きくした感じとはよく言ったものだ。

しかし、よくもまあこんな一研究員が使者になるものだ。トリステインでクルデンホルフへ大きな顔が出来るのがあの公爵家と王家だけとはいえ……ちょっとなめすぎでないかい？ アンリエッタや公爵本人が政務で動けないのは理解できるし、俺たちが拒否するなど欠片も思っていないトリステインが『使者に降りかかる危険』なんてものを考慮しているとは思えないが。

そんな事を考えているとエレオノールが口を開いた。

「先に通達した品々とミール特別行政区の資料を揃えて三日以内にトリスタニアの王宮に参上しなさい」

それは要請でも交渉でもなんでもない。ただ地位に胡坐をかいているだけの愚者が放つ、傲慢だった。大公たちも絶句している。

うっかりブレ……まで唱えかけてしまった俺は、少ししか悪くないはずだ。深呼吸、深呼吸。冷静になってちょっと考えようか。

……なるほど、この女が使者になったのは立候補か。リストにない要求が増えている。王立魔法研究所アカデミーの研究者にとって、ミールの技術は喉から手が出るほど欲しいものはずだ。しかもコイツは相当熱心な研究者だったはず。ならば、大きく劣っている自国の技術力を巻き返すために他者のノウハウを強奪しに来ることも、十分考えられる、か。立場に溺れているのにも気付かない典型的なトリステイン貴族であるこいつらにとっては、地位さえ上ならどれほど強引な事を行っても押し通せると思っっている節があるからな。

考えたらもつと腹が立ってきた。何こいつら。どんだけ増長してり

や気が済むの？

「お断りする。エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ドラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。戻って女王とその衣装ともに告げよ。今この時をもって我らの絆は絶たれた、と」  
「な!？」

ブロンドの女は鳩豆な顔でフリーズした。そうだろうよ。トリステイン王家からの直接の要求で、ラ・ヴァリエール公爵家の、政治家でないといえ長女を使者に立てた。そうすれば誰も何も文句言わないと信じてるんだからな。

「行け! 貴女が国境を出るか、トリステインが国境を越えるまで貴女の安全は保障しよう。それが今の言動へのせめてもの情けだ」

「祖国に叛くか、サンガ・グレイ・ド・シエール!」

フリーズ解けるなり何を言い出すかと思えば、そう来るのか? 俺を売らせたラ・ヴァリエールであるお前が。

「我が名はサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ!」

俺たちに媚び続けているトリステインであるお前が。

「クルデンホルフこそ我が祖国、我が血肉、我が魂!」

そのくせ今も俺を蔑むトリステインデアル才前ガ!!!

「クルデンホルフを護る為とあらば、今この場で使者のそつ首<sup>は</sup>刎ね飛ばしてくれよう!」

「旦那様！旦那様おやめください！」

『主様冷静に！ソレは、全面戦争は貴方が一番拒んだ事でしょう！』  
『？』

俺の様子がおかしい事に気付いていたのだろう。飛び出しかけた俺にベアトリスが抱きつき、レミイがマントに牙を立てて引っ張る。

……二人を傷つけては駄目だ。冷静に。冷静に冷静に冷静に。頭を冷やせ。

使者の体は細かく震え、顔は青い。よく見れば目尻に涙が溜まっているのも分かるだろう。もう一押しで腰砕けになりそうだ。本気で殺す気になってたから、この程度で済んでいるほうがすごいんだろう。烈風カリンの教育か。いいザマ、といえはいいザマだな。少しは自分の態度を鑑みる。

いやいや、落ち着け俺。吸ってー、吐いてー。

「……クルデンホルフ大公国は、トリステイン王国からの要求を拒否いたします。使者殿は王宮に戻り、その旨女王陛下へお伝え願いたい」

「それは……」

「恐れながら殿下」

うるたえて涙声で言いよどむ使者の横から、ずっと黙っていた男が進み出た。困り皺が印象的な、45、6くらいの中年の男だ。マントをつけているから、どこかの貴族なのだろう……見覚えのあるよくな、ないような顔だ。



「オグロン・リーゼン・ド・シエールと申します……我が方の使者のご無礼をお許しく下さい」

「ド・シエール男爵……貴殿を補佐官に選ばれたのはラ・ヴァリエール公爵か？」

「いえ、マザリーニ枢機卿にございます」

あの『鳥の骨』か。さすがにやってくれる。有力貴族の主張を退けられず、俺が交渉に出てきて拒む事まで読んだ上で、決裂したときの修復役にこの男を選んできたか。トリステインの救世主は伊達じゃないな。おそらく、対外的には正式な使者はこっちになっていて、エレオノールは別件で視察か何かだと言いついてあるのだろう。下っ端の男爵家だが、外聞より実効が本音だろうな。

久しいな父上。だが、あんたに払う敬意はとつくの昔に品切れだ。

血と言う形だけの父親と交渉した結果、トリステインとの戦争は回避された。俺たちは水先案内として空軍一個中隊を派遣し、トリステインに中隊の諸経費と報酬を負担させる。戦闘には参加しない。それだけのことになった。

俺が手を貸さない以上、連合軍の敗走は必至だ。だが、わざわざ教える気にはならない。

「此方の願いを聞き届けていただいた事、感謝いたします」  
「枢機卿に、よろしくお伝えください」

ド・シエール男爵が握手を求めるが、俺は動かず、拒否する。『彼はさびしそうな表情で、まだ泣きそうなエレオノールをつれて退出

していった。

……後4ヶ月少々。年末には戦争、か。

## 第11話／賑やかな休日と革変のとき（後書き）

お待たせしました、第11話。ハーレムデートとトリステイン戦争フラグの回。

「期待されていた読者の皆様、色々と申し訳ございません」

てふあ、やっちゃった。

「何考えてんだこの馬鹿作者。反響が怖いだろうが」

いや、ノリで？こう、なんつうか、言わせて見たい、的な何か。

「その何かは間違いなくお前のリビドーだな」

今回は……戦争開始と贖罪のルビーの話。の予定。です。こっちも難儀しそうです。

「作者はご意見・ご感想・各種ご指摘を募集しています。お寄せください」

ではまた次回！

「ところで、本当はどうしてこんなに遅れたんだ？」

……エピソード書いてました。

「ちよっ!!打ち切りか!?!」

第12話／久々の学院と消える炎（前書き）

なかなかいい感じに頭が回りません。

## 第12話 / 久々の学院と消える炎

夏休みが終わり、魔法学院に戻ってきた。

一番最初に目を引いたのがセーラーを着てプリーツスカートをミニにしたモンモランシーだったのはまあ、お約束だとも思おう。タバサに怒られた事も含めてな。あの杖で頭をこう、ごつんと。別に見とれた訳じゃないぞ。舌は噛まなかったが、シルフィードの痛みが少しだけわかった気がする。

ティファニアはニーズヘッグの行政府で勉強中。アルビオン王家とエルフの混血なのに、系統魔法も精霊魔法もうまく行使できないらしい。虚無だからか？体術もからつきし。こっちは単純に、あの胸が暴れすぎるせいで。なのでマチルダと一緒に政治の勉強が中心だ。四属性のルビーが手に入ればオルゴールと一緒に虚無を覚えてもらえるんだが……持つ道理がある風のルビーはアンリエッタが大事に持っている。当分は保留だな。俺はテファを前線に放り出すなんて事はしないから、覚えないなら覚えないでもちつとも困らないし。

「……ってなくあいで、そのリツシュモンって裏切り者をアニエスがやっつけたんだ」

「螻蛄の斧は見事又エの首を刎ねたか。たいしたものだな、その銃士隊の隊長というのは」

「ああ。まさに女騎士様って感じだった」

「ほう、そいつはいい。一度お目にかかってみたいな」

で、今俺が何をしているかというと、いつもの手<sup>ダミー</sup>で授業をサボり、

使い魔の広場でサイトの休日冒険譚に耳を傾けていた。聞く限りでは軒並み原作どおりに進んでいるようで、エクスプロージョンに目覚める機会を奪っておいたルイズも、ウェールズゾンビの事件でデイスペルを唱えて無事(?) 虚無に覚醒したらしい。必要なときに必要なものを、という祈祷書の限定は便利か不便か良くわからない。そもそも、そんな限定つけるならあんな分厚い本である必要はないと思う。

スパイ活動と問者炙り出しの狂言誘拐も無事に……そうだな、事件としては無事に終わったようだ。その後いつものようにサイトがルイズに爆発させられたので、サイト個人としてはあまり無事ではないが。

……こういうことを考えるといつも思う事だが、コントやギャグ漫画の『どかーん』を再現できるエクスプロージョンの爆発ってのは、どういう原理なのだろう。少なくとも、テファに覚えて欲しくないのは確実だが。

「……で、女王の唇は甘かったか？」

「っ！？」

「やつぱりか。まあ、無理もない。一個人としてなら悪くない女だ。誘拐事件のときも大層な見得を切ったんだろう？」

「くそ、やられた……ちなみに女王としては？」

「下の下の下。十級。じゃなけりや高等法院長が裏切ったりはしなかるうよ」

「ひでえ」

グダグダ会議するしか能がない貴族に痺れ切らして先陣切るほどの思い切りの良さだけは(蛮勇とはいえ)評価できなくもないし、総合的には『今後の成長に期待』ってな具合だが、トリスティンの現状で『今後』なんて悠長な事は言えまい。

……そろそろ、あの話をするか。この間の交渉で完全にトリステインはこつちを敵視し始めてる筈。このままサイトをアンリエッタに、というかトリステインに預けたままにはしたくない。

「話は変わるんだがな、サイト。ハルケギニアに骨を埋めないか？」  
「え？」

「お前が地球に変えるのに必要なのは多分、いや、まず間違いなく虚無の魔法だ」

「それ、本当かッ!? なら、ルイ……ッ！」

あーあ。秘密にせにやらん事をアツサリと。今更口押さえたって遅いよ。だが、虚無なんて言い出した時点ではれてると思っでいいんじゃないか？ 普通は誰も信じてない系統だぞ？

「落ち着け。俺は『知ってる』し、隠蔽の魔法も使ってる。だが、な？ あのルイズでも、いやルイズだからこそ、扉を開かない可能性がある。魔法があつても、奴にはきつと開けない。あの祈禱書は担い手が本当に必要としない限り魔法を明かさなない仕掛けになつてるはずだからな。お前とルイズが相思相愛である限り、というかルイズがお前を全力で好かなくならない限りは扉の魔法は使えないと考えていい」

「ちよっ!？」

異論は認めない。お前らは両思いだ。ちよいと浮気なところがあるがな。……コイツいい奴なんだから、どっかの王に据えてハーレムでも作ればいいのに。 殆ど運だけでその地位を得た俺が言う事じゃないか。ベアトリスが俺に惚れてる理由、今でも解らんしな。

話を戻そう。



「扉の魔法を使える別の担い手に遭えるかもしれないが、虚無の魔法は精神力の消費が酷い。ましてや世界の壁を越える魔法だ。並大抵の消費量じゃないだろう」

「でも来るときは？コモンマジックとか言う簡単な魔法だったんだろっ？」

当然ともいえる質問が返ってきたので、これはまだ仮定に過ぎないが、と前置きして説明。

「サモンサーヴァントの対象は運命とやらを辿って決めるらしい。つまり、自動誘導で呼び出す相手を決定して、その対象の前にゲートを開く。これなら高次元的な距離に応じた精神力があれば、大体オーケーだな？だが送り返す。つまり何も指定がない場所にゲートを開くとすれば、世界の指定、星の指定、公転・自転してる星の緯度経度高度を固定して追っかけ続けながら、さらにその行き先にある障害物の状態に応じた微調整が必要なはず。そんなのが人間にイメージしきれるか？」

「な、なるほど。大体分かった」

「よし、続けるぞ。もしも、扉を開いてくれる担い手に出会えたとして、だ。お前はルイズやシエスタ、アンリエッタを置いて地球へ帰れるか？この戦乱のハルケギニアに」

「うっ！！」

衝撃を受けているサイト。自覚あったろうに、何でここでうろたえるんだ？どっちにしても畳み掛けるんだがね。

「アンリエッタに虚無として認識されているルイズは間違いなく前線送りだ。トリステインにはまともな戦力がないから、これは100%だな。そのアンリエッタは女王。両陣営の最大目標が戦争やつ

て無事で済むわけがない。勝ち続ければ、その限りじゃない事もあ  
るが。そういう意味で言えばシエスタが一番安全かもしれない。だ  
が戦争で死ぬのは軍人だけじゃない。むしろ民間人のほうがずっと  
被害が大きい。直接殺されなくとも、勝負が決まるまで、いや決ま  
って戦後処理が全て終わるまで。戦いの規模にも因るが、少なめに  
見積もっても十年は元通りの生活さえ出来やしない。その間に餓死  
しちまつても不思議じゃないな」

「それは、俺が！」

「そうだな、虚無の盾。なら護ればいい。だが護られた相手はお前  
を愛さないか？お前は護った相手に愛着が湧かないか？一度護って  
おいてハイサヨナラと放り出せるか？」

……そして、戦争を経験して人殺しになったお前が、あの日本で生  
きていけるのか？

「そ、それは……」

「意地の悪い話だったのは自覚してる。サイトの望郷も庇護欲や使  
命感も当然のものだし、その戦いに身を投じる意思は大切な事だと  
も思う。だが、だからこそ、一度護っておいて二度目は見捨てるよ  
うな真似はできない。そうだろう？……間違っても地球に連れて行  
くなんて言うなよ？地球に行っても魔法が使えるかはさっぱりだが、  
少なくとも地球側は大混乱だ」

「それはわかっている……サンガ。心配してくれてありがとう」

「よしてくれ。少し言い過ぎたとも思ってる。……もし永住の覚悟  
が決まったら、教えてくれるか。気楽に生きていけるところを紹介  
する」

「悪いな」

「俺にそれが出来るから。それだけだ。さて、訓練の続きでもしよ  
うかね」

「ああ。あいつは、あいつらは俺が護る。絶対にだ」

明確な意思の炎を瞳に宿して木刀を握るサイトは、原作よりもずっと主人公してるように見えた。

それから三ヶ月。侵攻作戦が発表されて男は教師も学生も僅かな例外を除いて出征していった。

サイトに頼まれてゼロ戦の複座改造に伴う機材換装と弾薬補給以外はだいたい原作どおりで、彼らは侵攻作戦艦隊旗艦『ヴュセンタール』へ向かってゼロ戦が飛んでいった。

その後『鍊金による大量生産』についてコルベール氏とちよつとした議論になったのは、言うまでもないか。

翌日。俺の眼前でそのコルベール氏が鎖帷子に身を包む若い女に長剣を突きつけられていた。『女王陛下の銃士隊』を名乗るその女は、授業を中止させて生徒を中庭に集めていく。男は僅かな例外を除いて皆出征してしまったので、女子ばかりだ。ま、銃士隊も女ばかりだから、丁度いいといえば丁度いいかな。皆が去っていく教室に残ったのは、しりもちをついたコルベール氏と俺。

「心中お察しします」

「え?」

手を差し伸べて、コルベール氏を助け起こす。さつきまで自分の生徒から侮蔑の視線を浴びていたのだから、混乱するのも無理はない。

「戦が怖い。そうはつきり言える先生は、軍の闇、政治の闇をご存

知なのでしょう?」

「君は……?」

「ただの留学生です。いえ、ちょっと変わり者の留学生、ですかね」  
銃士隊の隊員が怒鳴るので、俺も中庭に向かった。教練は……所詮子守程度だった。

深夜0時。俺は銃士隊の歩哨を落として、ダミーゴーレムにすりかえていた。

眠らせた銃士隊の面々は、親衛隊らしく若くて見目のいい女ばかりだ。実に美味そ……いやいや、いやいやいや。この間の鮮烈な一週間のせいでも自制が甘くなってるな。

潜入に使うフネを撃沈するのは容易い事だが、戦い慣れた傭兵メイズの部隊だ。きっちり眼前で殺さないとどんな逆襲を受けるかわからないので、攻めてきてもらう事にする。

今回のゴーレムはメンヌヴィルの特殊能力にも対応して臭気・発熱偽装機能搭載である。はっはっは！情報を制するチートな俺が勝つ！

……さあ来いメンヌヴィル。お前らの戦果は0で確定だ！

午前4時13分42秒。火の塔前の歩哨ダミーが攻撃を受けた。原作どおりか。連中の目的は生徒を人質に取ることだから、このまま黙ってれば俺もアルヴィーズの食堂あたりに集合させられるはずだ。

そんな事考えた時期が俺にもありました。

俺は今、ステルス魔法を使ってメンヌヴィル他が立てこもった食堂の前にいる。実にふざけた事に、こいつら男子寮を完全に無視しやがった。おかげで外から攻略せにゃならん。内側からゴーレムで全滅させるのが一番簡単で派手だったのに。

ちなみに捕虜候補の居ない場所に向かった連中は全て排除した。『殺されてから逆襲』という生きてないゴーレムならではのホラーな奇襲でな。

傍に居るのはキュルケとタバサ、そしてアニエスと銃士隊。そして、コルベール氏である。

タバサが俺を探しているが、うろたえては居ない。無事だと信じてくれているんだろう。

ここも原作にそって、でも誰も怪我しない程度に改変してやろうか。

キュルケとタバサが閃光爆弾を炸裂させ、突撃が出鼻をくじかれる。銃士隊が持つ拳銃の火薬をこっそりただの砂に変えておく事も忘れてないので、暴発の危険はないぜ。軒並み不発になるけどな。

ゴーレム、突撃。閃光をまともに食らって蹲っている敵メイジを気絶させて外へ運び出し、殺す。

俺本体が何もしてないが、別に活躍を見せたいわけじゃないし。

一人外に出たメンヌヴィルはコルベール氏と相打ちである。彼を治療しようと学院の水メイジが片っ端から気絶していくな。

そしてダングルテールの真実が語られ、コルベール氏が『死に』、アニエスは泣きそうな顔で去ってゆく。

「……蛇は一人でいい」

言ってみたかっただけだ。忘れてくれ。

泣くキュルケを尻目に、タバサが俺に抱きついた。

「心配した？」

「俺の妻はそんな柔じゃないさ。お守りも渡してあるし、な」

正直に告げたら杖で殴られた。なぜだ？俺が渡したお守りはあらゆる危害から装着者を護る特別製だぞ？

散々怒られた後、ベッドに入ると手のひら返したように甘えられた。

……女心と秋の空。か？違うな。

## 第12話／久々の学院と消える炎（後書き）

アニメス登場の回。でも接触してない。

「またゴーレム運用がチートになってるな」

実際チートだ。ちょっと忙しいので手短に行こう。次回はアルビオン侵攻の話だ。

「結局行くのか」

ほっといたらサイト死ぬぞ？テファア居ないんだから。

「あ、そうか」

そういうこと。では皆様、ご意見ご感想、ご指摘そのほかお待ちしております！

「また次回！」

第13話／侵攻作戦と裏切りの代償（前書き）

いつもと違って話題の転換が小さめです。



### 第13話 / 侵攻作戦と裏切りの代償

俺が現地入りしたのは聖誕祭も目前の、シテイオブサウスゴータを連合軍が落とし、アルビオン共和国から停戦が打診されたと連絡が入ってからだ。よしよし。物語は順調に進んでいるな。……俺という大きなナイフを飲み込んだまま。

俺はクルデンホルフの高速巡洋艦『ヘルメス』の艦橋に行き、部下たちに指示を出していた。俺が引き抜いてしまったボーウッドを初めとするアルビオン空軍のベテランたち。本来居るべき彼らの穴を塞ぐ為に操艦の専門家をトリステインの船に出向させているため、彼らを回収する名目で連合軍から少し離れた場所に係留させてあるのだ。

え？風石？ステルス船で随時補給してますけど、それが何か？うちの資源はほぼ無限だぜ。

「本艦および所属中隊はこのままロサイス近郊に駐留。連合軍およびレコン・キスタの動きを記録する。現状で連合軍側からの要請は、何かあるか？」

「表立った要望はありません。ただ、トリステイン軍には不審と侮蔑が流れています。艦隊指揮官ド・ポワチエやその周囲は最たるもので、我々の意見を聞かない節があります」

「先々王に領地を賜った恩も忘れて、つてか？くだらん。先々王本人、あるいはその意思が生きている当時ならともかく、現在のトリステイン王宮に貸しはあつても借りはない。……少し出てくる。戦渦に祭りは関係ない。くれぐれも気を抜くな」

他人が売った恩に便乗して喚くなんて、デタラメもいいところだ。

……さて、マチルダ無しでどこを選ぶのかわからないが、アンドバリの指輪を回収しに行きますか。

何箇所かある水源地を『機兵の系譜』の熱源探知レーダーまで使って搜索して、ようやく見つけたシェフィールドは丁度アンドバリの指輪に念じて水に仕掛けを施すところだった。マチルダが居ないので、ワルドのほかに何人かのメイジが細かく場所を探索していたらしい。人数が多かった。

「スピードが要るな……よし。我は紐解く『機兵の系譜』、『絆の幻影』」

第一目標、アンドバリの指輪の入手。第二目標、シェフィールド、およびワルドの始末。任務確認。

消音魔法正常作動。出力全開！攻撃開始！

Outside

ワルドは戦慄した。共和国側の作戦のために指輪を手に祈り始めていたクロムウエルの秘書と、自分の間に突然現れた黄金に輝く人型に。

いつの間に、どこから来た、何者か。そして何より、どうやって風のスクウェアである自分に悟らせることなく奇襲したのかという疑問に体が強張り、いつの間にか自分に向けられた攻撃への対応が遅

れた。それでも咄嗟に体をひねるが、間に合わない。低い姿勢で飛び込まれ、両足の脛を切り飛ばされた。

「がああああ!?!」

否。切り飛ばされたのではなかった。切断面とその周辺は完全に蒸発・炭化しており、とんでもない熱量で焼ききられたことがわかる。予想していた斬撃の痛みではない、体を蒸発させられる痛みに、ワールドが悲鳴を上げた。精神を振り絞ってシエフィールドを見れば、胴体を二つに分断されており、既に事切れているのがわかる。最初の一瞬でやられたのだらう。

「ひい……!!」

「あ、悪魔だ……!!」

「悪魔だあ!!」

無様に悲鳴を上げて逃げていくレコン・キスタの貴族たちに、黄金の光は複雑な形の銃らしきものを向け、光を放って彼らを打ち倒してゆく。既に立つ事叶わなくなったワールドはせめてもと右手に握り締めた杖を背を向けている光に向け、幾度となく使ってきた『エア・スピア』を詠唱する。

「死ねえっ!!」

現在持ちえる全ての精神力を振り絞って放った『エア・スピア』は黄金の光を霧散させるが、瞬時に上から現れる同じ光に、ワールドは残像を撃つただと理解した。

死を悟ったワールドの口が動く。だが、声が発せられるより先に、彼の胸から上が消滅した。

特に苦労せずに指輪の回収と面倒な敵二人の排除に成功した。一応スキルニルの事もあるのでシェフィールドの屍は念入りに調べたが、幾つものマジックアイテムを身に着けているところを見るに、どうやら本物のようだ。額にルーンはないが、死ぬと消えるはずなので不思議はない。ガリア王ジョゼフと通信していたと思しきマジックアイテムは、ビームサーベルで半分蒸発していて、もう使い物にはならないだろう。

生きていたら……また殺すだけの事だ。今度はジョゼフ諸共な。

数日後の事だ。定時に『ヘルメス』の艦橋に入ると、部下たちが一斉に敬礼する。だが、その顔は若干困惑していた。

「何事か」

「連合軍側に反乱が発生したのですが……これがどうにも妙でして」「妙とは？」

わかっているも聞くところだからな。

「ええ。トリステインもゲルマニアも、思想も出身もバラバラな連中なのに一斉に反乱が起こっています。この数日間シティオブサウスゴータで駐留していた地区が同じですので、何らかの毒物によるものだと分析しているのですが、連合軍側はこれを把握していないようです」

優秀な部下を持つと、頭は楽で良いね！

「例の発狂薬の類か？どこから古いマジックアイテムでも仕入れたのかね。うちは大丈夫か？」

「全部本国直輸入ですよ、部隊長。あなたの指示でね」

「部隊長！接近する竜騎兵、三騎！トリステイン国旗を揚げています！」

中隊長と皮肉っぽい笑みを交わすと、索敵担当が声を張り上げた。雀が来たか。

「甲板に降ろせ。捕縛用意」

「了解、甲板に誘導、捕縛準備！」

「捕殺でもいいぞ」

「いや、そりゃ不味いでしょ」

中隊長、ツッコミ体質か？

連合軍からやってきたのは、ウインプフェンとかいう参謀長と、彼の護衛に竜騎兵メイジが3人。はっきりと焦りが見えるが、やっぱり傲慢さは抜けてない。

「参謀長。役目を終えようとしている我々に何か御用でしょうか」

「ド・ポワチエ総司令以下司令部は壊滅した。現在はわたしが連合軍司令官だ」

「それは失礼を。して、『トリステインの旗だけ揚げて』、その御用向きは」

「……現在ロサイスへ向けて裏切り者とアルビオンの軍勢、総じて三万が接近している。貴公らは現在準備中の我らの特殊部隊と共に」

「殿軍ならお断りします。もとより戦闘行為には関与しないという約定で人手をお貸ししたのですから。それに、接近中の敵軍の総勢は七万を超えているはず。把握しておられないのですか？」

目いっぱい皮肉を込めて対応する。好き放題に攻めておいて危なくなったら泣きつくとか、普段から口にしてる『誇り』とやらはどうした？しかも、保身に走って機を逸し、あまつさえ敵の数を過少報告して友軍を意図的に危険に晒そうとするような馬鹿に、誰が手を貸す？

特殊部隊つてのは、ルイズとサイトのことだろう。もう通達済みだつてんなら、このおっさんに用もないな。

「貴様ら、トリステインへの恩義を忘れたか！」

「約定は約定。強要される謂れはありません」

「つく、この恩知らずの野蛮人どもめ！」

もう対外的な敬意も何もあつたもんじゃないな。ウインプフェンと護衛のメイジたちが杖を抜き放つのを見て、俺は口の形が歪むのを止められなかった。唱えられた魔法が甲板のごく一部を破壊した瞬間、銃声が響き渡り弾丸が彼の杖を破壊する。

此方を睨むウインプフェンの顔を見ながら、懐から懐中時計を取り出して俺は声を張り上げた。

「確認せよ！本日1436時、トリスティンの旗を掲げた司令官によつて我が『ヘルメス』が損傷を受けた。この行動をトリスティン王国の敵対と認め、これを殲滅する！！連合艦隊に出向中の連中を呼び戻せ！トリスティアのゼペックに応戦の旨布告せよと打電しろ！『ヘルメス』発進、攻撃準備！！」

「アイ・サー！！」

部下たちが一斉に駆けていく。戦時下の裏切りなんて別に宣言無しで消し飛ばしてもいいんだろうが、司令官が直々にやった事だし、少しは手続きして何も把握してないトリスティン王宮を震え上がらせてみてもいいだろう。

「名乗りは連合軍司令官でしたが、ゲルマニア勢は如何いたしますか！」

「この司令官はトリスティンの旗しか掲げていなかった！連合軍指令としての会談ならゲルマニアの旗も掲げてくるはずである！故にこれはトリスティンの独断と判断する！ゲルマニアの艦隊が敵対行動をとるまでは無視せよ！」

「アイアイサー！」

俺の指示を聞いて、縛り上げられたウィンプフェンの顔が青くなつていった。

「やめろ！やめてくれ！今の我が軍が攻撃を受けたら！」

「自分で敵を増やしたんだ。司令官だろ？言動の重みくらいは知ってるだろうに、無様な事だな」

そうしたくなるように、無傷の中隊をわざわざ眼前にぶら下げてあげただけど、ね。

俺の口角が無意識に吊り上っているのを自覚する。きつと、こいつらには悪魔みたいに見えることだろう。

「さよなら、トリステイン王国」

Outside

トリステインの王宮は謁見の間に、衝撃が走った。その場には黒で固めた女王アンリエッタ、枢機卿マザリーニ、アニメス等の親衛隊、他、財務卿を始めとする兵站や内政を担当する主だった重鎮たちが並んでいたが、彼らは皆一様に青い顔をしている。

彼らの前に立つクルデンホルフの大使ゼペック・アウデイトーレが、ウインプフェンの来訪から攻撃、捕縛までを『録画』したマジックアイテムを持参してサンガの声明を告げにきたからだ。風魔法で光の屈折率を操り、くつきりカラーのホログラムを作り出す、フギンのスペシャルアイテムである。これの大規模なのがニースヘッグの『ラタトスク偽装置』であり、サンガ式ステルス迷彩の正体だ。

「本日14時36分、貴国の国旗を掲げた連合軍司令官ウインプフェンを名乗る人物に、我が軍が攻撃を受けた。我々はこれを貴国の敵対行動とみなし、サンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフの名の下にこれを『殲滅』するものである」

「馬鹿な！10分前の出来事ではないか！なぜこれほど早く！？」「いやそれよりも敗走中に友軍を攻撃したなどと、そんな馬鹿な事が！」



混乱に陥る諸侯を無視して、ゼペックは続ける。

「当方の技術を持ってすればこの程度の通達は十秒で足りる事。映像記録を見てわかるように、此度の進軍に助力した『ヘルメス』号の甲板が、当該将校とその護衛によって破壊されている。陛下の代理人である司令官の敵対は、王国の敵対と断ずるに充分な事柄であると当方は認識している。宣告は以上。汝らの不義に鉄槌の振り下ろされん事を」

「お待ちください使者殿！！」

退出しようとするゼペックを、アンリエッタが慌てて引き止める。

「これは何かの誤解です！トリステイン王国は決して貴国を敵対視など」

「ならば何故、当初あのような要求を出されましたか、女王陛下。あの要求のおかげで国内に反トリステイン感情が強く育っております。我等が公子サンガ殿下はそれでも母国の為と一個中隊を、傭兵に近い形とはいえ出向かせましたのに、あなた方はこのような仕打ちをなさる。それでもトリステイン王国はクルデンホルフ大公国を敵視していないと、そう仰るのですか」

実際にはただの畏の為なのだが、サンガは一切理由を明かさなかつたので彼の近辺は皆『あれでも一応生まれた国だからかな？』と考えているのだった。なぜなら、クルデンホルフにとってサンガは誰よりも優しく優れた為政者だったから。トリステインにもその優しさを向けたのだと思われていた。

勿論、現実にはそんな事ないのだが、サンガ以外にはそんな事知る由もない。

「そんな……！そんな！」

「使者殿。何とか大公殿下に取り成してはいただけませぬか」

「此度の侵攻作戦に関する全権は、先の交渉から部隊運用に至るまで全て公子サンガ殿下に委任されております。そのサンガ殿下が殲滅と仰る以上、我らはトリステイン王国を殲滅いたしましょう」

「ならばその公子様に！」

「会谈は厳しいでしょう。先ほど映像に映っておられた、赤い髪の方がサンガ殿下です」

取り乱しかけていたアンリエッタも、何か糸口はないかと食い下がったマザリーニも、絶句した。

今でも理由が明かされない謎の婿入り後、これまた明かされない謎の手腕でクルデンホルフを急成長させた青年。元々はトリステインの男爵家出身だから多少の便宜を引き出せるだろうと期待して交渉させた相手に、諸侯の要求は拒まれたとはいえ自分たちが一番必要とした『新造艦隊の運用を補佐する人材』を用意してくれたサンガ本人に、自分たちの代理人たる司令官が杖を向けた。その事実は、よほどのことがない限りクルデンホルフに『止まって貰う』手段がないことを意味する。

勿論、現在敗走中のトリステイン軍にも、ラ・ヴァリエール公爵のように出征拒否した諸侯の軍にも『止める』力などない。あるはずがない。

サンガ個人の『力』はもとより、クルデンホルフ軍の錬度も装備も、トリステインの百年以上先を行くのだから。

「これにて失礼いたします」

「ッ！衛兵、捕えろ！こやつの話は全て虚偽に決まっておる！！」

「やめろ！これ以上王国の名を汚すな！」

けしかけられた衛兵がずっと黙って聞いていたアニエスの静止を聞

かずにゼペックに迫った。かと思えば、ゼペックの足元が閃光を発し、次の瞬間にはその姿は掻き消えていた。

「……そんな、ことって」

「……殿下」

玉座傍の三人が頂垂れる。

重い空気が謁見の間を覆いつくしていた……

S i d e o u t

### 第13話 / 侵攻作戦と裏切りの代償（後書き）

さて、本格的に原作破壊が始まるぞ。時期的には、大体当初の予定通りだな。

「随分引つ張つちまったせいで、『破壊してないぞ』ってなご意見を幾つか貰ってしまったぞ」

うむ……まあ、タイトルがタイトルなんだな。かなりその辺を期待して読み始める方が多かったということなんだろう。ありがたい事です。

「この話から、大規模で派手な変更になりますが、作者の文才の影響でそれほど面白くはならないと思われます」

……酷いぜ。でも空気になるキャラが多いし、言い返せないんだよな。

「シエフィールドとワルドの瞬殺について」

主人公の戦闘力は半端ないので、単独奇襲をかけると大体こうなります。もしくは、遠距離大火力で全て消し飛ばす！今回は指輪の回収の為、奇襲になりました。

「本音は」

戦闘描写、出来ません！

「この役立たずが……で、次回だが。トリステイン艦隊の制圧とサ

イトVS七万・介入編をお送りする予定」

期待されている読者の方が沢山いらっしゃるようなので、今後もがんばります！ではまた次回！

「「ご意見」「感想」、「指摘等等、お待ちしております！」

アンリエッタとアニエス、どうしよう……？

「お前は女キャラの心配しかせんのか!?!」

## 第14話／破滅の光と壊れた王様（前書き）

今回はめまぐるしく場面が変わります。安定しない作者でホントすいません。

## 第14話 / 破滅の光と壊れた王様

混乱している艦隊の制圧なんて、あつという間である。ましてや、俺の軍勢は原作でも最強と名高かったアルビオン空軍と次点を押さえていたクルデンホルフの空軍の融合体に、前世知識を加えてフネごと強化した正真正銘ハルケギニア最強の空軍なのだから。

「ゲルマニア艦隊、戦線離脱を確認！当方による損害なし！」

「確認した。任務に戻れ」

眼前では竜騎士隊と便乗した空挺部隊がトリステインの船に奇襲をかけている。撤退中で混乱していたところに奇襲を受けた船たちは次々に制圧され、主要なクルーと軍人が甲板に縛り上げられていく。あれはとにかく制圧に特化した『飛竜空挺部隊』。某蛇の人を想定した訓練をしてあるため、索敵能力と近接戦闘力がとにかく高いのだ。

余談になるが、逆に潜入工作に特化した『蛇部隊』も編成しており、現在訓練中である。

「『レドウタブル』号ならびに最優先目標02『ヴィンダールヴ』確保！抗戦者、ありません！」

「よし。02は嚴重に縛り上げて磔にでもしておけ！」

「了解！」

そんな特殊部隊の活躍もあり、攻撃開始から僅か5分。トリステイン艦隊、完全掌握。

優秀な部下が居ると本当に楽だ。今後もこのスタイルで楽がしたいぜ。

「殿下。ゼベックが無事首都に戻ったと連絡がありました。反応はほぼ此方の予想通りとの事」

「トカゲの尻尾きりを目論むか？ふふ、そのための会議をしている間にトリスタニアは落ちるな」

「でしょうなあ……」

「まあ、アンリエッタが交渉に飛び出してくるのが早いか、俺たちがトリスタニアを制圧するのが早いか、だな。出来れば、無辜の民を焼きたくはないんだが」

「部隊長。トリステインを殲滅するのではないのですか？」

呟いた俺に、疑問を持ったのか中隊長が口を挟む。

「ちよつと違うな。俺がこの戦いで殲滅するのは『トリステイン王国』だ。『国家』つてのは土地と支配者、そして被支配者の全てが揃っていて初めて『国家』。これを殺したいなら、どれか一つでもゼロにしてしまえばいい。地道に領土を削り取ってもよし、外交で全面降伏させてもよし、さっきレコン・キスタがやったように毒でもまいて国民を皆殺しにしてもいいだろう。ただ殺すだけならな」

俺の言いたい事はわかっただろうが、中隊長は黙って聞いているので俺も最後まで言うことにする。

「だが、奴らから奪った土地は、俺たちの土地になる。なつちまう。だったら、民衆も土地も無傷であればそれにこしたことはない」

「道理ですなあ」

「何もかも焼き払うのはロマリアだけで良いだろう。とはいっても、トリステインの貴族は煮ても焼いても食えなさそうだから大体皆殺しでいいだろうけどな」

敗走中だから、というだけではないだろう。新造艦のはずなのにだ



いぶくたびれて見えるトリステインの旗艦『レドウタブル』号を見ながら、俺は中隊長との話を終えた。

レドウタブル号の甲板に捕虜が集められている。ギーシュヤマリコルヌの姿もあり、ルイズは縄で縛られている。勿論、杖は全て取り上げた。

シエスタは居ない。慰問隊はうちの女性隊員たちと別のフネだからだ。ただし、オカマ店長ほか男連中は動きを妨げない程度に座らされている。娘たちに危害を加えないと確約したらおとなしくなったそうだ。

俺が彼らの前に姿を現すと、同級生や一部の先輩後輩が反応する。なぜか居るヴイリ工は、また悲鳴を上げて震え出していた。

ああ、それと馬鹿神官は簀巻きになって通路に転がっている。指示と違うが、通る者通る者に踏みつけられてるせいで相当に弱っていたので、結果オーライということだ。

「トリステイン軍の諸君。俺はサンガ・グレイ・フォン・クルデンホルフ。この部隊の責任者だ」

『『な、なんだってええ!?!』』

驚愕。一拍の間が開いて、あちこちで弱音を吐き始める生徒たち。

『『申し訳ありませんでしたああああ!?!』』

かと思えば、ルイズ以外の貴族が一斉にジャンピング土下座。何で知ってるんだらう。そして驚異のシンク口率。

あっけに取られていたルイズがただ一人正気を取り戻して、まだ喚く。

「それで！どうしてそのクルデンホルフの軍隊がわたしたちを捕まえるのよ！！わたしたちはトリステイン軍なのよ！？」

「そのトリステインが友軍であるはずの我々に攻撃を加えたからだ。既に王宮には宣戦布告してある。不義には鉄槌を、裏切りには死を」

「そんな、うとう嘘よ！そんなの……むー！むー！！！」

まだ喚くルイズであったが、猿轡かませて強制的に黙らせる。他の生徒たちも、自分の置かれた状況を悟って青くなっていた。

「まあそんな訳で、皆さんにはまあ、お国がデタラメな作戦を取れない程度の人質になっていただきます。まあ、生きて帰れると」

「部隊長！トリステイン艦隊移送準備、ならびに支援艦隊合流完了！」

「ん？うん、確認した。捕虜を連行しろ。抵抗するようなら遠慮なく殺して構わん。どうせ貸した金はもう返ってこないし、再教育の価値もいまいちだからな」

「は！オラ立て！」

「まっつてくれ、死にたくないー！？ぐわ！」

騒いだ一人が槍で殴られた。悲しいだろうけど、これ、戦争なのよね？

ああ、みんなきっちり全力で簀巻きを踏み抜いていった。嫌われてんな、ジュリオ君。

小船に乗って様子を見に行けば、サイトは既に幾つかの致命傷を貰っており、スタボロだった。ちよつと遅くなりすぎたな。だがそれでもサイトは敵司令官へ突撃しようとするので、レビテーシヨンで強引に後退させて、背後に転がす。

「ようサイト。お疲れさん」

「……サン、ガ？」

「ちよつと交代してくれるか？俺の国がトリステインに喧嘩売られてな。仕返しするのにアルピオンアルピオンが邪魔なんだ」

「な、に……？」

流石に張っていた気が抜けたのか、気絶するサイト。俺は杖を一振り、ゴーレム軍団300体を作り上げる。ジムに変えて突撃させ、足止めしてる隙にもうひとつゴーレムを作る。高さ30メートル、幅150メートルはある、巨大な、巨大な楕円型。

あのままジムにやらせてもいいんだけどさ。やっぱり、派手に行きたいだろ？

「来たりて現せ『機兵の系譜』。……『アフサラス？妄執の終着駅』」

土砂の丘にしか見えなかったゴーレムが、緑色に染まる。左右の端には巨大な角。上面には幾らかの棘。そして左右下部にそれぞれ大きな球体を持ち、中央にザクの頭と砲門を有する、巨大なMAが、その場に浮かび上がった。

流星にこのサイズを維持するのはそれなりに大変だが、何、すぐにけりが付く。

「塵となって、消え去るが良い！！」

中央の砲門が光る。瞬間、そこから放たれた巨大な光の柱がアルビオン軍を薙ぎ払い……消した。流石にジャブロー消滅を推定しているだけの事はある。ジムが全部巻き添え食ったが、別に気にしない。ジムだし。無人だし。生き残りなんているわけがない。収束メガ粒子砲の直撃と余波で陸地そのものが大きく削られていて、その場には炭さえ残っていないのだ。陸地の端まで打ち抜いたわけではないが、ロサイスのある区域は折れて落っこちるかもしれないな。

そして、作戦を続行。アプサラスでその場から首都ロンディニウムを狙う。最大出力でも有効射程ぎりぎりの精密射撃だが、だからといって折角シエフィールドを奪って弱体化させたジョゼフにくれてやるのも癪に障る。

集中しろ。集中しろ。ゼロシステムやALICEなども動員して射程や射線環境を計算。射線。クリア！

「てーーーーー！！！」

その瞬間、アルビオンの空が二分され、ロンディニウムは消えてなくなった。

船に戻り、サイトのルーンが消えたのを確認してから治癒を施した。……ただの心停止ですぐに消えてくれたのであまり危険な状態にならなかったのは、一種の救いだと考えていいんだろつか。まあなにせよ、これで計画の背後を突かれる恐れは

「ッ!」

急激な眩暈に襲われて思わず膝を突く。吐き気を抑え、涙をこらえ、蹲った。胸を、いや精神を押しつぶす強烈な感覚。流星に都市ひとつ、数十万を消せばオールドタイプでも潰されかねないのか……？

「主様、主様。お気を確かに」

背後から誰かに抱きしめられる。いや、誰だかなんてはつきりわかる。変化状態のレミイだ。精神崩壊に耐える為に強張っているおれの体を包み込み、抱きしめてくれる。柔らかな感覚が、レミイの慈しみが俺の心を現実に連れ戻してくれる。

「わたしが居ます」

「……ああ、もう、大丈夫だ」

体の力を抜いて仰向けになる。それでも寄り添うレミイに、俺は続けた。

「わかっていた事だ。殺せばその分、心が死ぬ。どれだけ殺し、どれだけ死に、そしていつまで立っていられるか。……それが、俺たちの戦争だ、と」

「そうですね。わたしは誓いました。あなたと生き、あなたと死に、あなたが立つ限り傍にあると」

「ありがとうレミイ。お前は最高だよ」

告白紛いな展開になってしまったが、俺の一言でレミイが飛び上がった。なんだ、どうした？なぜそんなに目を輝かせている？

「ベアトリス様よりもですか!？」

……勘弁してくれ。

## Outside

ガリア王国は首都リュティス、青の宮殿グラン・トロワの一番奥にある一室で、青い髪を頂く美丈夫が特注の箱庭の前で首を捻っていた。タバサことシャルロット・エレヌ・オルレ안의伯父にして当代ガリア王、ジョゼフである。

彼の前に置かれている箱庭はハルケギニアの地図を10メートル四方に詰め込んだようなものであり、現在はアルビオンを模した島で、赤と青の駒の群れが丸い城壁の都市を境に向かい合っていた。

さて、そのジョゼフの箱庭に置かれた一つの女性型人形。これは彼の使い魔シエフィールドと通信する為のマジックアイテムなのだが、その使い魔からの連絡が途絶えてしまっているのである。これでは遠くアルビオンで行われているトリステイン・ゲルマニア連合軍対神聖アルビオン共和国の戦況を聞き届けられず、動かすべき戦いがわからなくなってしまう。そのせいで彼は動いているはずの戦況がわからなく、動かすべき駒やその作戦に頭を悩ませているのだった。

「余が、これほど迷うとは……」

つい、呟いてしまう。そういえば、このアルビオンに策謀の手をつけてから、どうにもうまくいかないことが多かった気がする。アルビオンの王家は滅ぼしたのに始祖の遺産は手に入らず、義理の妹と姪はどこかへ雲隠れ。それもまた一興、僅かな読み違いが呼んだ誤差に過ぎないと歯牙にもかけなかったのだが……

ジョゼフの視線が箱庭の中、『港町』から少し離れた所に置かれたまま、ずっと動かなかった一つの駒を見る。青軍と赤軍の戦場にあつて、唯一つ漆黒に塗られた中型船の駒。自分が持つ全ての情報網を持つても何一つ掴む事が出来なかった、底の見えない小さな新興勢力。

もし、この駒が自分が用意した『作戦』を、『演劇』を変えてしまつていたら……？

「陛下。艦隊司令より連絡が入りました。ご命令にあつた“敵”は、既に消滅していた、との事です」

思考が固まりつつあつたところに飛び込んできた報告。ジョゼフは頬が綻ぶのを止められなかった。

「ふふ、あははははははは！！」

「へ、陛下？」

「そうか、そうかそういうことか！ああっはっはっは！これは愉快だ！ああ愉快だとも！」

目を丸くする小姓の前でひとしきり笑うと、ジョゼフはすぐに大臣を呼ぶ。すぐに大臣はやつてきた。

「すぐに小娘へ使いを出せ。赴き、見極めて来いとな」

「ど、どちらへでしょうか？」

「決まっている」

実の娘を小娘呼びわりするジョゼフは箱庭に手を伸ばし、漆黒の駒を摘み上げて大臣に見せ付ける。

「クルデンホルフ、ミール行政府だ」

同じ頃、友軍を全滅させながら自分たちを攻撃しなかった事に不審を抱いたゲルマニア皇帝アルブレヒト3世もまた、クルデンホルフへの使者を立てようとしていた……

S i d e o u t



## 第14話 / 破滅の光と壊れた王様（後書き）

七万完全デリートに加えてロンディニウム消去。……主人公はソーラ・レイも真つ青の大量殺人者になりました。

「ナンテコッタ」

一人殺せば人殺し、十人殺せば殺人鬼、百人殺せば英雄だ。などといいますが、首都の人口を適当に見積もって6、70万くらい？をたった一人で殺したこの主人公は、何になるんでしょうね？

「知るか！なんか最後にフラグっぽいのが立ってるし！」

これはシェフィールド殺しのツケってとこかな。まあ、これが側室フラグか戦争フラグかはまだわからないのだが。……これ以上側室増やしたらとんでもない空気量産になってしまうかもしれん。

「それでもラブ成分が欲しい、全面制圧じゃなくて均衡とれてる終わりが見たい、という読者もいらっしやる。この辺は頂くご感想を参考に進めるしかないな。前回言ってたトリスティンの二人もまだ処遇決まってるないんだろ？」

いぐざくとりい

「とりあえず死ね」

あぶない！何でも溶かしそうな液だーッ！！マツパは嫌じゃー！！

さてさて、次回は……次回は……うん、外交のお話？

「はつきりしてません。でも次の戦争の相手はロマリアです。ガリア、ゲルマニアと敵対するかが次回決まる、かも？」

ご意見、ご感想、各種誤りのご指摘などお待ちしております。なんでもいいので好き放題言ってみてください。インスピレーションを刺激されたご意見は高確率で反映されます。多分きつと。

「……この作品は三割の思いつきと二割の構想と五割のご声援で出ています」

ではまた次回！

## 第15話／連戦回避と滅びの足音（前書き）

戦争編に入ってからどうにも目まぐるしくなってしまうています。  
ご容赦ください。

## 第15話 / 連戦回避と滅びの足音

策謀、というか子供騙しの罫でトリスティンを釣ってから、俺は途端にあちらこちら飛び回る羽目になった。船5隻による一個大隊を割いた攻撃部隊に大まかな指示を出し、首脳陣を失って政治が麻痺したアルビオンの民衆を纏め上げ、敵司令官の処刑を見届け、レコン・キスタ残党や他国の間諜を襲撃して回る。

今は『もういいからお前がやれ』と大公の冠だけ贈りつけて隠居を決め込んでしまった大公と義父を何とか呼び戻そうと説得しているのだが、どうも無理っぽい。

「前線飛び回ってないと気が済まない男に国家元首の器はありませんよ！」

「何を言う。聡明で、決断力があり、信頼の厚い部下に恵まれる。

何より、先頭に立って敵を排除できるその心性こそ王の器であろう。

それに、今もミームルの王のようなものではないか」

「痛いところを……大公として孫が見たいと言ったのは誰ですか！」

「いや、よくよく考えたら王座のままではその子を構ってやれんではないか？」

「親として構うべきは俺なのでは!？」

敗色が濃いです。駄目だこのジジイども。あきらめて俺が王になるしかないのか？

ベアトリスタたちに相談しても、やっぱりミームルを引き合いに出されて推薦されてしまう。後、子供が欲しいと強請られた。

子供はともかく、仕方がないので最後の砦、無記名の信任投票を行

った。行っただが……

クルデンホルフ、主要官僚 総勢17名

信任 17票

不信任 0票

なんで……城に常駐しない大量殺人者が国家元首で、不安はないのか！？

まさかこんな結果がでるとは思わなかったが、言い出したことで負けてしまった以上、あきらめて冠をもらう事にする。だが、ロマリアに認証されているそんな冠は、即時破壊である！！こう、足でぐしゃっと。

「始祖の血なんぞ知った事か。ましてや俺たちはトリステインの王権を否定した。つまり、俺たちはもうトリステインの諸侯ではない。

クルデンホルフは、トリステインからもブリミル教からも完全に独立した国家となった！今このときより、我らクルデンホルフは王国である！」

この宣言が迎えられたことで、開戦から僅か二日、俺は王となった。早いと思うかもしれないが、クルデンホルフの政治決定なんてそんなもんだ。土地持ちの貴族が大公家しかいないから主だった諸侯はみんな城かミールルの行政府にいるし、無駄な荷物や行列を作らせない列車移動だからすぐに集合できる。集合さえすれば、会議が迷走しない限り即断即決だ。

戦場の展開は、見事に予想通り。うちの軍に攻め立てられたトリステイン貴族たちは次々に降伏を宣言。だが汚職と虚栄に塗れたエセ

貴族に用はないので資産没収の上で処刑していく。保身の為に降伏した貴族たちは裏切られたと喚き散らす、当然無視だ。

「始祖を恐れぬ悪魔め！天罰を受けるが良い！」

「ああ、悪魔で良いよ。悪魔らしく対応するだけだから」

柄の端に大きな鈴の付いた剣で紐を切る。支えを失った重厚な刃が落とされ、赤い華が咲いた。この戦争に関しては死刑執行も自分でやると決めたのだ。敵殺しの罪は全て俺が負う。そのために、他人に最後のボタンを押させる事はない。

重いものが落ちる音と共に、周囲が赤く染まった。見た目派手だが、ギロチンと縊首刑（落つことすタイプの絞首刑）は最も慈悲深い死刑だとか聞いたことがある。苦痛を感じる暇もなく死ぬからだそう。

敵味方からギロチンの鈴の音、なんて呼ばれる日も近いだろう。既にこの執行用広場は『罵りの広場』なんて呼ばれてることだし。

あと……誰も彼も同じ様なこと言うもんだから、言わなきゃいけないような気がしたんだ。今は反省している。

あ、ジュリオだけは別。目隠しと耳栓つけて水牢に放り込んで、秘薬で強制的に半殺しを維持してある。下手に開放して主人の目や耳になる能力に目覚められても困るし、殺して別の人間がヴィットーリオの使い魔になっても（下手したらミヨズニトニルンが出て来る可能性もあるので）やっぱり面倒だから。そういう意味じゃシエフイールドもそうなんだが、ミヨズニトニルン能力の特性上捕まえておくのが危険すぎたので、処分していた。次の使い魔がシエフイールドほどジョゼフに従順になるかどうかもわからないしな。

ヴィンダールヴの能力は動物の制御だが、『妖怪』であるレミイは

従えられないらしい。

ちなみに、ジュリオを拘束した事でコツパゲが持つてる火のルビーがロマリアに渡らず、どっかの教皇は今現在虚無魔法が使えない！多分他の奴をまわすと思うんだが、ジュリオじゃなければ俺の搜索網に簡単に引つかかるから、やっぱり使えないだろう。

数日してやってきたゲルマニアの使者は聞いた事もないんたらという貴族だった。単純に『敵対する意思の有無』を確認にきただけらしく、別に世界征服がしたいわけじゃない俺としては『邪魔しなければ邪魔しない』と返事をした。

元々国力が高くてままとまりがないゲルマニアは、少なくとも現皇帝アルブレヒト三世が注力している中央集権が確立するまで、俺が手を貸す可能性込みでもあと50年は脅威になりえない。技術提供あたりで平穩にやっていけるだろうと考えている。

俺が嫌いなのはトリステインとロマリアで、自国クルデンホルフ以外はどうなろうと知った事ではない。いや、ロマリアだけは完全に焼き払わないと気が済まないか。

さて、次のが問題である。ゲルマニアの使者を帰した翌日、別の国から要人が来たのだ。そう、ガリアである。VIPの名前はイザベラ。なぜか魔法の才がないジョゼフの娘で、シャルロットの従姉。結構見栄えのする体を持って……げふん、げふん。

「お目にかかれて光栄ですわ、陛下」

「遠路はるばる、ようこそクルデンホルフへ。歓迎する」

「ありがとうございます」

「貴女の血族も此方に根を下ろしているから、後ほど紹介しよう」

瞬間、王女の顔が凍りついた。そりゃそうだろう。国外に居る可能性がある彼女の血族、すなわちガリア王家といえば、従妹とその母しか居ないのだから。それでもすくに対外的な笑顔を浮かべて「楽しみですわ」と言つてのけた。……魔法の才能の代わりに、政治家としての才能に恵まれてるんだな、と思つた俺であつた。

正直、王族としてはそつちのほうが正しい気がする。先代のガリア王もそれが解つてたからジョゼフを次の王に選んだんじゃないか？

俺はその後、王女の要請を受けてミーミル……ニーズヘッグは機密たつぷりなのでフギンとムニンを案内した。やはり列車に目を丸くして、二つの町の発展具合に頭を抱えていた。

俺の感想？汽笛に怯えた声が可愛かつた、とだけ言つておこう。前世知識に基づいた概念無しにコピーされるようなものでもないから見られたことにどうこう言う気はないよ。

王城に戻つたら彼女をシャルロットとオルレアン公夫人に任せ、その日は職務に戻つた。公夫人はマチルダがきつちり連れてきてくれた。感謝してもし足りない。公夫人の精神治療が済んだとき、タバサは本名であるシャルロットを名乗る事にしていた。

さて、その夜。政務を終えて俺が自室に戻ると、シャルロットと、なぜかイザベラ王女の姿があつた。しかも、ベッド傍に固定された椅子に、下着姿で縛り付けられているのである。そむけた顔を真っ赤にしてぶつぶつと何か呟いていた。



シャルロットも下着姿だが、俺のベッドに忍び込む女は大体下着か全裸だから、そんなに不思議じゃない。

「あー、何が、どうなっている？」

「仕返し」

「……エレヌ、許して……」

「駄目。見て」

薄く笑って俺に抱きつく自分を見せ付けるシャルロット。王女がミドルネームで呼んでるって事は、和解自体は成立していると思うのだが……どうしてこうなった？

「手は出さない。見せるだけ」

「お、おいシャルロット!？」

まだ混乱しているせいで抵抗できないままベッドに押し倒される俺。

「エレヌう……わたし、もお」

「あふ……だめ。見る、だけ、あつ」

シャルロットの『ダンス』はイザベラ王女が涙流して嘆願するまで続いた、とき。

翌朝イザベラ王女が真っ赤になりながら挨拶して帰っていったので、ベアトリスやマチルダに『また増えたのか』と詰問されたのは言うまでもない。

勿論、ノーコメントを貫いたさ。

まあ、とりあえずそんな事は置いて、だ。

始祖の血を否定し王を名乗った事は決定的なはずだ。ロマリアが近く俺を異端の悪魔に認定し、聖戦を発動するだろう。

ジョゼフがヴィットーリオに同調するとは思えないが、全てを滅ぼしたがるジョゼフが聖戦という破滅に便乗してくる可能性も、僅かにはある。

俺の戦力を間近で見たゲルマニアは複雑だな。今は外より中、のアルブレヒト三世は動かないかもしれないが、今回の撤退戦で俺の戦力を測り違えた諸侯は牙をむくかもしれない。

一番の問題はトリステインの残存勢力だ。発動前に殲滅できればそれで済むが、間に合わなければ自爆覚悟で特攻してくる事もあるだろう。やはり、最速で決着をつける必要がある。それも、連中が立ち直れないほど圧倒的に。

つまり、王家の血筋、アンリエッタ、マザリーニ、ラ・ヴァリエール、そして最有力貴族。これら全てを『殺す』しかない。

攻撃艦隊がトリスタニアの王宮を必中射程に収めた頃。

焼け落ちるラ・ヴァリエールの屋敷を視界に納めながら、俺はそう確信していた。

「貴様はここで排除する。烈風カリン」

「娘は……渡しません！」

カリーヌ夫人が放つ『エア・スピア』を『機兵の系譜』で召喚したMk-2のシールドで難なく防御し、次の詠唱に移るより早く打

突。だが夫人は倒れずに次の魔法を詠唱に入る。折れた肋骨が肺に刺さったはずなんだが、まだ声がでるのか。

当然それより早く振りぬかれたビームサーベルを回避する為に詠唱が中断されてしまい、接近戦で不利と判断した夫人は距離をとろうとして……躊躇した。

彼女の後ろには一台の馬車。中には二人の娘が入っている。距離をとって逆襲するより早く、馬車が襲われることは明白。

そう考えたのだろう。夫人がその場での反撃を選び……実行するより早く、彼女の胸部をビームサーベルが切り裂いていた。

夫人なら屋敷の中で心中するかと思っただが……どれほど誇りを語ろうと、所詮は人の親だったという事か？王宮にしか報せてないから、ルイズが戦場でつかまった事も知らないだろう。おそらく、一人残しておくのが辛かったのではないだろうか。

錬金で簡易な墓を作って夫人を吊ってから馬車を調べる。中には予想通り公爵家の二人の娘が入っていた。強襲に対応する為身一つで逃げ出したらしく、そのほかには大したものが見当たらなかった。

「クルデンホルフだ。あなた方を拘束する」

いつぞや俺から殺気を引き出した長女はトラウマにでもなっているのか怯えて蹲り、ルイズと同じピンクブロードでルイズと違う母性に溢れた次女は此方をまっすぐ見据えていた。

「あなたは、誰？」

「俺は……そうだな、悪魔だ」  
「悲しいのね……」

まるで成立しない会話をしながら、まだこっちを見据えるカトレア。母を殺した相手に哀れむような視線を向けるこの女が、俺の目にはあまりにも不気味に映っていた。

Outside

「女王陛下！大変です、クルデンホルフの軍勢がトリスタニア周囲500マイルに展開、包囲！砲戦準備に入っています！！」

その報告が飛び込んだとき、トリステイン王宮の謁見の間では『クルデンホルフの宣戦布告に対し、どのように対応するか』という会議をしている最中だった。常備され、十分な訓練を積んだクルデンホルフ軍の迅速な攻め手と非常識なほど隠密性に富んだ艦隊運営によって、自分の土地がとくに落ちているという事実すら知らずに喉元に必殺の剣が突きつけられたことにも気付かずに喧々諤々の外的な会議をしていたのだ。

結果、最早首都トリスタニア以外にトリステインの土地はなく、抵抗すべき王軍も諸侯軍もなく、後は滅びの砲弾を待つだけとなってしまったのである。

「……なんということだ」

「ま、まさか、そんな！わたしの領地が！？」

「う、うそだ！そんな距離に近づくまで気付かない等ということがあるものか！」

「本当です！空を見てください！！あれは間違いなくクルデンホルフ軍の軍艦です！」

大慌てでバルコニーに殺到するトリステインの面々。そこには確かに、この王宮へ砲門を向けたクルデンホルフ軍が居座っていた。誰かが悲鳴を上げるのと同時に、その砲の一つが火を噴いた。

たった一発の砲弾が正確に王宮の塔一つを破壊した事で、官僚たちの混乱が頂点に達する。徹底抗戦を謳い出すもの、降伏を迫るもの、我先にと逃げ出すもの……最早会議の様相すら呈していなかった。そこにあるのはパニックであり、現実逃避。

そんな中で表面上だけでも平静を保っていたのはたった二人、マザリーニ枢機卿とラ・ヴァリエール公爵のみであった。しかし内心は無数の困惑と打つべき手段の模索に埋められており、周囲を見る余裕はない。

女王アンリエッタは目の前に現れた滅亡に絶望してその場に座り込んでしまっていて、アニエスはそんなアンリエッタを落ち着かせるのに忙しい。

貴族の軽率な行動が誤解を生み、誤解が生んだ戦いへの対処は何一つ出来ず、滅びていく。

「陛下……白旗を、掲げましょう。もとより勝ち得る戦いではなかったのです」

「それはならんぞ枢機卿。陛下はどうなる、王国は！」

「王国がどうなる、ですと？かの大名家の支援あってこそ王国の体面が守られていたのですぞ！そのクルデンホルフを自分たちから切

り離しておいて、どうなるもこうなるもありますまい！」

「では、せめて陛下をどこかへ！」

「完全に包囲されたこのトリスタニアから、どうやって逃げ延びよとおっしゃるのか。仮にグリフォン隊とマンティコア隊を全て動員したとしても、あの艦砲射撃で全滅するのが目に見えておりますぞ」

腹心二人の口論を前に、アンリエッタはアニエスに支えられてようやく立った。顔は青ざめているが、瞳に宿る力はタルブへと飛び出していくとき同様の力強い光だった。

「降伏せねば、あの砲撃がトリスタニア全域を覆い尽くすのでしようっ？」

「陛下……はい、おそらくは。塔を破壊した一撃は、最後通牒の代わりなのでしよう」

「ならばわたくしは、女王として民を守らねばなりませんね。白旗を掲げなさい。もう一度、今度は直接、公子と交渉します」

王宮の最も高い塔へ白旗が掲げられ、トリステインはクルデンホルフに屈した。

S i d e o u t

## 第15話 / 連戦回避と滅びの足音（後書き）

カリーヌ夫人、退場ー。

「その前にシャルロットとイザベラのキャラクタ崩壊（？）を謝罪すべきだと思う」

言うな。あれは、どっちかというとなかった事にしたいんだ。

「なら消せよ!?!」

それは嫌。ところで、ジョゼフは弟への恨みが無くなって正気を取り戻せば仲良くなれると思うか？

「何だよ急に。出来なくはないと思うが、シエフィールド殺しちまつたぞ?」

いや、基本ジョゼフは人を愛さないからな。優秀な手駒が無くなった位にしか考えてないんじゃないかと。謀略戦は具体的な表記しづらいし?」

「本音が混ざった!」

ゲルマニアは友好的中立関係で行きたいと思ってる。……ロマリア戦で主人公が退場にならなければ。

「死亡フラグ!?!」

今回はトリスティンの処断と、それが発端でサイトと対立する話。

悪魔の所業に憤慨する彼は主人公の敵になるのか、不満を抱えつつも味方で居続けるのか。

「ちょっとご期待ください。ご意見、ご感想、諸々のご指摘などお待ちしています」

お気に入り登録600件、総合ユニーク50000人突破……ナニコレ？

「本当にありがとうございます！事態を把握してなくて感謝が遅れたボケ作者にはUG細胞を移植して感謝力を強化しておきますので、どうか平にご容赦を！」

え？何？何？主人公ちょっとま……うぎゃー……ッ！！



**第16話／王国の終焉と消えた引き金（前書き）**

会話成分、多めです。

## 第16話 / 王国の終焉と消えた引き金

俺とアンリエッタの会談には完全制圧されたトリステイン王宮の会議室が使われた。

何もない台座や宝飾が剥ぎ取られた燭台……かつては豪華な装飾が施されていたのだろうという事がはっきりわかるほど、そこは不自然に貧相だった。アルビオン上陸戦中に戦費捻出の為に売り払ったのであろう事は明白だ。

既に勝敗が決した上での降伏会談である為、損害の照らし合わせなどはしない。席に着いたらアンリエッタ側が用件を言い出すのを待つ。

ちなみにクルデンホルフ側で席についているのは俺一人。制圧したとは言え国家元首が敵の本拠地に直接赴いて会談するのは危険だと言い出す部下も居たが、事後処理で忙しい内務の大臣をこの無駄な場に割きたくはないし、外務担当の大臣にはガリア・ゲルマニア方面の調整を頼んである。アンリエッタの要求でもあるし、変り種の王は基礎方針を伝えたら後は暇になるので、丁度いいと判断した。俺はたとえ就寝中を襲われてもメイジ相手に負けたりはしない。

トリステイン側はアンリエッタとマザリーニである。アンリエッタの後ろにはアニエスが控えているが、剣も銃も全て取り上げられている。メイジから杖も、同様であった。ラ・ヴァリエール公爵は軍門の要人である為、拘束されている。おそらく、そのままご退場願うことになるだろう。

「まず……この席を用意していただきました事、感謝いたします。このたびは」

「中身のない前置きは結構。『不幸な誤解』等という腐った文言も聞きたくはない」

「ッ！」

挨拶から断ち切られたアンリエッタが固まる。この展開を予想していたのだからマザリーニは無反応、アニエスは少し歯を食いしばるような表情を見せ、しかしすぐに平静を装う。

「余はトリステイン王国の殲滅を決定し、こうして首都トリスタニアを落とした。後は貴公らを処断するのみ。故国の女王。事ここに及んで何を望む？」

「恐れながら、陛下。事の発端となった司令部構成者の選定、女王陛下には関わりなき事。どうか、この老骨の首で事を収めていただきたく」

「なりません枢機卿！それはわたくしが……！」

マザリーニの発言を自らひっくり返そうとするアンリエッタ。その様子に俺はもう完全に呆れかえった。コイツ、どれだけ馬鹿なんだ？というか、何がしたい？

「話にならないな、枢機卿。自分たちの要求さえ纏まらぬまま席を設けるなどと、余には思いもよらなかった」

「も、申し訳なきこと……」

「陛下……」

マザリーニは恐縮し、アニエスがため息をつく。そうだよな、駄目だよなこいつ。今までにできた事は白旗あげて町を壊さずに済ませた、ってただけぞ？

アンリエッタは自分の失態に小さく丸くなるが、もう遅い。こいつが場を荒らしたから俺にもどう収めたらいいか良くわからなくなっってしまった。

本当に、どうすりゃいいんだ？聖戦に乗っかって御家復興なんて言

い出されたら困るから、アンリエッタとマリアンヌ皇太后には隠れてもらわなきゃ困る。枢機卿には為政者としての責を負わせなければならぬし、諸悪の根源である貴族連中は皆殺しにしなければ禍根を残す。平民出身で苦しみを知っている銃士隊くらいなら、単純な女王や故国への思いで暴走するようなことはないかもしれないが……

つまり、この席で俺が出せる結論は、トリステインの根幹を成す連中の皆殺し、ただそれだけ。アンリエッタが会談を持ちかけてきたときには少しは助かる命があるかと思っただが……どうしてこんな展開になっちまっただ？

「貴様らの命も含め、全て手中に収めた。我らに今更改まって望むものなど、何も無い。この席に着いたのも、余にとってはほんの暇つぶしよ」

聖戦に対する後顧の憂いを絶つために、トリステインの王族貴族とロマリアの息がかかった連中は全て処刑しなけりゃならぬ。既に占領した各地の領主一族と生臭坊主は殲滅済み。信仰の強要が反乱の芽を育てる事は前世の歴史が証明しているので、平民たちが持っていた宗教関連の品は確認するだけで押収や破壊はしていない。とはいえ、それらの確認数はトリステイン全土で一桁だった。教会の嫌われっぷりがわかるというものだ。

「なにとぞ、なにとぞ我等が女王陛下のお命ばかりは……！」

椅子から立ち上がり、テーブルの上に両手をついて深々と頭を下げるマザリーニ。その姿に、俺は実に不思議な気分になった。

それというのも、ロマリア出身で『鳥の骨』なんて揶揄され疎まれていたマザリーニがアンリエッタのために全ての責任を自分の首で収めようとするのに、トリステインの諸侯は命乞いの為にアンリエ

ツタを差し出すと平気で言っただけにいたのだ。勿論、そんな事される意味も理由も必要も無いので全て処刑したが。

「近く、教皇庁が余に対し聖戦を発動するであろう」

「陛下、下？」

そんなマザリーニを見てみると、自然と口が動いてしまった。アンリエッタやアニエスも呆然としているが、俺が誰より困惑していた。言っただけでどうする。いずれにしても殺さねばならない相手だぞ！

「復興を謳う反逆の芽は、確実に摘み取らねばならない。余は、必ず……必ず教皇庁を破壊する。ロマリア全土を焼き払う。このハルケギニアを始祖の呪縛から解き放つ」

「陛下……どうか、どうか姫様のお命だけは……！」

「それでもトリステインのために首を洗うか、マザリーニ。かつては次期教皇とまで呼ばれたその首を！」

「姫様は先王没してより長く見守り、支えてきた我が半生。その御為ならばこの骨の首、いくらでも差し出しましょうぞ」

全く……どこまで馬鹿揃いなら気が済むんだ、トリステイン！

「……捕える。マザリーニは獄へ、アンリエッタは『ヘルメス』に幽閉、明後日に城へ連行する。明日正午、太后と捕えてある諸侯、そしてこの枢機卿を処刑。それをもって、トリスタニアの陥落を認める」

「了解！……ご同行願います」

一応の縄を打たれ、退場するマザリーニ。退場しながらも涙を流して礼を言う姿は、当分忘れられそうに無い。アンリエッタは何も出

来ない自分に失意を抱いたまま。アニエスは何やら複雑そうな面持ちだった。

翌日正午。50を超える貴族たちを全て絞首刑に処す。見苦しく泣き喚く取り巻き貴族から殺していき、ただじつと執行を待っていたラ・ヴァリエール公爵とマザリー二枢機卿が最後になった。覚悟を決めて王国の為に死ぬ二人には、やはり聞かねばならない。

「まだ何か、言い残す事はあるか？」

「陛下をお救い頂けただけで充分です」

「公爵は」

「……娘たちはどうなりました」

「拘束中だ。夫人はこの手で殺した。母として立派な最後だった」

「そうですか。ではお伝えください。わたしたちを忘れてその国で生まれ変われ、と。」

「伝えよう。さらばだ、貴きものども」

トリステインに忠を尽くした二人の男が死に、トリステイン王国は完全に消滅した。

不本意ではあるが、トリステイン復興を掲げるに足る神輿が四つも残ってしまったことになる。マザリーニやラ・ヴァリエール夫妻に抱く敬意のせいで、これらを処分する妥当な理由が思い浮かばない。メイジの家柄に生まれたトリステイン貴族は派閥も思想も関係なく皆殺しにしたが、ガリアのオルレアン派のように地下深くに潜っていつか反乱騒ぎを起こすだろう事は想像に難くない。つまり俺は、何時にセットされたかわからない时限爆弾としてこのトリスタニアを抱え込む事になるのだ。

……いいだろう。覚悟を決めよう。虐殺と独裁の王が革命の種を内包する。それもまた歴史の一部だ。俺は背中から刺されて死ぬ。立ちほだかるものは全てなぎ払い、逆らうものは皆殺しにし、その怨恨で倒れよう。その呪詛で死のう。それまでは全力で守り抜き、前を見て走り続ければいい。

更にその二日後。トリステインの統合に伴ってクルデンホルフの首都がニーズヘッグに遷都され、俺は王城に名を変えた行政府の執務室でサイトと向き合っていた。サイトはある罪を犯して拘束され、この対話は裁判に近い。人払いをした上での個人的な話でもあるが、

「なぜ逃がしたんだ？」

「このままじゃ、あんたがルイズを処刑しちまうと思った」

そう、俺が留守にしている間にサイトがルイズを逃がしてしまったのだ。貴族の生活に慣れすぎているルイズが捕虜になってから体調を崩したというのである程度の自由を認めていたのだが、それを逆手にとつて見張りを昏倒させ、追撃隊を足止めして逃がしたらしい。

「ではなぜ、二人で逃げなかった？ガンダールヴの足なら追っ手を振り切る事も出来たかも知れんのに」

「足が速いだけじゃあんたから逃げられない。隠れないと。だから一人のほうがいいんだ」

「……よく見てるじゃないか。だが、ミステイクだったな」

「え？」

キョトンとするサイトに、俺は一つため息を付いた。そうか、コイツはこっちの政治的な事はあまり勉強しなかったんだな。

「ガリアの南に、ロマリアという国がある。聞いたことないか？」

「ああ、ジュリオの国だな？」

「そうだ。ブリミル教の本拠であり、地球で言うヴァチカン市国の大きな奴だと思えばいい」

「ヴァチカン……」

「実態も中世の教皇庁のイメージに近い。異端審問や魔女裁判をやつてた頃だ。宗教が国家権力と癒着して、少しでも都合の悪いものは悪魔と呼んで滅ぼし、あちこちから不当に金銭を搾取している」

「そのロマリアが、どうしたって言うんだ？」

サイトが生唾飲み込み、喉を鳴らす。頭の中で『悪い予感』が組み立てられてきたか。

「俺は反ブリミル教を掲げている。いや、反ロマリアといったほうが正確だな。人の心の拠り所として信仰は自由であるべきだが、信仰が権力を持つてはいけないと思ってる。お前もそうだろ？日本人」

「ああ」

「だが奴ら聖職者や貴族にとってブリミル教は自分たちを守る強大な外殻であり、最強の武器だ。俺みたいな奴が力を持って教会の権威が落ちちまつたら、その最強が崩れて好き放題できなくなる。だから、奴らは絶対に俺を滅ぼしに来る」

「まだ、戦争するのか」

「そうだ。それも今度のは完全に相手を殺し尽くすまで終わらない殺戮戦だ。王も臣下も国民も全て殺さなければ終わらない。奴らの戦争は宗教戦争だからな。テロみたいな事も起こるかもしれない」

「テロ……！」



「宗教つてのは中心に行けば行くほどビジネスライクだが、末端はブリミル万歳の一言で自爆しかねない狂信者の集団だ。……そろそろ、この話とルイズの結びつきが見えてきたんじゃないか？」

真剣に考えるサイト。その答えはすぐに出る。

「……虚無、か!？」

「そつだ。始祖の系統、虚無。奴らにとってこれ以上掲げやすいお題目はない。おそらく、天の使いとか何とか祀り上げられて戦争の引き金にさせられる。そうなれば後は一直線だ。殺し損ねたトリステイン貴族も、トリステイン復興をかけて『始祖の血脈』という神輿を担ぐだろう。サイト、生き延びる為に逃げるのなら、お前はルイズの隣に居て奴らがあの馬鹿を利用しようとするのを防ぐべきだったんだ。お前が逃がした大事な女は、俺が確認した中で一番危険な次の戦争の火種だったんだから！」

「そんな……俺は、ただ！」

「もう何を言っても遅すぎる。何かの方法で俺の警備網を運良く抜け出していたりしたら、確実にロマリアの人間が接触しているはずだ。国境を越えていたら自分で教会に駆け込んでるかも知れん。そうなれば確実にロマリアが聖戦を発動する。俺たち全てを滅ぼし、砂漠のエルフを下して『聖地』とか言うのを奪還するまで延々と続く宗教戦争だ」

「俺は……俺は……！」

「……サイト、最後にもう一つ、絶望のお知らせだ。俺はラ・ヴァリエール公爵との約定で、少なくともおとなしく捕虜で居る間はルイズを殺せなかった」

「……！」

サイトが膝を突き、崩れ落ちる。自分がやった事が完全に、致命的なほど裏目に出てしまったのだ。無理もない。「俺がルイズを殺し

ちまう」等と呟き始めている。

「ルイズを死なせない方法はただ一つ。聖戦発動までにルイズをこつちが確保する事。もしロマリアとルイズが結託して聖戦を発動したら手遅れだ。俺はクルデンホルフに降りかかる火の粉の首魁として、ルイズを確実に討たねばならなくなる」

「サンガ！ルイズを助けてくれ！高慢ちきで馬鹿で横暴でペタンコでちんちくりんで馬鹿だけど、あれでも俺が好きな女なんだ！」

「馬鹿が二回……まあいい。どこへ逃げたか、知ってるな？」

「アイツが嘘をついてなけりゃ、一度自分の家に帰るはずだ。風竜を借りるとか言ってたから」

「ラ・ヴァリエール？よくまあそんなところまで逃げる気になるもんだ……いや、他に頼る相手を知らないだけか。とっくに焼けてるとも知らないで」

すぐに搜索隊を編成し、サイトにも探し回らせたが、ルイズ発見の報はとうとう入らなかった。

## 第16話／王国の終焉と消えた引き金（後書き）

ルイズはどこへ消えたのか。聖戦は発動されるのか。そしてサイトの運命やいかに！

「ようやくトリスティン編が収拾付いたか？しかしルイズ、どうやって警備網を抜け出したんだろう」

さあな。イリユージョンに探知機器類まで狂わせる効果があったのかも知れん。

「何でもありだな、虚無」

聖戦まで二、三話はさみたいと思います。ガリアフラグに走ろうかと。

「アンリエッタのルビーと確保したオルゴールでテファに『記録』を使わせるのか？」

やろうかやるまいか考え中。実際主人公とジョゼフは直接敵対したわけじゃないから、こう、ネトゲで見つけた好敵手みたいな存在なのかも知れん。

「たとえばいまいち良くわからん」

とりあえず、ご期待に何とか添えるくらいにはがんばります。ではまた次回！

「ご意見、ご感想、各種ご指摘、遠慮なくお寄せください」

10/05/23

割り込みでベアトリス編をアップデートしました。あまり良い出来  
ではありませんが、それでも興味のある方はどうぞ。

第17話／解ける呪縛と結ばれる絆（前書き）

ガリア編一色です。だいぶ強引な展開ですが、ご了承ください。

## 第17話 / 解ける呪縛と結ばれる絆

「さて、どうしたものか……」

ガリアはリュティス、グラン・トロワの入室。それもジョゼフの私室に、今俺は居る。目の前にはハルケギニアを模した箱庭があり、数十の人形たちがそこにちりばめられていた。箱庭の先には衝立があり、視線を横に振ればテファ、反対側にイザベラ王女。衝立の向こうにはガリア王ジョゼフが居るはずだ。

アンリエッタから手に入れた風のルビーをテファに渡したところ、なぜか真っ先に『記録』を覚えたので、ご都合主義万歳といわんばかりにジョゼフを懐柔しに来ていた。これから始まる対ロマリア戦のためにも、脇腹を突っつかれるような真似はされたくないからな。シャルロットは置いてきたが、ジョゼフを赦せと言い含めてある。懐柔がすんだら再会させるとしよう。

ジョゼフはジョゼフで政治には興味がなさそうに振舞っていたが、アルビオンの戦いを引つ掻き回した俺に興味を持っていたらしく、何か話す前に一勝負、とこの箱庭を持ち出したのだ。

そしてこの箱庭……実際に見てみると、前世のファミンウォーズを彷彿とさせる。ジョゼフから一通りのルールを聞いた後、俺が若干の追加修正を持ちかけ、より仮想戦略ゲームらしくなっていた。

指し手は平等に持つ『資金』を振り分けてそれぞれの駒を選択、軍勢を箱庭の陣地に配備する。そして順番に部隊の移動、拠点の構築、戦闘などをサイコロで判定しながらゲームを進め、相手の本陣を占領するか相手を全滅させれば勝ち。

ここまでがジヨゼフが用意していたルール。俺は更に、以下の要素を追加した。

まず、現存の箱庭を参考用の壁掛けにしてしまい、その中から選んだ地区をコピーした25マス四方の小さな箱庭を2セット用意。衝立でお互いを隠し、相手の軍勢が『索敵範囲』に入るまで確認できないようにする。双方の駒の位置を全て把握できるのは判定者のみ駒一つ一つの能力や相性を細かく設定。サイによる判定をより明確にする。尚、サイは全て判定者が振る。

それぞれの地形や天候に応じた補正を用意。森の中で隠れやすいとか、山が邪魔で先が見えないとか。

そして最後に、『命令が完遂されたか否か』という判定を追加。つまり、どんでん返し『大失敗』<sup>ファンブル</sup>を用意した！

まあ、要はどっかの海戦ゲームみたいな感じに仕立て上げたというだけだが。遊び好きのジヨゼフもチェスの延長としてこれを作っていたので、『相手が見えない』というリアリティには随分と驚き、目を輝かせていた。

そしておよそ30分後。俺は確実に敗北へと追いやられていた。部隊は半分にまで減り、同等の損害を与えつつも戦線はどんどん押し寄せている。サイコロの判定はほぼ五分。つまり純粋に戦略で負け

ているのだ。

「これだけの戦略眼、先見の明、応用利かせりや為政者として一流の素質だと思うぞ……これでどうだ」

「14 - 13 銃士、15 - 12 竜騎士を攻撃。判定します……判定結果、『的中』。敵竜騎兵に六点の損害。撃破ですね」

俺が駒を動かし、攻撃の意思を判定者、イザベラ王女に伝え、王女がサイコロを振って判定する。動かしたのは森の中の赤軍『銃士』部隊。攻撃の対象は上空を飛ぶジヨゼフの青軍『竜騎士』部隊だ。棋譜係を命じられたテファが王女の伝える判定をせつせと紙に記録し、王女共々は衝立の向こうに居るジヨゼフに判定の結果を告げに行く。

「……お父様、三番の竜騎兵が撃破されました」

「なぬっ！？待て、こいつの耐久力はまだ五点！」

「『銃士』の攻撃が相性と『的中』判定で通常の3倍の損害を受けましたので」

「なんだと？ええい忌々しい平民部隊め！これで三回目ではないか！次こそ見抜いて打ち倒してくれる！」

衝立越しに聞こえるジヨゼフの楽しげな悲鳴。お気に召したようで何よりだ。

少し待つと王女が戻ってきて、青軍の駒をひとつ動かす。

「サンガ様。10 - 14 フネが11 - 18まで接近、砲撃準備に入りました」

「む。着弾地点は？」

「調査結果、判定します。……成功。着弾予想は14 - 18、誤差



2マスです」

「くっ、拠点攻めてくるか……よし、これだ」

「9-11『歩兵』隠蔽中を7-10へ、ですか。判定は……失敗・  
3。『茂みが深くて思うように進めず、部隊が途中で停止』してしま  
いました。移動先を8-10に変更、隠蔽は続行されず。索敵  
範囲に敵部隊を確認しました」

「むむう」

王女の手により新たな青軍の駒が置かれる。青軍の拠点傍に、防衛  
部隊だろウトロール鬼の人形が現れていた。進めていたら、奇襲攻  
撃が可能な範囲なのに……サイコクの女神は常に手厳しい。更に王  
女がジヨゼフのところへ行き、砲撃の判定をする。

「あつ！……お父様、判定は『大失敗』です。『火薬の不備で大砲  
が暴発。自軍に1点の損害。砲撃不能、自軍は一時的な混乱に陥っ  
た』」

「何だっ！？それではこの手番は！」

「はい。何も出来ずに交代という事に」

「おーう……」

と、まあこんな感じにお互いのダイス運が拮抗した事もあって白熱  
した接戦が繰り広げられた。それでも負けてしまうあたり、ジヨゼ  
フの我に敵なし発言はなかなか的を射たものであったようだ。  
ホント、その先読みを政治に活かせばどれほどの利益を生むか。

ゲームを通じて打ち解けた俺たちは、ワイングラス片手にしばらく  
談笑し……やがて、酔いの回ったジヨゼフの話題がオルレアン公に  
至った。ワインを眇めるジヨゼフの眼から、光が薄れていく。

「……俺は、ずっと余裕に満ちていたアイツの悔しがるところが見てみたかった。なのにアイツは笑って俺を祝福したんだ」

「ただの意地だろ。あんたが思っていたほど、オルレアン公は優秀じゃなかったのさ」

「なん、だと？」

「聞いてる限り、確かに魔法の才能はあったんだろう。だけど、王が魔法を使うときって、いつだ？王として魔法を使わなけりゃならないような事、今日まであったか、ジヨゼフよ？」

「……ない、な」

「そうだろう。俺みたいな変り種じゃなけりゃ王が杖を振るなんてのはまずありえない事だ。それこそ、王杓以外ならペンより重いものは一切持たないといってもいい。職務の遂行だけなら頭のいい平民にだって出来る。さて、その上で、オルレアン公には『王の才覚』があつただろうか」

「……だが、貴族たちはこそってシャルルに集つた」

「そんなものが判断基準になるか。魔法以外に眼を向けず、彼こそ次の王に違いないと錯覚しておこぼれに預かるうとする貴族連中がどれほど国に害を齎すか。そういう意味じゃ馬鹿を次々追放したあんなのほづがずっとガリアに有益だよ」

ここでもメイジ至上主義の弊害が出ている、と俺は鼻で笑つた。

「どうせなら、見てみようか。俺の手に、過去を覗ける魔法がある。あんたの見たかった、悔しがるオルレアン公も見れるだろうよ」

「何？」

「テファ。『記録』を」

「はい」

テファが詠唱を始め、俺たち四人を過去の世界へと誘つた……

城の一室で失意に沈むオルレアン公の告白。それを聞いたジョゼフの眼から、ぼろぼろと涙が流れていた。

「そんな……シャルル……」

「これが『オルレアン公の真実』か」

「俺は……俺は何のために、シャルルをこの手に？何のために弟を殺したんだ？」

「知れた事。ガリアのためだ」

絶望して落ち込むジョゼフに、俺はそう断言した。その場にいた三人の視線が俺に集まる。

「魔法の才能が、王の才能だというわけじゃない。だが取り巻き貴族たちにとって、魔法の才に溢れて教会の覚えがよく、玉座に執着したシャルル・オルレアンは自分たちが好き放題する為には丁度いいお飾りだった。彼を玉座に座らせておべっかを使っていれば、貴族たちが国を食い潰し、私腹を肥やす事が出来る。奴らはそのために本当に反逆する可能性もあつた。……だから、反逆の首魁となるオルレアン公は、災いの芽として死ななければならなかつた……そういうことだ」

「そうなの、か？」

「そうだ。ガリアのため、王として災いの種を砕いた。それだけのことだ。『そう思え』」

罪は覆い隠していいものじゃない。だが、理由が破綻した罪には新しい理由が必要だ。決して無罪ではない。免罪符ではない。だが、

王を裁くものもない。だから王はあらゆる罪を背負って生きていく。そのために、背負った罪には理由が必要だ。『王の義務だったから』だという理由が。

しばらくうつむいて肩を震わせていたジョゼフ。落ち着いた頃には最初の貫禄が戻ってきていた。抱えて進むと、覚悟した王の目だった。威圧される。圧倒される。本物の王の目は、こんなものなのか。

「……シャルルの真実を教えてください、感謝する。それから、義妹と姪の事も」

「あんたを敵に回さない為に、俺が勝手にやった事だ。感謝されるほど綺麗な事じゃない。まあ、あんたが教皇に付くとは思ってないが、便乗されても困るからな。ジョゼフという一流の王者は味方にしておきたかった」

にやりと笑いあう俺たち。

「これ以上煽てても、秘蔵のワイン以外は何も出んぞ？『箱庭』の勝ちも譲らん。娘もやらん！」

「ハッ、上等！力づくでも奪い取ったる！……でも旨いワインはください、ジョゼフ先輩」

「先輩？……うむ、確かに先輩だな！では後輩を大切にせねばなるまい！」

酒気で赤くなつた俺たちの顔と、別の意味で真っ赤になつたイザベラ王女。談笑中に落ちたテファの寝顔。ガリアの王宮グラン・トロワに、幸福の音色を含んだ笑い声が十数年ぶりに響き渡るのだった。

数日後、ジョゼフがクルデンホルフに電撃訪問。シャルロットとオ

ルレアン公夫人に謝罪して、俺に交渉を持ってきた。

一台の馬車がクルデンホルフ王城の中庭に入れられる。罪人護送用の檻馬車である。

「この罪人を買ってもらいたい」

そう言っつて馬車の幌をとらせる。その場にいた全員が息を呑むものが、そこに入っていた。

数週間前に消えた、ピンクブロンドの元公爵令嬢である。全体に薄汚れてやつれた印象はあるが、あの生意気な目つきは間違えようがない。

「ジョゼフ陛下。ちなみに、罪状は？」

「無銭飲食だ」

「は？」

「無銭飲食だ」

なん……だと……？

あまりにショックが大きすぎて、それから少しの間の事を良く覚えていない。ただ、あの後交わした交渉の結果を調べると、クルデンホルフとガリアが同盟を結んでムニンからリュティス市街へ向けて線路を延ばすことと、積極的に留学受け入れをするという事が決められていた。提供するし金額などもちゃんとした公正な条文で、俺

のサインも入っている。

ピンク頭は指輪と祈祷書を取り上げた上で『忘却』により『サイトへの思慕』だけを残して記憶を全部消去。その後はもう見違えたようにベタバタバタバタ、ツンデレの影も形もない。そしてそのサイトはルイズ脱獄幫助の罪で強制無償労働が課せられている。色々情状酌量や真面目な監獄生活の評価もあって、刑期は3年。その間は財産を持つ事が許されないが、寝床と食事はこっちで用意している。……犯罪者のくせに一人前の幸せを掴んでいるようにしか見えない。

ま、それはともかく。

ジョゼフが置いていった留学生第一号、イザベラ王女を連れて俺はニーズヘッグにある『特別教育機関』に訪れた。これはクルデンホルフの全ての集落に必ず一つ設けられている『学習施設』の親玉にあたる。

『学習施設』は文字の読み書きと基本的な算術、そして人生学を教えているところだ。寺子屋といえば日本人にはよく解るだろう。ただし、教育対象はあらゆる国民。識字率やモラルの向上と共に、未来の政務を担う優秀な人材を発掘・選定する場でもある。

そしてこの『特別教育機関』には今、官僚を目指す『学習施設』の成績優秀者のほかに、トリステインで捕虜になり、処刑されなかった下っ端貴族やその女子供が集められている。勿論、この二つは厳格に分離されている。男女もな。

ただ、従順な捕虜といっても公女とアンリエッタは王城の地下に幽閉するしかなかった。表に出すと反逆者ホイホイになりかねないからな。

女子供が一番多く捕虜になったのは、やはり魔法学院だった。妖怪学院長をはじめブリミル教の思想に塗れ貴族の位に溺れている教師達には残らず歴史から退場していただき、生徒達も反抗的な奴は遠慮なく始末するように支持してある。だがやはり女性、誇りの為に死ぬ奴なんてそうそう居ない。男子生徒の大半も捕虜になっていると教えたから、尚の事だった。

その捕虜の教室を、今俺たちは見学していた。ぱつと見たと魔法学院の授業風景とよく似ている。ただし机の感覚が学院のものより離れており、複数の指導員が絶えず彼らの後ろを巡回、監視していた。

捕虜の彼らを待っていたのは『貴族の特権を捨てて真っ当に生きる方法』の教育である。当初の予定では領民の信頼厚い領主などもこの場に居る予定だったのだが、困った事に俺の合格ラインを超えるような領主はただの一人も居なかった……

勿論、彼らの一部、特に魔法学院の生徒たちの中には家族を殺された恨みが漂っているが、モンモランシーなど自分の家が掲げた『誇り』の実態がある程度把握していた聡明な生徒は、この教育の先を見抜いて真面目に取り組んでいた。つまり、従順に勉学に励めば、敗戦国の貴族で捕虜の自分たちにも明日を生きる為の仕事がもらえる、ということに。おそらく殴られたのだから頬を腫らしたギースもそこに居て、せっせと課題に取り組んでいた。

ちなみに現在、最も成績が優秀なのはなんとマリコルヌである。成績を落とすと罰として食事の量が少なくなるので、彼の食欲が知力体力の天元突破を齎したらしい。流石は三大欲求。だが一位でも食事の量が増える事はないのであつた体はちよつとマツソーになりかけている。

このまま卒業課程を終えて、使い物になると判断された上で希望す

れば政務や軍務の見習いに付き、それ以外なら市街の職場に丁稚として出される。後は本人の努力次第だ。ちなみに、教育の妨害をしたら即刻処刑だと通告してある。まだ出番はないが、用意されているのは『くすぐりの刑』だ。

「こうしてみると、随分生きてるんだね。噂じゃ皆殺しだって言ってたけど」

「領地が増えるとうとうしても人手が必要でね。土地勘のある奴を再教育して使ったほうが早いし安い」

「はあ。ハルケギニアの金持ちの言葉とは思えないね」

「それは違うぞ王女。こんなだからハルケギニアの金持ちになっただ」

「金持ちは否定しないのかい」

がつくりと肩を落とすイザベラ王女。彼女もシャルロットやジョゼフの眼がないところではかなり素で喋る。こっちのほうが好感持てるな。

「この国に居る以上、貴族だ王族だっただけで扱いが上になるとは思わないでくれ。授業中は杖もマントも携行不可だ。平民と同じメニユーをこなしてもらおう」

「覚悟してるよ。……そうだ、賭けをしよう、陛下」

「賭け？面白そうだな。もうすぐ聖戦に身を投じるこの身に何を賭けさせる？」

「何、簡単な事だよ」

イザベラ王女は怪しく不敵に笑い、人差し指を立てた手をフリフリ。このとき、面白がって興味を示したことを、俺は後悔する事になる。おもに、妻達からのプレッシャー的な意味で。



「陛下が聖戦を生き残って、わたしが主席卒業できたら、陛下がわたしに熱烈なキスをする」

## 第17話 / 解ける呪縛と結ばれる絆（後書き）

話が完全なひと繋がりになるのは、今回が初めてだな。

「んー、しかし強引だよなあ」

そしてルイズ発見！我ながらとんでもないオチを用意したものです。

「きつと捕まっつてからも『わたしはラ・ヴァリエールよ！』とか威張り散らしたからジョゼフの耳に届いたんだろうな」

まったく、短絡的過ぎるんだぜ。だがそこがルイズクオリティ。そして色々忘れて実質ご退場願いました。サイトもただの『幸せな』労働者に。

「我が友ながら恨めしい……さて、この話でトリスティンの捕虜に生き残りが居る事を明言したわけだが」

コツパゲはキュルケが実家に連れて帰っているので、捕まりませんでした。火のルビーもコツパゲが持ってます。

「しかしゲルマニアの話が入る予定はありません。あちらさんは内部の平定に忙しいので、手を出す余裕がないと考えているようです」

次回。聖戦宣言を受けて、ハルケギニアが激動する、かも？

「ご意見ご感想、ご指摘やリクエストなどお待ちしております。努力しますが、ご期待に沿えるかどうかは、ちょっと保障できかねたりします」

無人にしたアルビオン大陸をロマリアに落とす、ってイメージがあるんだけど。

「コロニー落とし！？却下！NG！絶対にやめろ！！あそこに生きてる人にとっちゃ大事な故郷だぞ！」

だよなあ。

第18話／忘れ物を拾って、幻を砕いて（前書き）

若干短め。エロスあり注意！

## 第18話 / 忘れ物を拾って、幻を砕いて

ジヨゼフがガリアで善政を布き始めたという噂を聞いて、しばらく経った夏のある日。

「陛下、陛下ー！大変ですぞ陛下！」

うるさいぞ外務大臣。三回も呼ばずとも俺はちゃんと玉座に座ってる。薄着一枚のベアトリスが膝に乗って甘えてるけどな。

「何事だ」

「聖戦です！我らに向けて聖戦が発動されました！ロマリアの軍勢がガリアを攻撃し始めております！」

瞬間、謁見の間にどよめきが走るが、王杓で床を叩いて黙らせる。俺にもジヨゼフにもわかりきっていたことだから、別に慌てる必要なんてない。遅すぎたくらいだ。

「では盟約に基づき、また自衛の為に速やかにゲルマニア国境方面とガリア・ロマリア国境へ『巨神部隊』を派遣、防衛の任に付ける。輜重艦隊の準備を急げ」

『御意！』

俺の号令で將軍達が敬礼し、走り去っていく。巨神といってもデザインの酷い第六文明人の遺跡の事じゃなくて、有人操作式の実寸MS部隊の事だ。ALICEの監視が入ってて反逆や不必要な虐殺・破壊行為には使えない優れものだ。

MSはザク2、ゲルググ、マラサイ、ギラ・ドーガなどを取り揃え

ている。小隊長にはご存知角付き、中隊長には公国カラーの陸戦ガンダムを配備している。たまにEz-8が混ざっているのはご愛嬌。大隊長は後ろからギャロップ陸戦艇で指揮だ。カーゴもある。体当たりするような事態にはなりようがないが。

ロマリア軍がクルデンホルフの土を踏むには、ガリアを踏み越えるか迂回するしかない。当然、うちの戦力を持ってすればそれが叶う前に殲滅が可能だ。ゲルマニアは国境が触れているからその限りじゃないが、国境の警備は万全だ。

後はジョゼフの頭の上を借りて、生臭坊主の国を、始祖ブリミルの幻影を焼き払うだけだ。

「他には？お前達で処断しきれない事は何かあるか？」

「いいえ、内務は全て滞りなく進んでおります。捕虜達の中にも卒業課題に取り組むものが出てきました」

「そうか。頼もしい限りだ。今後<sup>かいな</sup>も頼むぞ、我が腕たちよ」

『御意！お任せあれ！』

ホント、優秀な部下って大切だよな。不正監視システムは俺しか知らない機械がやってるから抱き込まれたり欺かれる事は100%ありえないし。

更に、この手のお約束として、立体映像装置を用いて国家全体へ演説をぶった。

「クルデンホルフ王国に名を連ねる、全ての民へ。余の声を聞け。先刻、ロマリア連合皇国が我が国とガリア王国に対して聖戦を発動

した。そう、聖戦だ。諸君らを貶め、欺き、虐げ、歪め、狂わせた全ての元凶、始祖ブリミルが我らを滅ぼさんと押し寄せてくるだろう。我らはそれに屈するか。否！否！断じて否！！全ての臣民よ、我が元を集うものよ、余は諸君に傷一つ付けずにこれを滅ぼす事を約束する！古く腐敗した権威は、速やかに消え去るであろう！」

俺はクルデンホルフを守り抜き、ロマリアに属する全てを殺しつくす。大地、支配者、被支配者、建造物、文化、文明。始祖ブリミルの幻は、何一つ後世に残さない。

「陛下、お加減が宜しくなさそうですが」  
「そんなことは無いさ。それに、俺が行う殺しはきつとこれが最後だ」

何か言いたげなベアトリスを抱きしめ、強引に黙らせた。

「そうとも。これが……最後だ……」

ところが、一気に焼き払う予定だったロマリア戦、修正が入った。俺とシャルロットとイザベラ王女の三人が、オルレアン公夫人に呼び出されたことから始まる。

「陛下。折り入ってお願いがあり、ご足労をおかけした事、お許しください」  
「それは構わない。ヒマだからな。して、その願いとは？」

夫人の告白。それはシャルロットがガリアでは忌み嫌われた双子で

あり、その片割れがロマリアの手で孤児院に入れられている、という事だった。……何か忘れていている気はしていたが、そうか、ジヨゼット！

「その私の娘を、探し出し、救って頂きたいのです。これより聖戦に臨まれる陛下に、このようなことを願う無礼、どうかお許しください……」

「陛下、お願い」

「わたしからもお願いします」

公夫人の嘆願に、真面目な顔のシャルロットとイザベラ王女が追随する。ジヨゼットを助け出すのはそんなに難しくは無い。長期の拷問で人格崩壊しているジュリオに聞くなり、ロマリア国内の山岳を風潰しに探すなりして例のワケアリ孤児院を探し出し、占領して連れ出せばいい。ただ、ちょっと手間だな。

「……ネコ」

「はい？」

「何のことです？」

公夫人とイザベラ王女が疑問符を浮かべて首を傾げるが、一人意味を理解したシャルロットが顔を真っ赤にしていやいやをする。

「ネコ」

ふるふる。

「な、なんだかよく解らないけど、その『ネコ』ってのをすれば探してきてくれるのかい？」

「いや、成功報酬でいい」



「それなら、エレーナの代わりにわたしがやるうか？」

「駄目！わたしがやる！……あ」

困った風に名乗り出るイザベラ王女を制して、シャルロットの口がすべる。俺が会心の笑みを浮かべたのは、言うまでも無い。

「よし、言質取った。公夫人、その願い確かに聞き届けた。必ずや双子の片割れ、連れてくるとしよう」

「あ、ありがとうございます？」

混乱してるな。だが大丈夫。ちゃんとジョゼットは回収してくるから。

「と、言うわけで気障野郎。お前が育った孤児院の場所を教えな」

「う、あ……リュティスの南、18リーグ……エウリケ山脈、東から、三つ目の頂……」

「そうかい」

吊り上げられていた月目の色男、再び水牢へ。右手にはまだルーンがある。生命活動が終わらない限り心が壊れても消えないとは、相変わらず意味のわからない法則だ。

一路、孤児院へ。ジュリオが嘘をついていれば手間が増えるところだったが、既に嘘をつくほどの精神すら残っていないらしく、すぐに見つかった。

「どなたです。ここは神聖な」

「黙れ。そして従え。赤ん坊の頃にここへ来て、15年または16年経過している女。全員連れて来い。嘘偽りは一切許さん」

あわただしく出てきた衛兵の一人を吹き飛ばし、代表らしき修道女を脅し、該当する女を並べさせる。フェイスチェンジか何かの魔法が籠ったマジックアイテムを使っているから、このままの見た目では解らないが、俺には薄れたとはいえ原作知識という切り札がある。

「次の言葉に覚えがあるものは、前に出る。『竜のお兄様』」

並べられた女達の視線が、一点に集う。これは策謀で接触していたジュリオの呼び名だ。かなり早期に拘束したとはいえ、ジュリオがそれ以前から時間をかけてジョゼットを懐柔していた事は明白。ならばこれで炙り出せると思ったが……大当たりだな。

視線が集中した一人の少女の前に立つ。出来るだけフレンドリーに

「ジョゼットだね」

「は、はい。あなたは？」

「ただの道楽者さ。君の母親の依頼で、君の身柄を引き受けに来た。同行願う。母と姉、そして従姉が待っているぞ？……ああ、他の皆には手間をかけた。すまない。お詫びのしるしだ、つまらないものだが、楽しんでくれ」

手土産に持ってきた四つのホールケーキを渡す。禁欲生活で飽き飽きしてるだろうから、いい慰みになるだろう。

前で歓声、後ろで怒声上がるが、どちらも気にかけずにジョゼットを連行。

帰りの船の上で、ジョゼットのペンダントを壊す。するとただの地味少女だったジョゼットの顔が、特徴的な青い髪を有する姫君に変

化する。やはりシャルロットに良く似ているが、纏っている空気はまったく異なつたもの。よほど気を抜いた遠目でない限り、俺が見間違える事はなさそうだ。

「こ、これがわたし?」

「そう。ジヨゼット、君の本当の姿だ。ガリアの姫」

「わたし、お姫様……?」

戸惑うジヨゼットはそのまま王城へ連れて行き、オルレアン公夫人に会わせる。シャルロットとイザベラ王女も一緒に。あとは、四人で何とかする話だ。俺は邪魔になる。

「シャルロット。また今夜、な」

「あ、う」

真っ赤になつてるシャルロットに疑惑が集う空間を、俺は後にした。

その夜、俺の寝室には一匹の子猫が居た。青い毛並みのネコだ。ふかふかのミミ、鉤しっぽ、にくきう手袋&ブーツの弾力は人の心を捕えて放さない。素肌むき出しの体をほんのり桜色に染めて、そのネコは鳴く。

「にゃう」

「ほら、おいで?」

「にゃ、ふう」

ネコは自分の体を執拗に俺へと擦り付け、耳元に口を寄せて甘い甘い声をあげる。俺の背筋に走る電撃。壊れそうなほど華奢で柔らか

で小さなその体を、躊躇なく抱きしめる。

「にう、にやうううう」

「ねえ殿下あ、あの『ネコ』って結局なんだ、った、の……?」

「にやっ!?ふにやあああうううっ!!」

「つと!」

突然の闖入者に驚いた猫が飛び上がり、その摩擦が最後の刺激になって限界に至る。くたつと脱力して俺の胸に落ちた猫の瞳が、闖入者を睨みつけた。……同じ青い毛色の、顔まで青くなったネコの従姉。

「ご、ごめんエレヌ、そんなつもりじゃ!」

「じゃあ!」

「いやあ!もう、もう生殺しは嫌なの!許してエレヌ!!いつそ汚してえ!!!」

……シャルロットって、結構激しいんだよな、色々と。

~~~~~

全ての敵をクルデンホルフ、ガリア両国から追い出し、ロマリア軍を教皇庁へ押し込める頃、俺はアルビオン大陸にいた。

かつてレコン・キスタの軍勢7万を消し飛ばした時、アルビオンの大地には大きな爪痕が残っていた。収束メガ粒子砲で薙ぎ払った痕跡だ。超高温の粒子の奔流は大地の七割までを溶かし、もう少し力

を加えれば折れて剥がれてしまうほどになっていた。

だから俺は、その危険地域の動物を全て避難させ、意図的にそれを切り離す事を決定した。そしてこれが、ロマリアへの最大の攻撃手段に変貌する。

「来たりて、現せ。『機兵の系譜』……！」

これまで俺が扱った中で、最大の規模だ。数百万トンを超える大地全てを使って、俺の思うものをここに現す。普段は一瞬のその工程は十数分を要し、俺はロマリアへ振り下ろす必殺の一撃を完成させた。

完成次第、全体に隠蔽魔法を施す。ジェットエンジンの出力を上げ、一路ロマリア、教皇庁へ。先行させているプチモビ軍団の偵察により、ヴィットーリオが前線ではなく教皇庁にいるのは確認済みだ。俺の目的の為に確実に殺し、破壊しつくすべきものが同じ場所に居続けているのは、幸運な話だった。

目的到着まで後30秒をきった所で、隠蔽魔法を解除、その上から離脱する。現れたのは、紫色の巨大な航空機。寸法にして実寸の8倍、体積にして512倍相当の『ガウ攻撃空母』である。

そして、俺の手には通信装置。やっぱり言わないと駄目だろ。その為に艦首にスピーカー仕込んであるし。大きく息を吸って。

『クルデンホルフに、栄光あれええええ！！』

……これは大公国のうちにするべきだったな、いやそれじゃ死亡フラグだな、なんて思いながら、俺は叫ぶのだった。

第18話 / 忘れ物を拾って、幻を砕いて（後書き）

危ない危ない、ジョゼットのことすっかり忘れてた。

「アロン様が感想で聞いてくれなければ、そのままこんがりローストになってた可能性も……ありがとうございます！貴方がジョゼットの勇者様です！」

ねこねここねこ！まったく我が主人公ながら妬ましい。

「うっさい……ネコは飼い主が美味しく頂きました」

そしてロマリア滅亡フラグ回収モード。コロニー落としては結局やりませんでした。

「いや、コロニーじゃないってだけで現象は殆ど一緒だろ！何だあのサイズ！」

ちょっと予想外を走ってみたくて。皆様驚いてくれたでしょうか。

「読まれてたような気もするがな」

名残惜しいですが、次回からエピソードモードです。もう滅ぼす国家がありませんので。

「いつからこの小説は戦争小説になっちまったんだ……帰って来いファンタジー！」

うん、それ無理。ちなみに、エピソードは次回作に続く、みたいな

終わり方を予定してます。以前書いたとご報告しましたが、実はまだ草案状態です。決まってるのはこんな感じ。

- 一、主人公が使い魔の魂を連れて再度の転生
- 二、次は次元世界の片隅で隠居したい

「もう駄目かも知れんね、この作者……ご意見、ご感想お待ちします。ネタをいただけると作者も改心して平和なハルケギニアを書くかも知れません」

次回作早く！でもOKです。頑張ってさくつと纏め上げてみますので。

「では、先が短いかもしれませんが、ご期待ください」

あ、最終話あげる前に閑話は揃えます。時系列に合わせた割り込み投稿になるので発見され辛いかも知れませんが、チヨコチヨコ目を覗いてみて下さると嬉しいです。

戦闘機人、次元転移トラブル、ザールブルグ……

「なんだ、次回作冒頭のキーワードか？……最後の一つは何！？」

第19話／終わる日々、止まる時、狂う予定

ガウト特攻（攻撃側の人的損害ゼロ）で都市ごと指導者を全員失ったロマリアは、速やかに殲滅された。宣言どおり、味方の被害ゼロで正直に言えば、ちょっとやりすぎたような気もしている。焼け野原になったロマリアの領土はガリアのものとなり、どう扱ったものかとジョゼフの頭を悩ませている。飛び石領地は管理し辛いので、クルデンホルフは領土拡大をしなかったのだ。旧トリステイン領がまだ充分育ってないというのもあった。

だが、そんなこととは関係なく、俺は今、ひたすら逃げなければならなかった。謁見の間に居たわけではないので、王の正装はしていない。シャツとジーンズ。サイトにも好評な国産品である。

すれ違う使用人や衛兵達は「何だまたか」みたいな微笑を向けてくるのだが、俺にとっては結構大変なのである。……まあ、逃げ切れないのだが。

「待ちなさい殿下！」

「待てー！」

「許さないから！」

「……絶対、捕まえる」

追跡者は俺の妻のうち、人間とハーフエルフの四人。レミイはどこかで昼寝してるはずだ。いや、騒ぎで起きてしまっているかもしれないな。

とうとう、ばれたのだ。俺が彼女達を抱いているときに魔法を使っていることが。いや、問題点としては彼女達に魔法をかけていたこ

とが、と言った方が良い。

特にベアトリスとマチルダは色々と時間的な理由で子供ができない事に悩んでいたようだ。そこで何を思ったのか二人はイザベラ王女に相談、協力を得てあの刺客『地下水』に探らせ、俺の魔法力の流れが妙だと調べ上げてしまったのである！恐るべき才覚。やはりイザベラ王女、侮れん！

で、その事実が残る三人に伝播。既にそれと俺の都合を知っているレミイ以外が一気に襲い掛かってきて、今に至るというわけだ。

「お世継ぎくらい生ませてくださいでもいいじゃないですか！！」

「お前の体がまだ若すぎるんだよっ！！」

「お母様がわたしを生んだのは14のときです！」

医療や衛生管理が発達してなくて寿命が短かったからだろう？危ないんだっての！

「わたしだって惚れた男の子供が生みたいんだっ！！」

「だからベアトリスの成長をもう少し待ってくれって！第一子はベアトリスの子じゃないと不味いんだから！！」

王位継承権でゴタゴタすんのはジョゼフだけで充分だっ！！

「後何年ツ！？」

「二年！せめて一年半！！」

「駄目！今すぐ！！」

主だった二人が怒鳴るのに対して、俺の返事は悲鳴に近い。国一つ丸ごと消し去る力があっても、男は女性に勝てないのか！……まあ、勝てないよな。

ただ、さっきのやり取りでそれほど焦っていない二人が止まって…

…くれない!?

「なぜだあつ!?」

「今すぐ、今すぐ……」

「その……最近、目一杯してもらえてないので……」

怒り以外の感情で顔を赤くした二人が、ちょっと照れた風にも上目遣いになって……

「「隙有り!」」

「隙なし!」

「「きゃう」」

左右から飛び掛ってきたベアトリスとマチルダを体を引いて回避。

二人は勝手に正面衝突した。駄菓子菓子!間違えた。だが、しかし
!!

「捕まえた」

「その……可愛がってください」

残り二人が前後から俺を捕えてしまった。ベアトリスとマチルダが
幽鬼のように立ち上がり、残った左右を抑えてしまう。

「『地下水』に監視させます。あきらめてお胤をください」

「もう逃がさないからね」

あ、俺終わったかも知れん……

~~~~~

「と、言うような事があった。おかげで四人は再起不能。どうしてもこのボケ王女」

「いや、再起不能はわたしのせいじゃないだろう。でも、ここ半月どうも見かけないと思ったら……何て体力だい。……でも、陛下。女にとってその細工はちょっと裏切りに近いものがあるよ。控えるべきだね」

「そうか？」

「そうだよ。女は誰でも、惚れた男の子供を欲しがるもんさ。それが男の都合一つで封じられちゃったら、立場が無い」

誰でも、の部分を強調しながら胸の前に手を合わせて微笑むイザベラ王女は、年相応の夢見る乙女に見えないことも無い。

「そういうもんか。俺は未来の騒動回避の為に時期と順番を調整したかっただけなのだ」

「王の心と人の心は、常に相反するもの、ってとこだね」

「古い王の言葉か？」

「そんなところさ……ところで、もうすぐでわたしも卒業なんだけど、賭けは覚えてるだろうね？」

「ああ、まあ、一応な」

「情熱的に、熱烈に、それだけでわたしが溶けちゃいそうなのを、ね？」

「誰かさんが周りを刺激してくれたおかげで、今期は大豊作だ。そのくらいなら叶えても良かるう」

イザベラ王女が「やった」とか小声で小さくガッツポーズとってるの、気付いてるからな？

まあなんにしても、ブリミル教の専横体制は殲滅に成功した。実質的にメイジ至上主義はハルケギニアから消滅したといっても良い。少なくとも俺とジョゼフがそれぞれの領地を治世してる間は不条理も消えていく事だろう。後は俺が国家として手を出す事は無い。砂漠のエルフを初めとした各地の知性ある亜人……もとい妖精種たちとの交易ルートを開いて更なる発展を促しつつ、発展しすぎて冷戦みたいな事にならないような格言か何かを残せば良いのだけれど

……

「……か、陛下？」

「ん？おや、いつの間に地下牢に？」

「つい先ほどです」

考え事をしていたら随分ヘンなルートを通ってしまったらしいな。地下深くに用意されている特別牢の更に置く、迷路に近い通路を一番奥まで入ったところに、この元トリステインの王族が入った牢があるはずなのだが。

そして声をかけてきたのはピンク頭の次女である。女王は投獄されてからずっと失意に沈んだままであり、ピンクどもの姉は俺を連想させるあらゆるものに恐怖して震え上がるので、会話が出来ない。

「まあ、いいか。アニエスから何か聞いたか？」

あの親衛隊長は平民出身の騎士で、リツシュモン事件の話題性が強く、任務以外では横暴が無い人気者で、忠誠も誓ったので取り立ててある。あの会談の考えなしな言動に愛想が尽きたといっていたな。元タリツシュモンやコツパゲへの復讐の為に王宮を利用しただけなのだから、アンリエッタ個人にはそれほど執着が無いのだろう。死

ななきやそれでいい、ぐらいい。これがアンリエッタの失意を加速させているのは間違いないな。

そんな感じだから俺はアニエスを『信じて』この三人の世話を任せている。最初はそれはそれは驚いていたが、そのうち「陛下はそういう方なのですね」とか納得してくれた。ちよつと失礼な気もする。

そのアニエスから、三人には外の世界の世間話が幾つか流れている事を、俺は知っていたのだ。

「ルイズの末路と、ロマリアの滅亡は伺いました」

「そうか。……俺が巻き起こしたハルケギニア殺戮劇も、これで終わりを迎えることになるだろう」

言いながら踵を返し、牢の奥で震えている長女に右手を伸ばす。

「魔法は一つの技に収まり、人の優劣が内面で測られる時が来る…

…来い」

一声で言い。長女が跳ね、びくびくと震えながら俺の手まで這って来る。触れた頬を撫で、やや色を落としたブロンドを梳き。

「俺が望んだ公正な世界。権限と義務が離れぬ世界。だが俺が居なくなればそれは崩れるに違いない。平和というのは、そういう儂いものだから」

大粒の涙が溜まったままの目尻を拭い、鼻筋を撫で、唇に触れる。怯え震えるエレオノールがその指を舌で迎え入れる瞬間、俺はサデイステイックな笑みを浮かべたに違いない。

「誰がなめると言った？」

「ひっ!？」

「まるで娼婦の仕草ではないか」

「ちが、わた、あ、あ……」

「ほう。何か、違ったか？」

「ひい、あ……」

失敗したと体が跳ね、逆らいかけて心が折れ、自分の未来に絶望してへたり込む。……いいね、実にそそる。あの高慢ちきな公爵令嬢が、まるでこれから捕食される小動物のようだ。もつと怯えろ、もつと震えろ、もつと嘆き、もつと恐れ、もつとその表情と仕草を……

……!!

「陛下、何をなさっておいでで？」

「ん？アニエスか。何事……いや、そうか、食事時か」

ガタガタ震えて涙を流すエレオノールから手を離し、来訪者に尋ねようとして、その手にあるものを見てキャンセルする。パンとスープだ。勿論、かつてルイズがサイトに与えていたようなふざけた代物ではない。パンは焼きたて、スープも野菜が多く入っている。囚人とはいえ預かった他所様の娘、病気で死なせては面目が立たないからな。

懐中時計を見ると、もうすぐ昼だった。

「アンリエッタはあの様子だが、食っているのか？」

「はい。時間はかけているようですが、いつも平らげています」

「それなら良いのだが。では、後を任せる」

「承りました、我が陛下」

敬礼するアニエスの横を通り過ぎ、今後の予定を考える。最近市街を回ってなかったっけ。

ベアトリスと二人の護衛をつけて市街地を視察する。デート気分のベアトリスが腕を絡め、地に足がついてない様な歩き方をしているのが、腕から伝わる力具合でわかる。複数の路地を見て回り、小さな飲食店で軽食を済ませた直後の事だった。

「わあああああっ!!」

「何!」

トッ

焼け付くような熱。じわりと広がる赤。涙を流す『青い髪の少女』

……?

「陛下、陛下!!何をしています、その女を捕えなさい!!!」  
「は、はっ!!」

ベアトリスが、俺の民達が悲鳴を上げている。誰かが医者呼びに行き、護衛が少女を捕まえ、地面に押し付ける。間違いなく、ジヨゼットだ。

「ジュリオの仇、か」

「いけません陛下、お体に障ります!」

「大丈夫だ。おい、肩を貸せ」

残った護衛とベアトリスに支えられて立ち直り、ナイフの刺さった腹に手を当てる。複雑な臓器にダメージは無いな。ならば。



ルーンを唱える。お得意の錬金だ。ナイフに触れている組織にあわせてナイフを己の肉体に変化させる。たんぱく質など高分子化合物はそれだけでかなり複雑な錬金になるが、オクタゴン錬金の解析力なめんなよ、だ。作るべきものが真横にあるのに、真似られないなんて認めない。

「へ、陛下……!?!」

目を丸くするベアトリスと護衛に笑いかけ、一人で立とうとして…  
…ふらついた。

「ふふ、流石に流した血までは戻せんな」

「へ、陛下!?!」

「う、そ……」

ぐらつく体をベアトリスに支えられながら、ジヨゼットに歩み寄る。

「開放せよ。俺の義妹だ」

「しかし、陛下!?!」

「この者が何かしたか?」

「陛下!?!」

ふらつきながら、何言っただか。目を丸くした護衛が呆然とジヨゼットを放す。そのまま逃げようと周りを見回すジヨゼットの顔が、すぐに青くなった。

今、この場には、300万以上を消し飛ばした俺ですら感じたことのない憤怒と怨嗟が満ちていた。道行く人々が全員この場に集まって巨大な人の壁を成している。上空から見れば小さなコロッセオのように見えるに違いない。

誰も彼もが、ジヨゼットに怒気と殺意を向けている。

「みな、落ち着くが良い。余はこの通り、無傷である」

顔色は悪いかもしれないが、両手を広げて何とか無事をアピールすると、少し殺意が薄れたようだ。この事態を収束させるなら今しかない。

「義妹よ。お前の怨み、確かに覚えた。今日は母の元へ戻るがいい  
「なりません陛下！陛下を害した者を野放しにすれば示しがつきませぬ！」

「示しも何も、この者は余を害してなどおらん。余はこの通り無傷であり、この者が余を害するところを余は見ておらん。義妹が義兄に会いに來ただけの事のどこに害する要因があるうか」

「陛下！」

「さあ、皆それぞれの生活に戻りなさい」

俺が解散を指示したのに、人の壁は王城への道を作るだけ。そして無言のプレッシャーに押し負けたジヨゼットがその『道』を走って王城へ帰っていった。

「王様、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ、我が民よ。だが、このところ忙しくてな。少し眠い。今日はもう城に帰って眠らせてもらおうとしよう。さあ、民よ。それぞれの生活に戻るといい」

人の波から飛び出した少女の頭を撫でて、俺も城へと歩き出す。誰かが俺を称え、国を称え出した。

「陛下はただの馬鹿です！」

『クルデンホルフ万歳！サンガ万歳！王国万歳！馬鹿野郎万歳！』

ベアトリスの罵倒に便乗して賞賛が変質している。うちの民は随分とノリが良いのな。

俺が王城に帰ると、強制労働者の服装をしたオルレアン公夫人とジヨゼットが現れて、死ぬまで永劫俺の奴隷であると誓いを立てられた。……あれ？こんなはずでは……？

第19話／終わる日々、止まる時、狂う予定（後書き）

ふっふっふ、不義理の報いを受けるがいい！

「ふざけるボケ作者！いくら妻だからって13、4の小娘孕ませられるかっての！母体の安全的な理由で！！」

しかしそんな思いやりもばれてしまえば意味が無い。まー、考えなしにホイホイ増やした報いだとも思いな。

「うん、反省してる。でも後悔はしない」

そして虐殺者のお約束、復讐！

「しかしチートパワーで復活」

このまま死んで次回作に持っていつてもいいんだが、やっぱりチート化け物が女より先に死んだら駄目だろ、な理由で却下。次回、主人公が世界から静かに消え去ります。

「……綺麗にまとめてくれよ？では皆様、また次回！！エピソードでお会いしましょう！！」

次回作は主人公、使い魔の魂と共に世界渡り、リリカル世界の次元

宇宙に、あの世界が！

「がんばれ。でもその前に外伝ちゃんと埋めような」

うん、でも『次回作書け』ってなご感想が明日5/29夜までに五件以上寄せられたらエピソード書いて休載状態で次書くかもね。

「駄作者め！！ソーラ・レイ、発射！」

ぎゃあっ（蒸発）

終章／終わりと始まり。去るものと遺るもの。(前書き)

エピソードです。猛ダッシュで駆け抜けたハルケギニアよ、さようなら。

終章／終わりと始まり。去るものと遺るもの。

ロマリアを平定してから、俺は本当に暇になった。

旧ロマリア領という名の焼け野原はガリアのものになり、俺は迂闊にも攻め込んできたゲルマニアの一部の諸侯の土地以外の財産を全て貰い受けた。もうクルデンホルフに領土拡大の必要はない。というか、土地開発が追いつかないからだ。

あの後俺がしたことといえば、火のルビーをコッパゲから、土のルビーをジヨゼフから譲り受け、俺の持っている二つとあわせて四つの指輪全てを粉々に破壊した上でアンドバリの指輪と一緒にラグドリアン湖の水精霊へ返還したことか。祈禱書は焼いた。オルゴールと香炉は、中身を普通のものに作り変えた。正体不明のロマリアの秘宝は、ガウ特攻で紛失した。もしかしたら誰かが持っているかもしれないが、指輪は無いので意味を成さないだろう。

そして二年後、約束どおりベアトリス、マチルダとの間に子供を儲けた。ベアトリスの子はレーガン。マチルダはオスカーとエミールという双子の男子を産んだ。

テファとシャルロットはもう少し時間を置いて子を産んでもらうつもりでいる。不満そうではあるが、今生まれている三人の面倒を見るのも楽しいといていた。

イザベラ王女は宣言どおり主席卒業を果たし、次期女王としての土台を作りガリアに帰っていった。賭けは彼女の勝ちだったが、その後の勝負は俺の完全勝利だった。

そして俺は……

「遅い！」

「ぐあっ！」

サイトやアリエスを初めとした兵士達と取っ組み合いの日々を送っている。レミイが感じた俺の寿命は、どう考えても原作破壊という使命に対する必要性が薄い。そして、転生する為には死ぬ必要がある。つまり、俺はこのハルケギニアで何らかの経験を積み、その記憶と経験によって次の世界へ渡る、という道が存在するのだと考えていた。

故に、ハルケギニアとその外の世界に伝わる様々な武術、特に『渡ってきた』合気などの『小さな力を大きく使う』東洋武術を各地に派遣したダミー人形で学習し、王城にいる本体、つまり俺がそれらの研鑽と統合を行っているのだ。……前世で少しだけ読んだ漫画の主人公が、同じような修行をしていた気がする。あれは忍者で、影分身で、内面の修行だったか？

サイトは地球帰還を諦め、ハルケギニアに骨を埋めるそうだ。人柄もよければ仕事も真面目なので周囲の評判も良く、もう脱走幫助だ犯罪者だと無意味に喚くような奴もいない。刑期が終わったら軍籍に入り、ルイズと結婚するといっていた。……俺の目の錯覚で無ければ、あの下腹部の膨らみは間違いなくアレだな。

あらゆる試練、試験を乗り越えて宰相の座まで上り詰めたバーナードも妻を貰った。驚いた事に、妻の名はクリスティーナ。息子も一人。俺が斡旋したわけではない事を、強く主張しておく。



奴を初めとする優秀な臣下のおかげで、国王の出番が式典と最終調整くらいにしか無い。官僚の世襲は認めていないから、今後も優秀な人材で国が保たれてくれる事を祈っている。

更に二年後。旧トリスティン領の発展が充分になった頃を見計らって、地下から病を癒したカトレアを出した。嫌い、というほどではなくなったが、やはりまだ苦手だ。いまは孤児院の一つに送り込んでいる。あの優しさを不気味に感じるのは俺の負い目のせいであり、純粋な子供達にであればそれは自然な無償の愛、すなわち母の温もりであったからだ。思ったとおり人気が高い。……余計な虫はMSガーゴイルの排除対象になるけどな。

アンリエッタは失意が臨界を突破して結局体を壊してしまい、エレオノールは……まあ、アレだ。別箇の理由で出せない。それが何かは……適当に妄想してくれ。多分、あってるから。

王位継承者である俺の子供達には、王者としての特別な教育が待っている。本当は世襲などさせたくないのだが、これは周りが強固に反発してくれるので、ならばせめてと膨大な量の『学ぶべき事』を用意してあるのだ。……無知な王者がどれほど危険か、あらゆる歴史書から学ぶ事が出来るだろう。

レーガンたちが4歳になった頃、テファとシャルロットにも子供が生まれた。アイシャとニルファという二人の女子だ。ベアトリスやマチルダまできゃいきゃい言ってたので、男子三人が寂しそうにしていたのをよく見かけた。……強く生きる、我が子よ。女性というのはそういうもんだ。

俺が愛し、俺を愛する人々に囲まれる。とても幸せな時間だった。だが、そんな日々は、悲しい事に、早く、早く、光のように過ぎ去ってしまう。

レーガンたちが嫁を貰い。

アイシヤたちが嫁いでいき。

老いない俺をフェイスチェンジのペンダントで隠し続け。

『信頼できる部下を集める』という王の最終試験を成し遂げたレーガンに玉座を譲り、

やがて孫が生まれ、

ひ孫が生まれ、

そして、別れのとかが来る。

「ごめんね、あんた。大好きだよ」  
「今までありがとう、愛する妻よ」

俺が63の夏にマチルダが。

「愛しています。何度でもいえます。わたしの、旦那様……」

「俺は、一人だけを愛せなかった。怒っているか？」

「いいえ、ちつとも。あなたの愛、わたし一人じゃとても受け止め

切れなかったもの。……なんて、嘘。ちょっとは怒ってますよ？」  
「ハハ……すまん、本当に」

71の冬にベアトリスが。

「大丈夫。愛してる……また生まれても、きっと愛せる……」

「ああ。いつか、また会おう。俺も、お前を愛せるはずだから」

84の秋にシャルロットが逝った。

三人の妻を失った俺は、テファとレミイをつれて領内の深い森の奥に小さな庵を作り、そこに隠居した。ペンダントで素顔を隠し続けるのに、どれほど老いても生き長らえる俺の姿を晒していく事に、疲れきっていたのだ。

一人老いてゆくテファを見るのは決して楽な事ではなかったが、彼女を愛する心は、彼女が愛してくれる心は変わらなかった。

102の夏、バーナードが逝き、その翌年、レーガンが逝った。

135の冬までには、孫達も逝ってしまった。葬儀には、顔を出せなかった。

そして、187の冬。

「ごめんなさい。わたしも、もうあなたのそばにいられないのね…

…レミイ、後を、お願い」

「お任せください。わたしも主様も、永劫を生きるもの。皆様の分までしっかりと、主様をお支えしますから」

「今でも愛してる。お前も、先に逝った皆も」

「……はい、わたし達のご主人様」

テファも彼女たちを追っていった。

皆一様に微笑んで逝った。老いる事さえないこのバケモノに。すっかり老いさらばえてしまった、だが俺にとってはこの上なく美しい笑顔で。

小さな庵に二人きり……一人と一匹だけ……どっちだ？まあ、レミイは両方該当すると言っていていい存在なんだが。まあ、二人きり、になると、惰性と使命が流れる静かな日々になった。ただ、時折どこから少年少女がやってきて俺の話を聞いていく。彼らは大抵、一人で来る。ごく普通の子供だったり、ほんの少し耳がとがっていたり、髪の色が青かったりする。だから俺は彼らに己の生き様を語り、彼らが歩く道に一つの指針を、参考程度に『人生とは、王とは何か』なんて哲学めいた事を語ったりもした。

……あれから一体何年が経ったのだろう。俺はテファを弔った一本の大樹の根元に寄りかかり、獣姿のレミイを抱きしめていた。尻尾は、無い。俺が覚えていた限りでは、尻尾が無くなってからのほうが一緒にいる期間が長い。すでに妖兽ではなく神獣だ。俺も、八百萬的な意味では神になっていると聞いていいんだろう。精霊も見えれば樹木の意味も悟り、獣の飢えに、空の嘆きに共感する。もう、人間であると主張するのには無理がありすぎるのは、確かだ。

「これ以上積むべき研鑽に心当たりがない」

「では、主様。いよいよ向かうのですか？」

「ああ、往く。俺を遣わした神の元へ。次に成すべき事を手に入れるために」

「お供します。それが主様との、皆様との誓いですから」

俺は唱える。この長すぎる人生の中で編み上げた一つの魔法を。思  
い出の傍で永遠になり、ここを訪れる彼らの為の指針になる魔法を。

~~~~~

俺は再び、あの真つ白な場所に来た。だが、今度は俺の姿を認識で
きる。

サンガとしての肉体の形に、巨大な一枚布を巻きつけたような古代
ギリシアだかローマだかの服装。そして、傍らに感じるレミイの魂。

「魂の管理者よ。ただいま、と言えいいのか？」

「ああ、おかえり。歪んだものよ」

重苦しい言葉が、どこからか帰ってくる。どうやら、まだ彼（？）
を認識するには至らないらしい。

「お前は使命と歳月によって神変を得た。流れに拒まれ、ただ永遠
である魂よ。一つの使命を果たした今、何を願う」

「まずは言葉を。俺が道を歪めた魂は、無事流れに乗っていったか
？」

「是。例外は神化したその獣の魂と、お前の魂のみである」

「以前俺がここに来てから、歪みは改善されたか？」

「是。されど創造者は省みぬ」

俺はレミイの魂をそつと抱きしめる。

「では往こう、新たな世界へ。俺はその為にこうして経験を積み、変化したのだから」

「望郷さえ捨てて修羅の道を行くか、歪んだ魂。いや、我が子よ。ならばせめて望み通り、その神獣と共に在るがいい」

声がそういうと、レミイの魂が俺の魂に混ざってゆく。なんとなくわかる。俺とレミイが、同一の根源を持つ存在になるのが。

「我が子よ。道を示そう。複数の世界を内包した世界。星光が友愛を照らす場所」

「……その名は次元世界なり、か」

「『大きな世界』を渡る為には肉体と追憶を失わねばならない。汝に残るのは、実感の残らぬ記録と、積み重ねた経験のみ」

「記憶が記録になる？……つまり、心が動かないオハナシになる、つてことか？」

それは、悲しい事だ。だが、ベアトリスもシャルロットも、マチルダもテファも、もう居ない。あれだけの歳月だ。全て人になれたとしても、既に100回以上は転生を果たしているだろう。俺だけがいつまでも彼女たちにしがみついている訳にも行かない。俺だけは永遠を生きていかなばならないのだから。

「それでも、行くよ。約束したんだ。守り続けて、決して立ち止まらない、と」

「そうか、我が子よ。汝の心、確かに我は見届けた。……彼の世界は人気が高い。平行世界に一つずつでは収まりきらず、創造者たちが放った魂と出会うようなこともあるだろう。神の末席となったとはいえ、創造者の力は強大。抗えぬときもある。気をつけるのだ」
「いや、人気って……まあいいや。ありがとう、俺の始まりよ」

俺の体になんとも言えない力がみなぎる。だがそれと同時に、忘れてしまう思い出に涙を流していた。

The end

#####

『聖樹の森』と呼ばれる大森林がある。はるか10リーグ先からであるうとはつきりと視認できる一本の巨大樹がある、大森林だ。その巨大樹『聖樹』の根元に、一つの石像がある。尾のない不思議な獣を抱く、かつて『永遠の賢者』と呼ばれた若い男の像だ。不思議な事に、『聖樹』の根がその像にそつと絡んで、一体化している。

ある国の王家には、この地を最低でも8回訪れる義務があると言う。生まれたとき、親に抱きかかえられて。

自我に目覚めたとき、親の後ろを歩いて。
成人したとき、初めて一人で。

婚姻を結んだとき、愛するものを連れて。

子供が生まれたとき、その赤子を連れて、子供が育ったとき、その子を案内して。

玉座や役職についたときに護衛を連れて。

玉座や役職を退いたときにもう一度、一人で。

その王家だけが、この像を『最初の王』と呼ぶそうだ。だがその王の統治は星霜の彼方であり、真実を知るものは最早無い。だが、彼らは自らの子に語る。語り継ぐ。

彼の王がいかに臣民を愛し、妻を愛し、国を愛したか。

その志の尊さを自分達は如何なる形でつないでゆくべきか。

信念を貫く事が、王である事がどれほど大変で、傲慢で、横暴である事か。

それを背負って生きていく覚悟を、自分達が持ちえるか。

そして石となった彼が座す台座に刻まれた、ある数字のことも、彼らは語る。

4
, 6 2 7
, 3 0 9

彼が巻き起こしたブリミル教殲滅と言う虐殺劇の、確認できた被害者の総数であった

終章／終わりと始まり。去るものと遺るもの。（後書き）

今までありがとうございます。これにて原作破壊命令、終幕とさせていただきます。

戦端が開いたあたりから描写が上っ面になってしまった事、深くお詫びいたします。次回作ではこの反省を生かし、もっと深く物語を掘り下げられるよう、精進する所存です。

「とうとう、おわりか。早いような、短いような。だがやりたい事はやりつくしたような」

うむ。修行中の話を書いてみようかとも思ったんだが、うまくまとまらなくてな。

「……まあ、しかたないさ。始めたときにはこんなに人気ができるなんて思わなかったものな」

ああ。トップから総合評価順で並べ替えて、キーワード『ゼロの使い魔』10位になるなんて夢にも思わなかったよ。

「これもひとえに皆様のおかげです。ご感想やご指摘をいただけなかったらもつと酷い話になっていたはずですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286/>

原作破壊命令

2010年10月15日11時33分発行